

花園大学国際禅学研究所

論叢

第十八号

目次

《翻刻・解題》「養叟和尚入室法語」について	飯島孝良	1
『摩醯首天伝』訳注記	林 鳴 宇	49
臨済宗の回向文 訳注 (二) — 尊宿送喪の念誦と回向文 (上) —	小川太龍	91
臨済宗の回向文 訳注 (三) — 尊宿送喪の念誦と回向文 (下)・尊宿臨時行事の回向文 —	丸毛俊宏	123
電子達磨#3 禅語漢語考釈支援システムに関して	富増 健太郎	(1)

《翻刻・解題》「養叟和尚入室法語」について

飯島孝良

〔解題〕

この史料は、永源寺に所蔵されてきたものである。冒頭に、徹翁てつとう義亨（大徳寺第一世、一二九五〜一三六九）の署名があるため、原題は「徹翁和尚入室法語 全」となっている。誤字・脱字がかなり目立ち、たとえば「鬚」を「頓須」と書いたり、「鎮州」を「陳州」と誤記するなどがみられることから、写本と考えられる。とはいえ、原本と思われるものも見出されておらず、貴重な史料といえる。これについて言及したものとして、飯塚大展「大徳寺派「入室行巻」について」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』第七八号、二〇二〇年、九三〜一〇三頁）に、これが貞治六年「二二六七」十二月十三日に始まる足利あしかが義詮よしあき（室町幕府第二代將軍、一三三〇〜一三六七）の初七日法要から四十九日法要（大練忌法要）まで、七日毎に行われた「入室」の語を記録したものである、そのごく一部を紹介している。本稿は、その全体を翻刻し紹介するものである。

入室参禅している者として、「僧」「尼」「居士」「官人」「毛頭」などの名がみえる。出家者のみならず居士も参じていたことのみならず、公職にある者も多く集っていたこともみえる。「毛頭」とは有髪の侍童のことを指し、寺に入ってから僧衣を着ても肉食している十歳前後の幼い男女で、このような侍童を室町期当時は「喝食」とも称した。上流階級の子が多く、僧名に改めるものの、金襴の帯や紅の裙に覆輪付きの衣

などを身につけ、化粧なども施していた。本来は勉学を課されるが、五山においては勉強だけでなく遊びに同行させたり、詩を作れば競って和韻してかわいがったりしていた⁽¹⁾。また、朝鮮の外交官・宋希璟^{ソンギヒョク}（二三七六〜一四四六）の『老松堂日本行録』でも「童の男女、寺に上るも髪を削らず、僧衣を着るも肉を喫^{くち}う。これ^{これ}を謂^いいて可^か乙^しと。其の年、十四五に至れば、乃ち髪を削る也。其^その土風、人乃ち男女を生めば則ち善き男女各一を擇^{えら}びて僧尼と為^なす也」〔童男女上寺不削髪、着僧衣喫肉。謂之可乙只。其年至十四五、乃削髪也。其土風、人乃生男女則擇善男女各一為僧尼也〕などと言及がある⁽²⁾。こうした存在は、大徳寺とその周辺にもみられたのであり、養叟の法孫で養徳院の開祖である實傳宗眞^{じつでんそうしん}（一四三四〜一五〇七）の『大弘禪師語録』には、或る寵愛を受けていた侍者が「玉帙^{ぎょくしゅう}」という雅号を賜り、漢詩を嗜んでその能筆を披歴した記録があるが、この玉帙を「少年」とも「毛頭」とも称している⁽³⁾。他にも、臨濟宗夢窓派で相国寺の僧・横川景三（一四二九〜一四九三）による『小補艷詞』においては、月関周透という喝食へ多くの艷詞が捧げられているが、ここで月関には「尊君」「佳丈」「美丈」「佳少」「尊契」などという敬称が付されている。こうした呼称は、いずれも美少年の喝食を指すものである⁽⁴⁾。

内容について触れると、「天上人間絶比倫」（三十五丁裏）といった句が『徹翁録』（大正蔵卷八一・頁二四四上）から引用されているなど、徹翁と弟子ないし在俗の参禅者による問答の記録かともみえる。安藤嘉則『中世禅宗における公案禅の研究』（国書刊行会、二〇一一年、三八九〜四三八頁）によれば、公案を課して個別に指導する「入室」という形態が、独参（個別的な指導）であったものが次第に全体に開かれ、在俗にも公開されるような形態になっていることを報告し、そうした状況を伝える徹翁ないし徹翁門下による資料を多く掲載している。確かにこれらの資料群には本資料と類似する点がかなりみられ、冒頭に記された貞治六

年の「初七日入室」から「同七七日」までの四十九日のあいだは、徹翁と会下との問答とみえるところである。だが、その後に「永享九年歲旦」となっており、この年には徹翁は存命ではない。そのため、冒頭の四十九日に関する記録以降は別物（もしくはこの四十九日法要の記録以降を本文とし、冒頭の入室記録はその前段として引用したもの）とも考え得る。ここから、この全体は徹翁のものというよりも、むしろ実際には養叟宗願（大徳寺第二十六世、一三七六〜一四五八）と弟子との問答と考えられる。というのも、問答の行われた日時として記されているのが永享九年「一四三七」や嘉吉元年「一四四一」などとなっているが、このとき徹翁は既に示寂しているため、当事者たりえない。また、「文安二年正月旦 禾上甲子七十」（二十九丁裏）や「文安四正旦 七十二歳」（三十二丁裏）とあるが、文安二年「一四四六」は養叟七十歳、文安四年「一四四八」は養叟七十二歳にあたる。こうしたことも勘案して、「徹翁和尚入室語」となっていた題名を「養叟和尚入室法語」とすべきものと考ええる。

読み進めると、当時の大徳寺でなされていた問答で挙げられた話頭が具体的に示されている。例えば、いわゆる「萬法不侶」話や「古帆未掛」話が頻出するが、これについて『大徳寺夜話』（『眼裡沙』）には「言外和尚、於萬法不侶話大徹大悟。養叟和尚、於古帆未掛悟徹也⁽⁵⁾」といい、言外宗忠（一三〇五〜一三九〇）が「萬法不侶」話で大悟し、養叟は「古帆未掛」話で大悟したという逸話を伝える。或いは「養叟和尚云、萬法話・栢樹子話ニ透徹セヌ者ガ、我慢情識ヲ起ス也⁽⁶⁾」といった一節がみえる。こうしたところから、養叟やその周辺では「萬法不侶」話や「古帆未掛」話が重視されていたことが示唆される。

なかには、「朝作紅顔、意旨如何。生。夕作白骨、意旨如何。死」（二十六丁表）という句もみえるが、これは蓮如（一四一五〜一四九九）のいわゆる「白骨の御文」にある「朝には、紅顔ありて、夕には、白骨とな

れる身なり(7)」を引用したものである。養叟や一休に関するのみならず、真宗のことばがみえるところに、室町期の禅門とその周辺の状況がうかがわれる。

前述のように、この史料には、僧・尼・居士・官人・毛頭(喝食)といった立場が問答に関わっていることが見受けられる。これに関連して想起すべきことは、養叟が大徳寺を支えるために堺などに教線を張り、新興都市民に入室参禅をゆるして支援を得ていたとされる点である。戦乱の度重なる応仁・文明年間にかけて、大徳寺の復興は喫緊の課題となるが、五山官寺保護政策の埒外で在地に展開する「林下」の系統のひとつとなっていたため、五山派よりも民衆と密接な関係を築いていた。養叟の熱心な活動で、十五世紀中葉以降には大徳寺派寺勢を回復する。だが、享徳三年「一四五四」、六十一歳の一休は久方ぶりに再会した兄弟子の養叟と深刻な口論となり、遂に絶交するに到る(8)。この頃、養叟の拠点であった陽春庵では都市民を相手に講義や入室参禅が行われ、法名や法語が与えられていた。こうした「安売」禅に憤った一休は、康正元年「一四五五」に養叟とその弟子たちを痛罵する書をもした——一休はこれを『自戒集』と題した。ここで特に問題視されたのは、巷間もてはやされつつあった印可状(師が弟子をみとめたとする証書)であった。「養叟和尚十四五年、比丘尼、商人ナンドニ、カナツケノ古則ヲラシエテ、得法ヲサセラレ」、田楽や座頭までもが「我ハ得法ノモノナリ」と自慢しているさまが暴露されている。宗門内の密伝であったはずの公案禅が、都市新興層のたしなみとして手軽に消費され、その印可証明を求めて香銭が多く交わされていたのである。一休は、養叟とその一派が垂示(講義)や入室などで「売禅」する有様を辛辣に批判し、養叟ほど人びとを迷わせる「大悪党ノ邪師」はいないと口を極めて断罪する(9)。『自戒集』に関する研究は、飯塚大展(10)、堀川貴司(11)、矢内一麿(12)らの研究があるが、研究論攷の数は必ずしも多いわけではなかった。これまで、

養叟ら大徳寺の主流派の布教活動がどのようなものであったか、この一休の『自戒集』からみられることが多かったが、「養叟和尚入室法語」はその実際を伝えるものともいえるのではなからうか。

もうひとつ、これと類似した史料がある。石田雅彦¹³⁾によつて、「仙岳宗洞答問二十一条」なるものが紹介されている。このなかで、堺の南宗寺と茶人たちが問答を行っているが、これは殆ど形式的なものになっているように見受けられる。つまり、「養叟和尚入室法語」にみられたような問答は、その後も多くの茶人や商人や武士などに開かれ、世俗との接点になっていった可能性がある。

これがなぜ徹翁の名を冠して伝えられたのか、またなぜ永源寺にのみ残されていたのか、不明な点も残されている。今後、一層の考究が求められる史料といえる。

〔翻刻凡例〕

- 一、改訂については、【 〃 】内に丁数および表裏（オ・ウ）を付記する。
- 一、翻刻にあたっては、異体字・略体字・別体字・俗字等、原文を忠実に再現することに努めた。ただし、省文等、活字用正字に改めたものもある。また、明らかな誤字は傍注の形で付記し、明らかな脱字は「 〃 」内に補う。
- 一、本文の理解に活かす意味で、適宜句読点を付している。
- 一、句の多くは冒頭に「一」と振つてはじまるが、なかには「二」と振られたものもある（別解の意か）。翻刻にあたっては「(一)」と表記している。
- 一、その他、補足情報は脚注に付しているが、本稿が翻刻であることを考慮して最小限に留める。

〔本文〕

【一丁才】貞治第六臘月十三日為特進垂相征夷大將軍宝篋院殿瑞山權公初七日入室

徹翁和尚

拳、臨濟上堂云、一人在孤峰頂上無出身路、一人在十字街頭亦無向背、那箇在前那箇在後。不作維摩詰、不作傅大士、意旨如何。

一、僧云、疑殺天下人。

禎

一、僧云、作賊人心虛。師云、好話不喫棒。僧云、謹謝師證明。

石

一、僧云、指柳樹、罵槐樹。

幢

一、僧云、蛇入竹筒。

蔡

一、僧云、爛泥裡有棘。

湛【二丁ウ】

一、僧云、這賊。

智

一、僧云、巡人犯夜。

範

一、僧云、懸羊頭賣狗肉。

覺

同二七日

拳、僧問、岩頭古帆未掛時如何。頭云、小魚吞大魚。僧又問、掛後如何。頭云、後園驢喫草、意旨如何。

一、長鯨碾月珊瑚枝、鸞舞風玻璃鏡。豐干騎底大蟲元是南山白額。

禎

一、火裡酌清泉。七九六十三。

湛

一、不免拖泥帶水、截斷紅塵水一溪、衝開碧落松千尺。

喜【二丁才】

一、寸長尺短。前三々、後三々。

一、雲在領頭閑不徹、水流澗下太忙生。

蔡

一、昨夜金烏飛入海、曉天依旧一輪紅。

越

一、破鏡不重照裂破。打云、前語不助後語。

貝

一、兔馬有角、牛羊無角。

照

一、皈依佛法僧。六々三十六。

守

一、頂上無骨、領下有鬚。同坑無異土。

智

一、六月紛々雪下。耳朶兩片皮禪。

範

一、頂上無骨、領下有鬚。兩々三々。

覺

同三七日 古帆語

一、捨明珠弄魚目。將錯就錯。

禎【二丁ウ】

一、披毛入火聚。九々八十一。

石

一、大尽三十日、小尽二十九。打云、半片道德。

幢

一、白馬入芦花、彩鳳舞丹霄。師云、半片道德、半片不是。

喜

一、向北看南斗、意旨如何。向南看北斗。師云、能受用始得。

富

一、大底大、小底小。一彩兩賽、意旨如何。前三々、後三々。

一、虎体元斑、有利無利、不離行市。

桂

一、兔角杖、龜毛拂。冰河生焰、鉄樹抽枝、意旨如何。万里一条鉄。打云、不是。

守【三丁才】

一、雨中看杲日。泥團土塊。 智

一、去却一拈得七、山上鳥海底魚、意旨如何。九々元來八十一。 範

一、橋流水不流、人從橋上過。七九六十三。 覺

同四七日 古帆話

一、小魚吞大魚、大魚大、小魚小。打云、知行履。 禎

一、眼裡瞳人面前人。九々本來八十一。 蔡

一、指東答西、答東畢竟如何。泥牛吼月。師云、何不道木馬嘶風。僧擬議。打云、去々。

一、赤肉白骨。披毛入火聚。師云、小魚吞大魚、與後園驢喫草、是一是二。七九六十三。

之

一、土面灰頭、灰頭土面、畢竟如何。七九六十三。 佐

一、狂狗逐塊、師子咬人、三々九。狂狗—師子—畢竟如何。耳朶兩片皮—骨。 用

一、鉄船上浮、意旨如何。閑葛藤。 覺

同五七日

瀉山示衆云、有句無句如藤倚木、意旨如何。

一、上無攀仰、下絕已躬。打云、不是々々。 禎

一、作賊人心虛。 石

一、眼看東南、心在西北。 湛

一、碍人荆棘長無根。 喜

一、耕地種蒺藜、曲心不少。 蔡【四丁才】

一、懸羊頭賣狗肉、謾人不少。 佐

一、漏逗不少。師云、漏逗个什麼。僧擬議。打云、不是言。

一、扶桑夜半日頭明。勘破了也。勘破个什麼。僧云、瀉山謾却人。師云、那裡是他謾人处。僧云、也是和尚謾人。打云、非是汝語。

一、虎斑易見、人斑難見。師云、什麼人斑僧。也是禾上不少。師打、非汝語。

一、喚鐘為甕、意旨如何。曲不藏。打云、不是々々。 瑞

同六七日

龐居士問、馬大士云、不与萬法為侶、此什麼人。大師云、待汝一口吸尽江西水。却向海道、意旨如何。

【四丁ウ】

一、因。逢着渠。泥牛吼月破澄潭月。 禎

一、負背載胸、和氣吐露了也。師云、吐露底甕。僧云、一言已出、馬難追。師打云、一句合頭語、萬劫繫驢橛。 石

一、上破天、下穿地。一句道着。 幢

一、大坐宇宙、彩鳳舞丹霄。 湛

一、充塞六合、三脚蝦蟆跳上天。打云、能受用始得。 和

一、上拄天下、下拄地。鉄船水上浮。 茶

一、觀面相呈、恩大難酬。師云、難酬底甕。僧云、萬里一条鉄。師打云、不是々々。

同七七曰【五丁才】

瀉山示衆云、有句無句藤倚木、〔樹〕意旨如何。疎山云、樹倒藤枯句飯何處、意旨如何。

一、荊棘林裡、一条古路、只知事從眼前過、不覺老從頭上來。師乃打。 禎

一、這賊。不知明珠還作瓦礫。 石

一、曲不藏直、當面差過。 湛

一、鉄蒺藜、〔藜〕意旨如何。曲灣々、〔灣々〕打云、能受用始得。提曲心已露、〔已〕貧看天上月、失却掌中珠。 越

一、塌薩阿勞、謾人不少。

一、〔又〕逐流鶯過短牆。

一、指槐樹、罵柳樹、只見錐頭利、不知鑿頭方。師【五丁ウ】打云、非汝語。 覺

入室

師問云、虎丘因僧問、九句禁忌事如何、意旨如何。

一、僧云、古佛家風。師云、意旨如何。僧云、初三十一。師曰、虎丘答云、理長即就、意旨如何。僧云、

將錯就錯。師曰、意旨如何。僧云、中九下七。師打云、好受用始得。 溟

一、孟夏漸熱。師云、意旨如何。僧云、一三三四五、適來道了。師云、道什麼。僧云、黃河向北流。打云、

好受用去。 軻

一、楊瀾尤里。師云、意旨如何。僧云、斑々駁々。師打云、不是々々。 哲【六丁才】

一、乾三連、坤六斷、意旨如何。僧云、眼上負。去却一拈得七。打云、水飯大海作波濤。 聞

一、無繩自縛、意旨如何。知而故犯、不是々々。 松

一、雨後青山青轉青。鷄寒上樹、鴨寒下水。打曰、坐看雲起時。

一、彩鳳舞丹青、意旨如何。僧云、達磨元來觀自在。僧云、僧堂佛殿厨庫山門、意旨如何。僧云、七九六

十三。打曰、好与麼去。

一、三尺竹篋、七尺柱丈_(杖)、意旨如何。僧曰、小魚吞大魚、意旨如何。僧云、耳朶兩片皮。打曰、驢拭湿処

尿。正

一、居士云、說甚安居、說甚禁足、意旨如何。士云、上無攀【六丁ウ】仰、下絶已躬。打云、半边道着、

半边不是。清

一、一手左、一手右、天地同根、万物一体、意旨如何。士云、南斗七、北斗八。打云、行矣。欽焉。善

一、九々八十一、意旨如何。士無對。打云、先言不副後語。珠

一、赤肉白骨、意旨如何。士云、六々三十六。皈依佛法僧。打曰、好受用始從。

一、螻蛄眼裏五須弥、後園驢喫草。打云、不須辛董竟門。

一、僧豎无兩拳、意旨如何。僧開兩拳云、展成掌。僧云、富嫌千口少、貧患_(患)一身多。師曰、僧又問云、六

根【七丁才】不具底者還得禁足也否、此意旨如何。僧云、盲聾瘡癩。師曰、丘云、穿過鼻孔、意旨如何。

僧云、兩々三々旧路行。打曰、行到水窮処。

又

師問、南陽忠國師三喚侍者、意旨如何。

一、僧云、一句道着。師又曰、耽源應真三度應諾、又如何。僧云、向南看北斗。打云、一句打着、一句打

不着。哲

一、學者難弁。打云、不是々々。 金

一、賊心已露、意旨如何。僧云、無風起浪。打云、半辺道着。 貞

一、無孔鉄槌面前拋向。僧云、衆生顛倒、迷已逐物。打云、前語不副後語。 芳【七丁ウ】

一、月白風清、意旨如何。車不橫推。僧云、清風明月。打曰、一句道着、一句不是。 熙

又 永亨九年歲旦

師問曰、德山因岩頭問、是凡是聖、意旨如何。

一、僧云、一拶當機怒雷吼。師又問云、德山即喝、意旨如何。僧云、驚起須弥藏北斗。打云、好々。

一、句裡藏鋒、虚空倒奔。打曰、与麼。

一、龜毛兔角種眼裡、分破華山千万重。打云、与麼々々。

一、言猶在耳。師云、意旨如何。僧云、荊棘參天、七花八裂。打曰、与麼々々。

一、響、意旨如何。僧云、誰知遠烟浪別有好思量。峻【八丁才】、意旨如何。僧云、得人一牛、逐人一馬。

打云、与麼去。

一、舌頭風寒。師子一吼野干腦裂。打云、恁麼々々。

一、壁立万仞、藏身霧影、意旨如何。僧云、閃機電轉。打云、欠一着。

一、龍戲滄「海」、虎嘯南山。打云、非阿你語。

一、酒中鴆「毒」、密裡砒「霜」、鑑在機前。打云、噯。

又 小春朔

師問云、德山因岩頭問、是凡是聖、意旨如何。

一、僧云、眼看東南、心在西北。師又問云、德山即喝、意旨如何。僧云、崖崩石裂。打云、与麼受用始得。

一、斫額望天衢、意旨如何。僧云、心苦。好知休咎弁【八丁ウ】機宜。打云、節去菊猶存。

一、竿頭絲線從君弄、不犯清波心自殊。打云、与麼去。

一、響。師曰、意旨如何。云、擘面殺人^{〔眨眼〕}不^{〔眨眼〕}眼^{〔眨眼〕}眨。打曰、与麼去。

一、向南看北斗、虚空倒奔。打云、因苗弃地。

一、誰敢近傍鉄船三百丈、不畏浪頭高。打云、与麼去。

一、草賊大敗、無語。打云、一句打着、一句打不着。

一、子不孝、意旨如何。僧云、暗裡按劍父不慈、意旨如何。僧云、拳來踢報。打云、好个消息。

又 永亨九年冬夜

師問云、南泉斬猫兒、意旨如何。【九丁才】

一、僧云、鶴飛千点雪。師又問云、趙州頭上戴草鞋、意旨如何。僧云、錦上鋪花。打云、与麼去。

一、鷄寒上樹、意旨如何。一二三鴨寒入水^{〔下〕}。打曰、彼此。

一、一夜落花雨、滿城流水香、意旨如何。何人貪智。短肉重千斤、意旨如何。七九六十三。打云、一任。

一、日面佛、月面佛、意旨如何。入驢胎馬腹去。雪覆千山、意旨如何。朝三暮四、意旨如何。五々二十五。

打云、退後。

一、僧以坐具戴頭上、以脚踏坐具。打云、与麼去。

一、三冬枯木花、意旨如何。六々三十六。一苦一樂一逆一順。打云、恁麼々々。

一、家富小兒橋^{〔驢〕}、意旨如何。乞兒貧小利、国清才子貴、【九丁ウ】意旨如何。鳥長三、黑李四、意旨如何。

九九八十一。打云、与麼々々。

一、鼻血孔淋漓、意旨如何。一冬二冬、叉手當胸。師問云、〔福〕皈宗斬虵子、是同是別。僧云、泊平分差異。頭上青灰三五斗、意旨如何。雪色白轉白、意旨如何。九々八十一。打云、恁麼々々。

又 臘八

師問云、古德垂語云、世尊見明星悟道、未審受誰恩力、意旨如何。

一、僧云、昨夜寒風起、今朝括地霜、意旨如何。釈迦弥勒無分。打云、〔冷〕地裡有人覷破。

一、臘雪連天白、打云、灼然。

一、和盤推出夜光珠、意旨如何。清風明。打云、恁麼。【十丁才】

一、車不橫推、意旨如何。前村深雪裡、昨夜一枝開。打云、不妨。

一、銀山鉄壁、意旨如何。天上星、地下樹、意旨如何。斬釘截鉄、意旨如何。青天白日。打云、与麼。

一、不知恩不知寇、意旨如何。釈迦弥勒渠奴。打云、何不道釈迦弥勒阿誰。

一、時節已至、其理自彰、意旨如何。不借春風力、桃花一樣紅。打云、恁麼々々。

一、蘆花兩岸雪、意旨如何。月白風清。打云、天上天下。

又 四月四日於白河因奠大師忌

師問云、僧問雲門、如何是諸佛出身處。門云、東山水上行。一句道将来看。【十丁ウ】

一、僧云、鉄船水上浮。師曰、圓悟住天寧、日峰云、天寧不然、若有人問對他、道薰風自南來、殿閣生微涼。試下語看。僧云、風從花裡過來香。打云、与麼々々。 哲

一、斬釘截鉄、月明四海。打云、去矣。

金

- 一、上下四維無等匹、意旨如何。彩鳳舞丹霄、一畝地三蛇九鼠、意旨如何。清風明月。打云、去矣。貞
- 一、石從空裡立、火向水中迸。(焚)滿架薔薇一院香。打云、去去。掬
- 一、橋流水不流、意旨如何。鉄樹開花。桃花紅、李花白。打云¹⁵。
- 一、蚊子咬鉄牛。春色無高下、花枝自短長、意旨如何。天【十二丁才】高地厚。打云、行矣。
- 一、八角磨盤空裡走。花落樹梢綠。打云、与麼。芳
- 一、露柱拍手石人點頭。水是水、山是山。打云、合良恁麼。同
- 一、海底泥牛吼、雲中木馬嘶。風吹紫荊、色与春庭暮。打云、恁麼可受用。
- 一、尼云、泥牛月吼、木馬嘶風。尼無語。打云、到江吳地尽、隔岸越山多。祐
- 一、尼云、露。尼無説。打云、默即得。奇
- 一、尼云、生鉄已前、意旨如何。柳緑花紅。尼無語。打云、一句道着、一句不着。性
- 一、尼云、豎窮三際、横該十方、意旨如何。鉄蒺藜。(藜)松枝拂【十二丁ウ】尽蒼苔露。打云、与麼々々。久
- 一、僧云、無風荷葉動、決定有魚行。滿地殘紅春色去、澆天漲緑夏初來、意旨如何。雨過竹風清。打云、恁麼々々。漚
- 又 因大圓鏡公禪定門忌日於白河
- 師問、趙州因狗子還有佛性也否。州云、無、意旨如何。
- 一、僧云、大阿宝劍本是生鉄。師云、僧云、蠢動含靈皆有仏性、因甚狗子還無。州云、渠有業識性故、意旨如何。僧云、烟霞不遮梅香。打云、好受用去。

一、確背生花、意旨如何。上無攀仰、下絕已躬、松直棘曲。打云、徒勞卜度。

一、黑糝皴地、意旨如何。仏祖不識蛇入筒。打云、知心能幾人。【十二丁才】

一、當陽顯露、意旨如何。鉄櫃子、白拈手段、打云、与麼々々。

一、一滴水一滴凍、意旨如何。一々天真、意旨如何。通方作略。打云、不是々々。

一、有中却有無、々中却有々。打云、不是々々。

一、鉄蒺藜（藜）。不許夜行、投明須到。打云、行矣々々。

一、銀山鉄壁。荆棘林。打云、好受用始得。

一、握驪珠鑑物。々々流機（機）。打云、不是々々。

一、鷓白鳥黑、意旨如何。本自天然。打云、不是々々。

一、無孔鉄槌、魚行水濁。便打云、道着恰好。

一、火生蓮華、雪長芭蕉、意旨如何。天無四壁、地絕八維。（二）袈裟底下藏毒藥、却教佛心受沈埋、意旨

如何。瞎却陳州一城人眼「去在」。打云、好受用去。 誕【十二丁ウ】

一、鉄丸無縫罅。賊心已露。打云、漏逗不少。

一、鉄團圓。前箭輕、後箭深。打云、与麼々々。

一、跣足踏冰雪、正知徹骨寒。打云、不是々々。

一、消得竜王多少風。口甘心苦。好受用去。

一、官人云、問不容髮、意旨如何。万里一条鉄、州惑幾人來。打云、須弥南畔、卷尽五千四十八。

一、居士云、看脚下、意旨如何。竄地作蛇。口甘心苦。師云、前來有人道、更道々々。士云、晋文公偽（誑）而

不正。打云、行矣。欽旃。 深

一、尼云、截斷紅塵水一溪。打云、不是々々。【十三丁才】

一、尼云、鉄蛇横古路、換面改頭能幾人。打云、好受用。 久

一、僧云、我見灯明佛、本光瑞如此、意旨如何。看眼睛。(二) 嘎、意旨如何。蕭何賣却假銀城。打云、与麼去。

又

一、師問曰、馬大師因龐居士問、不与方法爲侶者是什麼人、意旨如何。

一、僧云、撐天拄地。師云、大師云、一口吸尽西江水、意旨如何。元正啓祚、萬物咸新。打云、三世諸佛立地聽。

一、風吹日炙、舌拄上齶。打云、特地乾坤。

一、逼塞乾坤、難爲下口、意旨如何。鉄團圓。打云、好可受用。

一、天上天下、劈腹「剋」心。打云、日月又新。【十三丁ウ】

一、大地載不起、崑崙吞棗。打云、天上天下。

一、面前是佛殿、山門背後是寢堂方丈、意旨如何。千聖跳不出、獨脱衲子、意旨如何。乙卯寅、意旨如何。背立、意旨如何。辜負了。打云、好个消息。

一、和風塔在玉欄干。烏黑鶴白。打云、恁麼々々。

一、古路草漫々、婆子喫胡椒。打云、百花青釘爲誰開。

一、堆山積岳。打云、欠少什麼。

一、毛頭云、仰之彌尊、鑽之彌堅。^{〔高〕}一槌兩當。打云、春入千林剷花。

一、僧云、眨眼眉毛重。車不橫推。打云、行矣。

一、囚。言猶在耳。打云、明皓々、暗昏昏々。【十四丁才】

又

師問云、岩頭因僧問、古帆未掛時如何。頭云、小吞大魚、意旨如何。

一、僧云、冰長船高、泥多佛大。師云、僧云、掛後如何。頭云、後園驢喫草、意旨如何。僧云、六々元來

三十六。打云、好受用可始得。

一、白雲深處金龍跳。前三々、^{〔後〕}五三三。打云、莫輕。

一、日面佛、月面佛。錦上鋪花。打云、莫輕。

一、眼上眉、鼻下唇。杖頭挑日月、脚下太泥深。便打。

一、彩鳳舞丹霄、意旨如何。奴兒婢慙。打云、不是。

一、点、意旨如何。養子之縁。打云、乱莫針錐。【十四丁才】

一、南地竹北地木、意旨如何。閑葛藤。一畝之地三蛇九鼠。打云、莫輕。

一、頂上無骨、額下有鬚。前三々、後三々。師云、前來有人云、^{〔道〕}更道。僧云、九々元來八十一。打云、不

輕多。

一、頭上一堆塵、脚下三尺土。打云、亦不少。

一、舉起坐具、意旨如何。扇子踈跳上三十三天。築著帝釈鼻孔、意旨如何。肉重千斤。千年^{〔滯〕}滴貨、意旨如

何。三生六十劫。便打。

一、龍生童子、鳳生鳳子、意旨如何。去却一拈得七。和尚再興先師鳳、意旨如何。三々九。打云、勸君更
尽一杯酒、西出陽關無故人。

一、主山高、案山低、意旨如何。閑叟。南山燒炭北山紅、意旨如何。【十五丁才】上無攀仰、下絕已躬。打
云、不是。

一、一二三、上中下。打云、引得黃鶯下柳條。

一、達磨元來觀自在、淨名元是老維摩。打云、行矣。欽旃。

一、雲在嶺頭閑不徹、水流礪下太忙生。打云、時人見「此」一株花、如夢相似。

一、毛頭云、師子咬人、狂狗逐塊、意旨如何。五々二十五。打云、非阿你語。

一、毛頭云、車不橫推、意旨如何。青山青、「山」青水源〔緑〕。逐打。

一、尼云、船高春水波、皈依佛法僧。打云、東西南北、皈去來。

一、僧云、佛是幻化身、祖是老比丘、意旨如何。將謂胡鬚東、更有赤鬚胡〔赤〕。果滿菩提園〔園〕、意旨如何。一九
与二九、相逢不出斗〔斗〕。【十五丁ウ】打云、依旧一年三百六十日。

又

師問曰、瀉山懶禪師垂示云、有句無句如藤倚樹、意旨如何。

一、僧云、眉間掛劍、衲裏藏鋒。師云、疎山聞得云、忽然樹倒藤枯句、皈何处、意旨如何。僧云、貧看天

上「月」、失却掌中珠。打云、好受用始得。

一、少賣弄。打云、得本患末〔患〕。

一、眼看東南、心在西北。只見錐頭利、不知鑿頭方。打云、灼然々々。

一、兩頭三南、錯。打云、好可受用。

一、五逆人聽雷、意旨如何。許老胡知不許老胡會。將謂是【十六丁才】个人、意旨如何。識取鉤頭意、莫認定盤星。打云、恁麼可受用。

一、捉敗了也、意旨如何。偷楚号「而斫」楚營。咬人屎橛、不是好狗。打云、去々。

一、懸羊頭壳狗肉、負命者上鉤來。打云、好受用始得。

一、疑殺天下人、從者裡來底少、意旨如何。只見一半。打云、与麼。

一、也奇怪、意旨如何。這老賊果然、意旨如何。敗闕不少。打云、与麼々々。

一、嶮、意旨如何。荊棘參天、蒺藜藜滿地。難分雪裡、粉難弁黑中煤、意旨如何。一親一疎。師云、那个是

親、那个是疎。僧云、擔板漢。打云、与麼々々。

一、毛頭云、鉄蒺藜藜、意旨如何。曲彎々。又逐黃鶯過短牆。便打。

一、官人云、爛泥裡有棘。昔日有某甲疎山与一掌。師云、疎山有甚過。官便喝。師云、疎山那。官云、禾

上莫叮嚀【十六丁ウ】好。打云、將謂俗漢。

一、居士云、釣竿戴盡重又栽竹、迷頭認影。打云、去々。

一、澄潭不許蒼龍蟠、意旨如何。抱賊叫屈。死水何曾振古風。打云、与麼去。

又 永亨九年上巳

師問云、雲門大師云、長連床上有粥有飯、正當恁麼時。試下觜看。

一、僧云、三个胡孫夜簸錢、意旨如何。朝三莫四、意旨如何。閑叟。打云、莫用將去。

一、深潭魚三級竜、意旨如何。乾三連、坤六斷。打云、過也。 貞

調

一、赤肉白骨。打云、恁麼。 金【十七丁才】

一、山上鯉魚、水底蓬塵。打云、臭肉集蠅。

一、三句可弁、意旨如何。豎窮三際、橫談十方、意旨如何。彩鳳舞丹霄、意旨如何。六々三十六。打云、争漆桶。 隆

一、閑葛藤。打曰、泥團土塊。

一、提起坐具、意旨如何。苦。打云、行矣。

一、碼碯珠玕、意旨如何。珠珠碼碯、意旨如何。隨波逐浪。打云、恁麼々々。

一、後園驢喫草、意旨如何。五々二十五。打云、与麼。 楊

一、每日上山三五轉、意旨如何。兩々三々旧路行。打云、与麼。 芳

一、官人云、三冬枯木花、九夏寒岩雪、意旨如何。南地竹、北地木。打云、好受用。

一、居士云、懷州牛喫草〔丞〕、益州馬腹脹、意旨如何。陰去陽来。打【十七丁ウ】云、一二三。 五郎

一、鉢盂口向天、意旨如何。百年万年有兩仏骨、意旨如何。九々元来八十一。打云、今日普同供養。 熙

又

師問曰、翠岩真禪師夏末示衆云、一夏已来、為兄弟東說西話。看翠岩眉毛在麼、意旨如何。

一、僧云、指柳樹罵槐樹。師云、長慶云、生也。又作麼生。僧云、桃花紅、李花白。打云、道着恰好。

一、明頭未顯暗頭明。打云、不是々々。

一、曲如鈎。打云、一句使得。

一、無叟生、意旨如何。碍人荆棘從無根長。風颯々水冷々。【十八丁才】打云、恁麼々々。

一、懸羊頭賣狗肉。話盡山雲海月情。打云、恁麼去。

一、言猶在耳、意旨如何。北斗南星位不殊、意旨如何。蛇入竹筒、清風明月。打云、七分苦、三分甘。

一、眼觀東南、心在西北、意旨如何。曲心不少、風清月白。打云、与麼去。

一、九夏雪花翻_飛。打云、不是々々。

一、腦後見腮莫共往来、意旨如何。中毒者知毒用。打云、一有多種、二無兩般。

一、逐塵者不見山、意旨如何。露堂々。打云、不是々々。

一、不信道、意旨如何。面赤不如語直。眉毛橫眼上、意旨如何。月在青天水在瓶。打曰、好恁麼者。【十八

丁ウ】

一、官人云、咲中有刀、意旨如何。毒藥難弁、意旨如何。喝打云、不是々々。

一、黃河從源頭濁了、八字分、意旨如何。雲在嶺頭閑不徹。打云、一句道着、一句不是。

又

師問曰、臨濟上堂云、一人在孤峰頂上無出身路、一人在十字街頭亦無向背、那个在前、那个在後。不作維

摩詰、不作傳大士、意旨如何。

一、指柳樹、罵槐樹。打云、從來疑着這漢。金

一、竜戲滄海、虎嘯南山。打云、天下衲僧跳不出。貞

一、八角磨槃空裡走、意旨如何。木馬嘶風、意旨如何。無孔鉄鎚。打云、不是。

一、嶮、意旨如何。爛慢葛藤拽不斷。打云、恁麼領去。芳【十九丁才】

一、巡人犯「夜」。打曰、与麼々々。

一、鉄蒺藜^{〔藜〕}、意旨如何。作賊人心虚。打曰、好語。 熙

師問曰、南陽忠國師三喚侍者、意旨如何。

一、僧云、一句道着。師云、耽源真禪師應諾、意旨如何。僧云、面南看北斗。打云、一句打着、一句不是。
一、學者難弁。打云不是。

一、賊心已露、意旨如何。無風起浪。打云、半邊道着、半邊不是。

一、無孔鉄鎚、抛向面前。衆生顛倒、迷已逐物。打云、前言不副後語。

一、月白風清、意旨如何。車不橫推。清風明月。打云、一句道【十九丁ウ】着、一句不是。

又 於贅河^{〔川〕}德禪院永享十二歲旦

師拳曰、臨濟因僧問、如何是佛法大意。下語將來看。

一、僧云、斫額望天衢。師云、濟即喝、意旨如何。僧云、斬釘截鉄。打云、一句道着、一句不是。

一、得其便喝。寒松一色千年別、桀老拈花萬國春、意旨如何。砒礪^{〔砒〕}不她鉄漢。打云、放過一着。紅入桃花嫩、青皈〔柳〕葉新、意旨如何。不識。打云、不是々々。

一、木鶏夜半蛋。打云、更一般。

一、作家禪客、意旨如何。似虎靠山。喝。畱闕作家。打云、与麼。

一、去簫韶九成、喝鳳^{〔鳳〕}々來儀。打云、学語流。【二十丁才】

一、毛頭云、消浚喝^{〔峻〕}。打云、非阿你語。

一、僧云、和氣靄然、意旨如何。人斑^{〔斑〕}維見、喝。驚人青色^{〔春雪〕}不須多。打云、恁麼去。

又

師拳曰、臨濟因有一尼來參、濟便問云、善來惡來下語。時將來看。

一、僧云、勘破了也。搵云、勘破个什麼。僧云、觀機無改路。師云、尼便喝、意旨如何。僧云、嶮。打、与麼去。

一、陷虎機。(二) 来風深弁。打云、恁麼去。

一、「清」風生八極、老虎出南山、意旨如何。驗人端的处、狸能伏狗。(豹) 打云、恁麼受用。【二十丁之】

一、虎嘯南山、龍戲滄海。打云、与麼去。

一、改頭換面、意旨如何。響。来機善應。打云、与麼。

一、三分甘、七分苦。(二) 我也不識。打云、一句道着、一句(16)。

一、不是。言中有響。弁了也。打云、恁麼々々。

一、龍得水時添意氣。(二) 虎逢山色長威籜。打云、与麼去。

一、居士曰、地襟見肘。(捉)(二) 探竿影草、吾宗無語。打曰、前語不副後語。

一、僧曰、機奪機、毒攻毒。(二) 有問有答。打曰、与麼去。

又 永享十二冬節廿日就大用庵

師問曰、德山因岩頭問、是凡是聖。(試) 載下一轉語看。

一、僧曰、慣戰作家曰、德山便喝、意旨如何。擊「碎」驪龍頷下珠。師便打。【二十二丁才】

一、舌「頭」有骨。(二) 太嶮生。師乃打。 金

一、威風凜々、逼人寒。(二) 官馬相踏。師乃打。 貞

一、咩々、意旨如何。霜。(二) 衝破琉璃。師便打。 隆

一、龍戲滄海。(二)嶮。師乃打。 顯

一、子不孝。(二)父不慈。師便打。 芳

一、如牛無角。(二)似虎有翼。師乃打。 穎

一、須弥跽跳。虚空迸裂。師乃打。 熙

又

師問曰、馬大師因龐蘊居士問、与方法不侶者是什麼。請首座下一轉語看。

一、僧云、拋向面前。師便打。 叔【二十一丁ウ】

一、夜半正明、天曉不露。打云、半邊道着。 金

一、滿室堆席。師便打。 真

一、一把柳絲収不得、和風搭在玉欄干、意旨如何。撐天拄地。師便打。

一、大王萬福、意旨如何。盖天盖地。師便打。 顯

一、經行若坐臥常在於其中、意旨如何。手舞足蹈。師便打。 楊

一、夜深共見千岩雪、意旨如何。乾坤擎出白漫漫、意旨如何。堆山積岳。師便打。 芳

一、填溝塞岳。師便打。 顯

一、毛頭云、普。師便打。 梅

一、僧云、胸馱背負。師便打。 熙【二十二丁オ】

又 嘉吉元年結制日

師問曰、臨濟上堂云、一人在孤峰頂上無出身路、一人在十字街頭亦無向背、那个在後。不作維摩詰、不作

傳大士、意旨如何。

一、僧云、爛泥裡有棘。師便打。

有隣德

一、鉄蛇橫古路、意旨如何。澄潭不許蒼竜蟠。打云、掘地深埋。

叔

一、懸羊頭賣狗肉。師便打。

金

一、明修棧道、暗渡陳蒼。師便打。

貞

一、半開半合。

澄

一、路從平處嶮、意旨如何。賊。打云、好語不喫棒。

顯

一、自作自受漢、意旨如何。一句曲含千古勻、(題)萬重雲碍月【二十二丁ウ】來初。師便打。

讚

一、鉄蒺藜(藜)、意旨如何。阿魏無真、水銀無假、意旨如何。賊心已露。打云、堪喫棒。

芳

一、現半身。打云、何不現全身。

一、指柳樹、罵槐樹。打云、巡人犯夜。

熙

又 嘉吉元冬節

師問曰、僧問、岩頭路逢猛虎時如何。頭云、撈、意旨如何。

一、僧云、露。師便打。

溟

一、無孔鉄鎚、意旨如何。荊棘林裏一条古路。師便打。

叔

一、深弁來風。師便打。

金

一、威風凜々逼人寒、意旨如何。牙如劍樹、口似血盆。師便打。

貞【二十三丁才】

一、好一撈。師曰、如何是撈。僧曰、覲機無「改」路。師便打。

松

一、不入虎穴争得虎兒、意旨如何。施閃電機、用霹靂手。 讚

一、虎斑易人斑難見、意旨如何。今日遭一口。師便打。 隆

一、咩々、意旨如何。山岳起「舞」。師便打。 影

一、猛虎一声山月高、意旨如何。凜々威風西百州。便打。 芳

一、箭鋒相柱〔註〕。師打云、非阿你語。 叔

一、弁了也、意旨如何。知機冥〔宜〕。師便打。 昌

一、毛頭云、官「馬」相踏。師云、非阿你語。 梅

一、居士云、撐天拄地、意旨如何。荊棘參天、蒺藜〔藜〕滿地。師便打。 善

一、居士云、不錯爲岩頭。師打云、將謂是這俗漢。 嶺

一、僧云、開「口」見膽、意旨如何。石火電光存機變、堪嘆人來將虎【二十三丁ウ】鬚。師便打。 熙

後來圓悟拈云、天無四壁、地絕八維。直得萬箭攢心、千鎗著体也敵〔他〕它。這一機不得、還委悉麼。六々元來

卅六。師曰、意旨如何。

一、僧云、耳朶兩片皮。 溟

一、乾三連、坤六斷。 貞

一、豎窮三際、橫該十方、意旨如何。雨中看杲日、火裡酌清泉。師曰、驢挾湿処〔屎〕。 讚

一、魚行水濁。 顯

一、還竜漏尾。 芳【二十四丁才】

一、靈龜曳尾。 金

一、截斷紅塵水一溪。 熙

師代云、兩賽一彩、意旨如何。師云、知音自有松風和。

嘉吉二年元旦就大用庵入室

師問曰、龐居士問、馬大師云、不與萬法爲侶者是什麼人。試下一轉語看。

一、一人居日下、不與衆人同、意旨如何。突出難弁。便打。 如意庵叔

一、僧云、因、意旨如何。面前底。師便打。 溟

一、天上天下。師便打。 金

一、山擎海涵〔還〕。師便打。 貞

一、看脚下。師便打。 澄【二十四丁ウ】

一、作竜昇天、意旨如何。手舞足蹈。師便打。

一、頭上漫々、脚下漫々。師便打。 春

一、撐天拄地。師便打。 祐

一、萬象之中独露身、意旨如何。看脚下。師云、前來有人爲〔道〕、更道々々。僧云、有眼不見。爲什麼不見。

僧無語。打云、去去。 椿知客

一、萬仞峯前独足立。師便打。 頻

一、逼塞頭上。師便打。 昌

一、當軒大坐。師便打。 芳

一、毛頭云、手舞足蹈。師云、更道々々。無語。打云、去々。 梅

一、舉步踏着、伸手触着。師便打。 熙

又【二十五丁才】

師問曰、岩頭因僧問、古帆未掛時如何。頭云、小魚吞大魚、意旨如何。

一、僧云、耳朶兩片皮。師云、僧云、掛後如何。頭云、後園驢喫草、意旨如何。僧云、牙齒一具骨。師便打。

一、六々三十六、七九六十三。師便打。

一、僧展兩手。(二)展隻手。打云、退後。

一、眼上眉、鼻下唇。(二)一三三四五、意旨如何。南地竹、北地木。便打。

一、雨後青山「青」轉青。(二)主山高、案山低、意旨如何。兩賽一彩。師便打。

一、頭上一堆塵、脚下三尺土。師便打。

一、人貧智短、馬瘦毛長。師便打。

一、頭目髓腦、身肉手足。師便打。【二十五丁ウ】

一、赤肉白骨。兩賽一彩。師云、前來有人道。更道々々。僧云、和尚莫瞞人。師打云、非機境、更參三十年。

一、九々八十一。(二)四三三二。打云、非阿你語。

一、逼塞乾坤。打云、不是々々。

一、懷州牛喫禾。(二)益州馬腹脹、意旨如何。盤山案頭猪肉。師便打。

一、雲在嶺頭閑不徹、水流礪下太忙生、意旨如何。頂上無骨、領下有鬚。師便打。

又 因宗樹上坐初七日

師問曰、僧問、岩頭古帆未掛時如何。頭云、小魚吞大魚、意旨如何。

一、僧云、父是男。師云、後園驢喫草、意旨如何。母是女。師打。 貞

一、南山雲起、北山雨下。師便打。 影【二十六丁才】

一、白雲深處坐禪僧、意旨如何。安居禁足。千里行從一步初⁽¹⁾。

一、意旨如何。拳足下足、意旨如何。牙齒一具骨。師便打。 讚

一、主山高、意旨如何。案山低、意旨如何。南地竹、北地木。(二)兩賽一彩。師便打。

一、雲在嶺頭閑不徹。(二)水流^(測)下太忙生。便打。

一、脚下三尺土。(二)頭上一堆塵。師便打。

一、懷州牛喫禾。(二)益州馬腹脹、意旨如何。七九六十三。便打。 麒

一、在手執捉、在足運奔。打曰、不是々々。 鉄

一、塵埋床下履、意旨如何。雨後青山「青」轉青、風動架頭巾、意旨如何。人無遠慮、必有近憂。師便打。

楊

一、朝作紅顏、意旨如何。生。夕作白骨、意旨如何。死。師乃打。 芳

一、大地山河、意旨如何。舌頭一瓣肉、山河大地、意旨如何。口唇【二十六丁ウ】兩片皮。打云、非阿你語。

一、大魚吞小魚。師云、更道々々。人貧智短、馬瘦毛長。 圭

一、落霞与孤鶩齊飛、意旨如何。兩々三々、秋水共長天一色。 熙

又 因宗樹上坐大斂忌尽七日

師問曰、德山因岩頭問、是凡是聖、意旨如何。

一、僧云、陷虎之機。師云、德山便唱、〔喝〕意旨如何。弁了也。便打。 貞

一、奪得驪龍頷下珠。〔風〕敲出鳳々五色髓。師便打。 楊

一、劈箭急、意旨如何。覲面當機。〔二〕灼然。師便打。 芳

一、竜戲滄海。〔二〕虎嘯南山。師便打。 穎

一、象王嘖呻、意旨如何。言中有響。〔二〕獅子哮吼、意旨如何。毒攻毒。〔二十七丁才〕

又 馬大師因龐居士問、不与萬法爲侶者是什麼人、意旨如何。僧曰、馱胸負背。師便打。 貞

一、面前逢著。師便打。 金

一、堆山積岳、意旨如何。逼塞乾坤。師便打。 麒

一、進前在我、退後在我、意旨如何。左之右之、意旨如何。面前響。 楊

一、不離當処每湛然、意旨如何。覲面不藏。師便打。 鉄

一、高着眼看、意旨如何。天上天下。師便打。 穎

一、劈不開提不起、意旨如何。鉄丸無縫罅、意旨如何。風吹不入、水洒不着。師便打。 圭

一、大坐宇宙、意旨如何。黑粼皴地。師便打。 熙 〔二十七丁ウ〕

又 師問曰、馬大師因龐居士問、不与萬法爲侶者是什麼人、意旨如何。

一、僧云、擎山涵海。師便打。 金

一、欠少什麼、意旨如何。左右逢源。頭之合轍、〔頭〕意旨如何。竹篋頭没却。師便打。

一、輕於鴻毛、重於山岳、意旨如何。風吹不入、水洒不着、意旨如何。充塞乾坤。便打。

一、間不容髮、意旨如何。撐天拄地。師便打。 芳

一、因。師便打。

一、仰之彌尊。（音）師便打。

熙【二十八丁才】

又 因乾白顯公藏主初七日 文安甲子九月十六日

師問曰、僧問、岩頭古帆未掛時如何。頭云、小魚吞大魚、意旨如何。

一、僧云、蒼天々々、意旨如何。鳥宿池中木。師云、僧云、掛後如何。頭云、後園驢喫草、意旨如何。退

後々々、意旨如何。僧敲月下門。

讚

一、果滿菩提園、意旨如何。空手把鋤頭。打云、不是々々。

金

一、川僧薺苴、意旨如何。前三々、後三々。浙僧蕭洒、意旨如何。眼橫鼻直。師便打。

莊

一、幽州猶自可、意旨如何。一二三四五。最苦是江南、意旨如何。五四三二一。師便打。

麒【二十

八丁ウ】

一、不是今日合鬧也。意錯、意旨如何。苦。琉璃枕上凹、碼碯【盤】中凸、意旨如何。主山高、案山低、

意旨如何。三々九。便打。

一、初三十一、意旨如何。頂上無骨。中九下七、意旨如何。頷下有鬚。師便打。

穎

一、佛是幻化身、意旨如何。祖是老比丘。前頭已【道】了也。更道々々。一苦一樂一逆一順。師便打。

一、居士云、天高東南、地低西北。塵埋床下履。便打。

善

一、居士云、大尽三十日、小尽二十九。師便打。

湛

一、居士云、昨雨今日晴。寸長尺短。師便打。

深

一、僧云、彩鳳舞丹霄、意旨如何。三个四个。鉄永水上浮、意旨如何。七个八个、意旨如何。雨後青山

〔青〕轉青。 熙【二十九丁才】

又 因特進亞台礼帛信公大禪定門卅三回忌

師問曰、岩頭問徳山、是凡是聖。試下一轉語看。

一、僧云、嶮、意旨如何。陷虎之機。師曰、徳山便喝、意旨如何。灼。 貞

一、僧云、句裡藏鋒。崖崩石裂、意旨如何。大嶮生。便打。 金

一、好大膽、莫道非々想天無人、意旨如何。嶮。師云、前有人道、更道々々。千兵易得、一將難求。師

便打。 贊

一、礼非玉帛而不表、意旨如何。蜜裡裏〔密裏砒霜〕砒礪、是賊知賊。便打。

一、響猛虎一声、天破地裂。師便打。

一、嚇殺人虎嘯、山頭白浪翻。〔高峯起白浪〕師便打。

一、曾騎鉄馬出重城、勅下傳聞六國清。師便打。 顯

一、龍得水時添意氣、虎逢山色長威寧。師便打。 芳【二十九丁ウ】

一、人情若「好」飲水也肥、意旨如何。言中有響。施閃電之機、用霹靂之手。師便打。 圭

一、居士云、不許夜行投明、須到開口見膽。便打。 善

一、居士云、半開半合。機奪機。便打。 湛

一、僧云、山岳起舞。電眸虎齒霹靂舌。師便打。 熙

又 文安二年正月旦 禾上甲子七十〔8〕

師問曰、馬大師因龐居士問、不与萬法為侶者是什麼人、意旨如何。

一、僧云、隨處為主。師便打。 莊

一、逼塞頭上。師便打。 金

一、擎頭戴角。師便打。【三十丁才】

一、欠少什麼、意旨如何。頭々は物々は。師便打。 楊

一、四海九州、意旨如何。普。師便打。 穎

一、夜半正明、天曉不露、意旨如何。頭上漫々、脚下漫々。 賀

一、塞却耳根、突出眉毛。師便打。 芳

一、胸馱背負。師便打。 圭

一、上破天、下穿地。師便打。 熙

又 為道照禪門追善文安二孟夏念二日

師問曰、古帆未掛時如何。頭云、小魚吞大魚、意旨如何。

一、僧云、雲在嶺頭閑不徹、意旨如何。一二三四五。掛後如何。頭云、後園驢喫草、意旨如何。水流礮下

太忙生。師便打。 溟

一、僧竖起拳頭、意旨如何。初三十一。赤肉白骨、意旨如何。五四三二一。便打。【三十丁ウ】

一、水長船高、意旨如何。一生二。泥多佛大、意旨如何。三生萬物。師便打。

一、頭上一堆塵、意旨如何。三七二十一。脚下三尺土、意旨如何。七九六十三。便打。

一、好事不如無、意旨如何。三々九。長安雖樂不如家貧、意旨如何。六々元来三十六。

一、經来白馬寺、僧到赤烏年。將謂衆生苦更有苦衆生、意旨如何。破草鞋。師便打。

一、天地一指、萬物一馬。師便打。

一、落霞与孤鶩齊飛、意旨如何。兩賽一彩、秋水共長天一色。

一、居士云、頂天立地、意旨如何。竹有上下節、松無古今色。

一、居士云、心思哀泪浮双眼。不是今日合關也。

一、僧云、赤脚上刀山、鼻孔血淋漓、意旨如何。雨後青山青轉【三十一丁才】青。師打云、敲出鳳凰五色

髓。 熙

又

師問曰、龐居士問、馬祖云、不与萬法爲侶者是什麼人、意旨如何。

一、僧云、諦觀法王法、意旨如何。左右逢源。便打。 讚

一、千聖跳不出、意旨如何。僧擬議。師便打。 金

一、八荒開壽域、一氣轉洪鈞、意旨如何。能爲万象主、不逐四時凋。師便打。 莊

一、連天跨「地」。師便打。 諒

一、突出眼睫上。師便打。 穎

一、萬象之中独露身。師便打。

一、手頭簸弄、金圈栗蓬。師便打。 芳【三十二丁ウ】

一、仰之彌高、鑽之彌堅、意旨如何。當面相逢。便打。 惠

一、大王来也、意旨如何。何処不称尊、意旨如何。上撐天、下拄地。 熙

又 因正真大姉遠諱就湊咲院文安三菊月二日

師問曰、岩頭因僧問、古帆未掛時如何。頭曰小魚吞大魚。試下一轉語看。

一、僧云、林下聽經秋苑鹿。掛後如何。頭云、後園喫草、意旨如何。溪邊掃葉夕陽。僧打。貞

一、水月交光秋空一色。馬瘦毛長。師便打。莊

一、雲在嶺頭閑不徹。破蒲團三个五个。打。諒

一、無風起浪、意旨如何。不見麼。打云、不是々々。勳

一、一二三四、四三二一。師便打。穎【三十二丁才】

一、雪覆蘆花、意旨如何。臭肉集蠅。舟橫斷崖、意旨如何。截鶴續鳧。師便打。賀

一、一月高懸照萬水。打云、不是々々。祐

一、生、意旨如何。熟處難忘死、意旨如何。七九六十三。師便打。鈇

一、如猿在檻。似虎靠山、意旨如何。七「九」六十三、前來有人道、更道。南地北地。便打。芳

一、君子愛財、取之有道如何。是道頂上無骨苦、意旨如何。兩々三々旧路行。師便打。圭

一、當機試竜象、意旨如何。水銀無假、阿魏無眞。打云、不是。喜

一、彼清風動脩竹、意旨如何。六々三十六。打。久

一、尼云、耳朶兩片皮、牙齒一具骨。師便打。由【三十二丁ウ】

一、尼云、僧是僧、俗是俗。九々八十一。師便打。心

一、尼云、十日雨、五日風。便打。寿

一、居士云、水長船高、泥多佛大。便打。深

一、居士云、鷲峰山色青轉青。眉橫眼上、意旨如何。七九六十三。打云、何不道八々六十四。歛

一、孤舟盡日橫、意旨如何。秋水共長天一色。堪冷咲、意旨如何。一兩々、二三々。打。熙

又 文安四正旦 七十二歳⁽¹⁹⁾

師問曰、馬祖因龐蘊居士問、不与萬法爲侶者是什麼人。試下語看。

一、僧高揖云、大衆相見、意旨如何。破有法王出現世間、意旨如何。【三十三丁才】満室堆席。便打。讚

一、面前灣。師便打。金

一、上下四維無等匹、意旨如何。靈音属耳、意旨如何。左右逢源。師便打。莊

一、當面相逢。師便打。

一、成龍昇天、意旨如何。騎風御雨、意旨如何。高着眼看。打。諒

一、突出眼睫、意旨如何。撐天拄地。便打。穎

一、細如來末、冷似氷雪、意旨如何。逼塞乾坤。師便打。芳

一、分明目前、試露出看。風吹不入、水洒不着。便打。勤

一、某甲終日交肩、意旨如何。在前忽焉在後。師便打。圭

一、騎聲入耳。師乃打。【三十三丁ウ】

又

師問曰、滄山懶安禪師云、有句無句如藤倚樹、意旨如何。

一、僧云、不具些子慈悲却有十分惡毒、意旨如何。荊棘。參

師云、疎山聞得云、忽焉^(然)樹倒藤枯、句皈何處、意旨如何。

僧云、可惜許、意旨如何。擔板漢。師便打。

貞

一、碍人荆棘從無根長。(二)錯。師便打。

金

一、師子咬人、意旨如何。毒氣傷人、狂狗逐塊。師乃打。

要

一、偽遊雪夢、意旨如何。明修棧道、暗渡陳倉。拍手云、阿呵々。師云、咲个什麼。僧云、疎山智無鉄兩打云、也不少。莊

一、僧云、這老賊。(二)魚吞直鈎、意旨如何。滯句者迷。師便打。

久【三十四丁才】

一、耕地種蒺藜。(二)只解拄門、不解拄戶。師便打。

穆

一、乾地生蓮、意旨如何。曲如鈎。白日落深窄、意旨如何。只見錐頭利、不知鑿頭方。便打。

一、令不虛行、意旨如何。白雲深處金龍躍、意旨如何。這賊突頭人難得。便打。

鉄

一、蛇入竹筒。(二)苦哉。佛陀耶。師便打。

一、人平不語、水平不流、意旨如何。舌頭有骨。(二)贏得頂上笠、失却脚下鞋。便打。

芳

一、賊。(二)話隨也、意旨如何。拖泥滯水。便打。

賀

一、賊心已露。師云、前來有人道、道々。僧云、賊人心虛。師云、頭上安頭。黔之驢、意旨如何。只知開口不覺話【三十四丁ウ】墮。師便打。

一、相逢尽道休官去、林下何曾見一人。(二)中毒者「知」毒用、意旨如何。疎山元來不肯瀉山舌頭。師便

打。圭

一、慣釣鯨鯢澄巨浸、意旨如何。曲灣々。却嗟蛙步「輾」泥沙。打。

熙

又

師問曰、江西馬大師因龐蘊居士問、不与萬法爲侶者是什麼人。立僧首座下一語、布施大衆去看。首座云、和尚萬福、意旨如何。滿室堆席。便打。 溟

一、水洒不着、風吹不入、意旨如何。突出難弁、意旨如何。拋向面前。師便打。 俱

一、普、意旨如何。八面玲瓏、意旨如何。眨眼眉毛重。師便打。 讚【三十五丁才】

一、逼塞乾坤、師便打。 金

一、物見主眼卓堅、意旨如何。掛在面前。師便打。 貞

一、能爲萬象主、意旨如何。忽焉在後。便打。

一、突出一坐具地上、意旨如何。築著磕著。師云、築著个什麼。僧云、面前底。便打。

一、兩肩擔將來。打云、肩重那。

一、逢着面前、意旨如何。充塞六合。便打。

一、擎山涵海。便打。

一、終日行不動一步、意旨如何。処々全身、意旨如何。和風搭在玉欄干。師便打。

一、填溝塞岳。師便打。【三十五丁ウ】

一、撐天拄地。便打。

一、天上天下、意旨如何。遍界不藏。師云、不藏个什麼。僧云、頭上漫々。打云、漫々那。

一、一人居日下不与衆人同、意旨如何。踈跳竹篋頭上。

一、輝天輝地、意旨如何。填溝塞岳。前来自人道、更道。突出難弁。便打。

一、个無面目漢、意旨如何。上無攀仰、下絕己躬、意旨如何。填溝塞岳。打云、再犯不容。

一、法王江王、^{〔七〕} 意旨如何。天上人間絕比^{〔倫〕}。便打。

一、一輪高掛萬國盡看、意旨如何。滿耳無處迴避。

一、尊億萬福、意旨如何。百花富貴艸精神。打云、不是々々。【三十六丁才】

一、釈迦弥勒是他奴。師云、主是阿誰。僧云、縮則^{〔取〕}絲髮不立、展則弥綸法界。便打。

又

師問曰、江西馬大師因龐蘊居士問、不与萬法爲侶者是什麼人。首座試下一轉語看。座云、普、意旨如何。

天上天下。打。溟

一、充塞六合。便打。繼

一、擎山涵海。師云、涵个什麼。天上天下。打云、前語不副後語。

金

一、巍巍堂堂、焯々焯々、意旨如何。手舞蹈足。師便打。貞

一、拳指云、看突出一指頭、意旨如何。又巖裂綵角、意旨如何。【三十六丁ウ】左之右之。師便打。

一、萬仞峰頭独足立。師便打。

一、當面相逢个什麼。僧云、覲面不藏。師便打。

一、坐在掌上、意旨如何。細如米末、冷如冰雪。師云、尚道。僧云、大地載不起。師便打。

一、上撐天、下拄地。師便打。

一、山河大地、意旨如何。大地山河。打云、不是々々。

一、是々、意旨如何。看脚下。師便打。

一、斫額云、^{〔本〕} 大高生、意旨如何。瞻之仰之、意旨如何。点指云、咦。打。

一、処々全身、意旨如何。黒漫々。師乃打。

一、太分明、意旨如何。鉄山（雷四）同勢崔鬼、意旨如何。天不能蓋、【三十七丁才】地不能載。師云、載个什麼。僧便喝。師便打。鉄

一、雨洗風磨、意旨如何。浩々充塞天地。

一、掛在繩床角、意旨如何。看々。師、个什麼。僧云、禾上面前底。便打。

一、不較多、意旨如何。如麻處粟（似）、意旨如何。把定世界不漏纖毫、意旨如何。光萬象。打云、如鸚武學人語。又 寶徳二歳旦於徳禪院

師問曰、馬大師因龐蘊居士問、不与萬法爲侶者是什麼人。請首座下一轉語。

一、僧云、端居坐底人意氣衝斗牛、意旨如何。瞻之仰之。便打。【三十七丁ウ】

一、當軒大坐、意旨如何。撐天拄地、便打。

一、和尚脚跟下放大光明、意旨如何。浩々充塞天地。便打。

一、堯天等覆舜日普臨、意旨如何。達磨即今遊扶桑、意旨如何。看脚下。便打。

一、展開両手云、明珠在掌、意旨如何。懷之久矣、意旨如何。作抛下勢云、大衆取捨之。師云、取捨來看。僧云、充竜宮溢海蔵。

一、倒騎牛兮入佛殿、意旨如何。生鐵面顏劈開、意旨如何。白馬入芦花、意旨如何。露堂々。便打。

又 因明室光公禪定尼三十三回忌【三十八丁才】

師問曰、南泉因両堂首座争猫児。南泉提起云、道得即不斬、道不得即斬。衆無對。南泉遂斬為兩段、意旨如何。

一、平原秋樹色、沙麓暮鐘聲、意旨如何。首座云、我手何似佛手、意旨如何。初卅一中九下七。便打。

一、後園驢喫草、意旨如何。四七二三。^(八)便打。

一、僧便咄、意旨如何。与麼得肥、与麼得瘦、意旨如何。茄子瓠子、意旨如何。三々非九。師便打。

一、當斷不斷還招其乱、意旨如何。六々卅六。便打。

一、錯、意旨如何。頭目髓腦、意旨如何。五々廿五。便打。

一、松無古今色。便打。【三十八丁ウ】

一、背立云、大衆看逆行三昧、意旨如何。黄河向北流、意旨如何。一二三四五。師便打。

一、西天四七、東土二三、意旨如何。眉毛横眼上。便打。

一、何啻猫兒。師云、道个什麼。佛是幻化身、祖是老比丘、意旨如何。一苦一樂一逆一順。打。

一、点、意旨如何。黄絹幼婦、外孫齋白、意旨如何。七九六十三。便打。

一、孤舟尽日横、意旨如何。一二三、三二一。師打。

一、一刀兩断任偏頗、意旨如何。三七廿一、意旨如何。將謂胡鬚赤、更有赤鬚胡。師云、趙州後來載艸鞋、意旨如何。脚下太泥深、意旨如何。七九六十三。師打。

又 因善長元公禪定門三十三回忌【三十九丁才】

師問曰、南泉一日兩堂争猫兒。泉提起云、道得即不斬。衆無對。泉遂斬為兩段。請下一轉語看。

一、僧云、西天廣額旃陀羅、放下屠刀、「我是」千佛一數、意旨如何。座提起坐具云、上座即今游刃乎肯綮之間。師打。

一、南山燒炭北山紅。便打。

一、富嫌千口少、貧恨一身多、意旨如何。七九六十三。

一、拳扇子、意旨如何。扇子踣跳上三十三天。築著帝釈鼻孔、意旨如何。雲在嶺頭閑不徹。師便打。

一、滿眼滿耳無処回避。打云、不是々々。

一、肉重七斤。師便打。

一、慈悲行三寸、善知識八分、意旨如何。十箇指頭八箇丫。【三十九丁ウ】便打。

一、黑漆崑崙雲外走、意旨如何。面前背後。打云、不是々々。

一、破草鞋、意旨如何。芒鞋竹杖走紅塵。師便打。

一、展一手云、一手左、意旨如何。不搽紅粉也風流。師云、不是。更道。前三々、後三々。便打。

一、一畝「之」地三蛇九鼠。便打。

一、眉毛橫眼上。師便打。

一、赤肉白骨。師便打。

一、官人云、草鞋踏破門前走。師便打。

一、官人云、六々卅六。師便打。

一、僧云、頂上無骨、領下有鬚。師曰、趙州戴草鞋、意旨如何。【四十丁才】失却脚下鞋、贏得頭上笠。師

便打。 照

又 享徳元十一月一日

拳云、南泉斬猫兒為兩段、意旨如何。

一、僧云、君子愛財取之有道。師云、泉後拳前話問趙州、州脫草鞋於頭上戴出、是什麼心行。僧云、頭上

一、堆塵、脚下三尺土。泉云、子若在救得猫兒、如何領略。僧云、養魚養龜、便打。僧禮拜。

一、一句定乾坤、一劍平天下。打云、不是。應聖寺昭

一、耳朶兩片皮。師云、何不道牙齒一具骨。僧擬議。便打。宝泉庵泉

一、收則絲髮不立。打云、不是々々。福聚菴遠

一、櫻「按」鎖鑰全正令。打云、不是々々。【四十丁ウ】

一、鷄寒上樹、意旨如何。眼裡有筋、意旨如何。僧擬議。便打。繁

一、頭鬚鬢耳卓朔。頂上無骨、領下有鬚。同坑無異土。師打云、奴見婢殷勤。在

一、當斷不斷還返招其乱。打云、不是。巨

一、正好據令「而」行、意旨如何。僧擬議。打云、去々。掬

一、夜半正明、天曉不露。打云、不是々々。俊

一、豁透脫空撥因果知音不疑。打云、一句道着、一句不是。珊

一、毛頭云、千年丹頂鶴、萬歲綠毛龜。養雛爲大雀、栽種子作高松。打云、非你語。証

一、官人云、燈籠上作舞。寸長尺短、意旨如何。三生六十劫。打云、非阿你語。信【四十一丁才】

一、官人云、一有多種、二無兩般。打云、不是々々。賴

一、官人云、截斷佛祖、吹毛常磨。師云、這箇是先師傷、更道。看此外有理。平地起波瀾。打云、非機非

境、更參三十年。友荻

一、尼云、七九六十三。打云、好參而知。琇

一、尼云、前三々、後三々。打云、好參而知。久

一、僧云、馬瘦毛長。(二) 人貧智短。 快侍者

又

師問曰、虎丘因僧問、九旬禁足事如何、意旨如何。

一、僧云、南山燒炭北山紅。丘答云、理長即就之、意旨如何。朝游西天、暮飯東土、意旨如何。

〔雲月是同溪山各異〕
溪月雖異雲山是同、意旨如何。向南看北斗。打云、何不道行到水窮處坐看雲起時。【四十二丁之】

一、帰依佛法僧、意旨如何。鷲峰山色青轉青。師云、争奈露柱横點頭。 遠

一、九々八十一、意旨如何。僧擬議。師便打。 涸

一、一二三四五六七。師云、何不道八十九。 在

一、斬得匈奴首、還皈細柳宮、意旨如何。王令已行遍天下、將軍塞外絶烟塵、意旨如何。意〔マママ〕旨如何。僧擬

議。便打。 巨

一、得人一牛、還人一馬。 珊

一、去却一〔拵〕招得七。師云、露柱點頭、燈籠證明。 掬

一、始隨芳草去、又逐落花回、意旨如何。三尺竹篋、意旨如何。七尺拄杖、意旨如何。前三々、後三々。

一、毛頭云、達磨元來觀自在、淨名元是老維摩。 証【四十二丁才】

一、官人云、鉄樹抽枝、枯木生花、意旨如何。三年一潤〔潤〕。師云、露柱點頭、燈籠證明。 信

一、官云、蒲團々禪板長。師云、蒲團々禪板長、正与麼時如何。官擬議。 頼

一、官云、透網金鱗得大自在。師打云、不是。 豊

一、官云、退步承聞〔當〕特地新。打云、不是。 友

一、尼云、十日雨、五日風。師便打。

琇

一、尼云、披毛從是得、作佛也〔此〕因他〔從〕。

久

僧云、水長舟高、泥多佛大、意旨如何。雨後青山青轉青。

師云、僧云、六根不具底者却禁得也無、意旨如何。目見如盲、口說如啞。虎丘云、穿過鼻孔、意旨如何。僧云、北斗【四十二丁ウ】裡藏身。

又 永享十年十二月於紀州贅河檣脇德禪院

師問曰、瀉山垂示云、雪覆千山孤峰因甚不白。一句下語將來看。

僧云、未隱處赤漆隱處黑黑、意旨如何。千眼看不破。師云、後來有僧問虛堂。堂云、消得龍王多少風、意旨如何。僧云、風成何色。打云、一句道着、一句不是。咦、意旨如何。僧無語。師云、滿口含霜那。僧云、是、意旨如何。僧云、一箭過西天。打云、得恁麼。

一、白雲却盡春山秀、意旨如何。僧無語。打云、一句道着。

一、落霞与孤鶩齊飛、秋水共「長」天一色。打云、不是。【四十三丁才】

一、蚊子上鉄牛。石人鉄漢。打云、退後。

一、勸君更盡一盃酒、西出陽關故人、意旨如何。大悲千眼看不破。暗夜放烏鷄〔平〕。打云、恁麼何受用。

一、白雲深處金龍跳〔題〕。(二) 碧波心裡玉兔驚。打云、恁麼々々。

一、僧云、鑄刀須是「邪」州鐵。白馬成鉄驪、意旨如何。誰敢視破。打云、恁麼去。

熙

註

- (1) 「是者有髮二而僧名二相改、衣計を着仕候、衣者黒色縲子或者紋紗之類ニ紅之裙覆輪付候を相用候、尤法會之節者、金中啓襪子相用候、年齢凡十歳前後」(『大徳寺派僧侶階級之次第』、国書刊行会『續々群書類従』第十二・宗教部、続群書類従完成会、一九七八年、三九一〜三九二頁)。
- (2) 村井章介校注『老松堂日本行録』岩波書店、二〇一八年、二二〇頁。
- (3) 細合喝堂他編『大徳寺語録集成』第二卷、法藏館、一九八九年、四一五頁。
- (4) 芳澤勝弘「横川景三の『小補艶詞』と月関周透―室町禅林における男色文化の二側面」『花園大学国際禅学研究所論叢』第一号、二〇〇六年、六七〜一二頁。また、喝食への尊称については、朝倉尚「禅林における試筆詩・試筆唱和詩について」(『国文学攷』第六五号、一九七四年、十八〜三二頁)なども参照。
- (5) 翻刻は飯塚大展「龍谷大学図書館蔵『大徳寺夜話』をめぐって(二)―資料編―」『駒澤大学禅研究所年報』第十号、一九九九年、一〇八頁。
- (6) 同前、一〇九頁。
- (7) 「夫、人間の浮生なる相をつらく観ずるにおほよそ、はかなきものは、この世の始中終まぼろしの如くなる一期なり。されば、いまだ萬歳の人身を、うけたりといふ事を、きかず。一生すぎやすし。いまにいたりて、たれか百年の形體をたもつべきや。我やさき、人やさき、けふともしらず、あすともしらず。をくれ、さきだつ人はもとのしづく、すゑの露よりも、しげしといへり。されば、朝には、紅顔ありて、夕には、白骨となれる身なり。すでに、無常の風きたりきぬれば、すなはち、ふたつのまなこ、たちまちにとぢ、ひとのいき、ながくたえぬれば紅顔むなしく變じて、桃李のよそほひを、うしなひぬるときは、六親眷属あつまりて、なげきかなしめども、更に、その甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外にをくりて、夜半のけふりと、なしてぬれば、たゞ白骨のみぞのこれり。あはれといふも、中々おろかなり。されば、人間のはかなき事は、老少不定のさかひなれば、たれの人も、はやく後生の一大事を、心にかけて、阿弥陀仏を、ふかく、たのみまいらせ

て、念仏まうすべきものなり。あなかしこく」(『真宗聖典』、東本願寺出版、一九八〇年、八四二頁)。

(8) 今泉淑夫校注『一休和尚年譜2』平凡社、一九九七年、九頁。

(9) 原文は『一休和尚全集』第三卷(春秋社、二〇〇三年)所収。

(10) 「一休宗純研究ノート(二)―『自戒集』注釈(上)―」(『駒澤大学佛教学部論集』第三二号、二〇〇一年、二八九〜三四八頁)ほか。

(11) 「一休宗純『自戒集』試論―詩と説話のあいだ―」(小島孝之編『説話の界域』笠間書院、二〇〇六年、六九〜八二頁)ほか。

(12) 『一休派の結衆と史的展開の研究』(思文閣出版、二〇一〇年)ならびに『中世・近世堺地域史料の研究』(和泉書院、二〇一七年)ほか。

(13) 「天正3年正月南宗寺禅問答と堺の茶人たち」(『法政史学』第四七号、一九九五年、一一六〜一三〇頁)。

(14) 「賊心已露」(『句双葛藤鈔』)或いは「賊身已露」(『碧巖録』第二則本則著語)を「曲心已露」としたものか。

(15) このあとに句なし。

(16) 直後の「不是」に続くか。

(17) 直後の「意旨如何」に続くか。

(18) 養叟は文安二年に七十歳。

(19) 養叟は文安四年に七十二歳。

〔謝辞〕

末筆となりますが、史料の電子データを御提供頂いた永源寺教学部の森慈尋師、ならびに史料の問題点について丁寧な点検されて重要な示唆を下さった大徳寺如意庵の井本宗浩師に、ひとかたならぬ深謝を申し上げます。

『摩醯首天伝』訳注記

林 鳴 宇

◎凡 例◎

- 一、本稿は、『重編諸天伝』の「摩醯首天伝」の訳注研究である。
- 一、内容の構成は、原文・原文の現代語訳・注・記の順とした。
- 一、底本は、筆者所蔵『重編諸天伝』二卷（中野是謙、寛文元年刊）を用いた。
- 一、底本では、一部の旧字や異体字を用いるが、本訳注は常用漢字や正字に統一した。
- 一、原文読解の便宜のため、底本の読点を参考し、あらたに原文に標点を施した。
- 一、現代語訳は、基本的に底本の句読訓点をもとに訳出したものである。しかし、稀に見られる難解な箇所や不明の語句については、訳文前後の呼吸にそうように、その訳を増広また省略することがあり、増広する場合は〈 〉で増補した部分を示し、省略する場合には注にてその旨を記した。
- 一、各段の諸天の賛としての詩偈は、それぞれの伝記を略述したもので、伝記の現代語訳と重複することを避け、便宜上、書き下し文のみを以て訳した。
- 一、各段の語句の注は、原則として、難解であると思われる人名・地名・仏教教理用語、そして引用された經典の所出に限っておきたい。

一、各段の記は、主に『重編諸天伝』を開講した平成一八〜一九年の「仏教特講Ⅲ」の講義（駒澤大学）の

中で示した問題意識や感想などによる。さらに智顛『金光明経文句』、知礼『金光明経文句記』、從義『金光明経文句新記』、宗暁『金光明経照解』の四書を参考し、天台教学に関わるもので、各段において注意すべき箇所を記し、天台教学における『重編諸天伝』の位置づけを示した。

一、『重編諸天伝』の「序叙」の訳注研究は、『駒澤大学仏教学部論集』三八号に、「息總別位次之評」の訳注研究は、『駒澤大学仏教学部研究紀要』六六号に、「帝釈天伝」の訳注研究は、『駒澤大学仏教学部論集』四〇号に、「大梵天伝」の訳注研究は、『駒澤大学仏教学部研究紀要』六九号に、「四天王總伝」「四天王別伝」「金剛密迹伝」の訳注研究は、『花園大学国際禅学研究所論叢』一五号、一六号、一七号に、それぞれ掲載された。

◎訳注記◎

摩醯首天伝

梵語「摩醯首羅」、此翻「大自在」、或翻「威靈帝」、或云「三目」。『智論』立三界主。即摩醯首羅、為三界尊極之主。『華嚴經』亦称三界主、其居处也、在色界頂。『樓炭經』云、「阿迦尼吒」。即首羅所居、有頂天也。『華嚴疏』引『智論』云、「過五淨居、有十住菩薩住处。亦名淨居、号大自在天王。」「輔行記」云、「色界頂天、三目八臂。騎白牛、執白扠、有大威力、能傾覆世界。拳世以尊之。」「妙樂」云、「色究竟天、寿万六千劫、身長一万六千踰繕那。」「華嚴經」云、「能知大千雨滴之数、是十地菩薩。」「入大乘論」等説、「摩醯首羅天、上有一実報土成仏、以大千世界為所統境。」

摩醯首天の伝記

梵語の音訳「摩醯首羅」^{マケイシラ}は、中国では「大自在」または「威靈帝」と意識され、さらに「三目」と訳出されたこともある。『大智度論』は欲界、色界、無色界の三界にそれぞれの主宰者がいる旨を述べる。この「摩醯首羅」は、まさに「大智度論」が記す「三界に君臨する主宰者の一人である。『華嚴経』も「摩醯首羅」を三界の主宰者の一人であるとし、その起居するところは色界の一番上への色究竟天」に在ると言う。『楼炭経』「切利天品」が言う「阿迦尼吒天」^{アカニダ}も、「色究竟天と同様」摩醯首羅が起居する色界の有頂天のことを指す。澄観『華嚴経疏』巻五は、『大智度論』の「淨き阿那含果を求める五種の修行者の段階を過ぎれば、そこには大自在天王と称する十住菩薩が位する淨き階位がある」という説を引用した。湛然『輔行伝弘決』巻十も「『大智度論』の別説を引き、「摩醯首羅は」色界の最頂に住み、三目八臂の威容を現し、白牛に乗り、白い払子を手執り、大いなる威力を持ち、嚴にこの世を統治する。世の中の者みんながごぞつて「摩醯首羅に」敬服している」と述べる。また、湛然『法華文句記』巻二下に、「色究竟天の主「摩醯首羅」は、その寿は一万六千劫であり、その身の長は一万六千踰繕那である」とも述べた。『華嚴経』には、「大千世界に降る雨滴の数さえも把握しているため、「摩醯首羅は」十地に位する菩薩である」と言う。『入大乘論』などの經典は、「摩醯首羅天は、精進を究めれば実報土に成仏し、大千世界がその主宰する範囲である」という。

◎大自在：『一切経音義』巻二十六、釈雲公撰、慧琳補『大般涅槃経音義』第二十四巻に、「摩醯首羅天、此云大自在天。」とある。『仏説灌頂経』巻四に、「神名摩醯首羅、字威靈帝」とある。智顛『金光明経文

句』卷六に、「摩醯首羅、餘經翻為『大自在』、『灌頂經』翻為『威靈帝』」とある。

◎三目 、『仏本行集経』卷二十三に、「此是三目大自在天、来至於此」とある。

◎『智論』立： 、『大智度論』卷九に、「第四禪有八種、五種是阿那含住処、是名淨居、三種凡夫聖人共住。過是八処、有十住菩薩住処、亦名淨居、号大自在天王：淨居天是色界主」とある。智顛『観音義疏』卷下に、「釈論』云、過淨居天、有十住菩薩号大自在、大千界主。」と引用し、湛然『輔行伝弘決』卷十一に、「『大論』云、大自在天有菩薩居、名摩醯首羅」と引用した。この『大智度論』の内容を引用することによつて、智顛も湛然も『摩醯首羅』が十住菩薩位に位すると認識した点に注目すべきである。

◎『華嚴経』 、『三界主』、『八十華嚴』「如来出現品」に、「譬如大雲、降注大雨。大千世界一切衆生、無能知数、若欲算計、徒令発狂。唯大千世界主、摩醯首羅、以過去所修善根力故、乃至一滴、無不明了」とある。澄観『華嚴経疏』卷五に、「大自在天、三千界主」と注釈する。

『色界頂』、『八十華嚴』「十地品」に、「仏子！是名略説菩薩摩訶薩第十法雲地。若広説者、假使無量阿僧祇劫、亦不能尽。仏子！菩薩住此地、多作摩醯首羅天王。於法自在、能授衆生聲聞独覚一切菩薩波羅蜜行。」澄観『華嚴経疏演義鈔』卷五十三に、「言居有頂者、唯是色界之頂」と解釈する。

◎『楼炭経』 、『楼炭経』卷四「切利天品第九」に、「色行天有十八、何等為十八？一者梵加夷天、梵不数

楼天、梵波利沙天、大梵天、阿維比天、波利答天、阿波羅那天、波利多首天、阿波羅天、摩首天、阿披波羅天、維阿天、波利多維天、阿波摩維呵天、維呵天、維阿鉢天、阿答和天、善見天、色天、阿迦尼吒天。是為十八色行天」とある。智顛『觀音義疏』卷下に、「大自在即色界頂魔醯首羅也。『楼炭』稱為阿迦尼吒」とある。吉蔵『法華義疏』卷二に、『楼炭経』云、「阿迦尼吒在有色之頂也」とある。

◎『華嚴疏』引『華嚴経疏』卷五に、「第五大自在者、梵云摩醯首羅是也。於三千界最自在故。『智論』第二云、此天有八臂三目、乘白牛、執白拂。一念之間能知大千雨滴。下『経』同此。準『智論』第十一、過五淨居、有十住菩薩住處、亦名淨居、号大自在天王。」とある。「過五淨居」云々は、『大智度論』卷九による。

◎『輔行記』『湛然』『輔行伝弘決』卷十之一に、「摩醯首羅天者、此云大自在。色界頂天、三目八臂、騎白牛、執白拂、有大威力、能傾覆世界。舉世尊之、以為化本。」「三目八臂」云々は、『大智度論』卷二「摩醯首羅天、八臂三眼騎白牛」の一文による。

◎『華嚴経』云『前注に録した』『八十華嚴』「如来出現品」と「十地品」経文の意。澄観『華嚴経疏』卷五に、『智論』第二云、此天有八臂三目、乘白牛、執白拂。一念之間、能知大千雨滴」とある。

◎『入大乘論』『摩醯首羅天』、底本では「魔醯首羅天」とする。今文意に従い訂正する。

『入大乘論』卷下「譏論空品」に、「問曰、云何成就二果。答曰、初地福果、為閻浮提王（中略）第十地福

果、為三千大千世界淨居天王」と言い、摩醯首羅天は淨居天の主宰者であり、十地菩薩でもあると述べる。

『人大乘論』卷下「譏論空品」に、「淨治第十地、得無量無辺禁咒方術、能令一切自在無礙、作摩醯首羅天子、亦為一切世間依止」と言い、再び摩醯首羅天は十地菩薩の位にあると述べる。

『人大乘論』卷下「順修諸行品」に、「問曰、所言摩醯首羅者、為同世間摩醯更有異耶？答曰、是淨居自在、非世間自在！汝言摩醯首羅者、名字雖同、而人非一。有淨居摩醯首羅、有毘舍闍摩醯首羅。其淨居者、如是菩薩鄰於仏地、猶如羅穀障。於一刹那頃、十方世界微塵教法、悉能了知。能以口吹十方世界皆大震動、又以一身遍一切仏国」と言い、摩醯首羅天の本迹釈を展開し、淨居天に住する摩醯首羅天は第十地に位し、仏地に近いため、成仏しやすいと述べる。

『人大乘論』卷下「順修諸行品」に、「如經中說、諸仏出世、国土衆生、皆是依報、各有齊限。是故當知、在淨居天、成於正覺、領三千大千世界、非閻浮提」と言い、初地の閻浮提到成仏か、十地の淨居天に成仏かの議論について、淨居天の位にいる菩薩は、三千大千世界を統治するため、十地を経て仏になると述べる。

第十地の淨居天と仏土の実報土の関係について、『摩訶止観』卷五上に、「別円菩薩惑未尽者、同人天方便等住。断惑尽者依実報土住。如来依常寂光土住」としたため、智顛の教学に従えば、十地菩薩の摩醯首羅天は煩惱を断じ尽きた別教また円教の菩薩に属し、実報土に成仏できると理解すべきである。

※ ※ ※

然『經』中別有摩醯首羅、乃藥叉神、非此天主。如『孔雀經』云、「摩醯首藥叉、止羅多国住。」既云「藥叉止住羅多国」、定非色頂天主也。

『光明経』「鬼神品」内、先云「大自在天」、即此天主、次云「大力鬼王、那羅延等、摩醯首羅」、即藥叉者、所以『旧伝』以列位卑下為疑也。

又『本行経』説、「太子以西国之法、令礼天神。名曰摩醯首羅、其神極惡、而復有靈。太子至其神所、神自離座下階、先礼太子。」是既知云「極惡」、必非天主耳。

所以古人嘗議摩醯首羅有二神而不決者、以名同故也。蓋摩醯首羅、此云「三目」、由二神皆有三目、名故相濫。

今古画像作兩種不同。一作菩薩相、但三目八臂、執持鈴杵并尺、結印合掌。一作藥叉之形、赤髮鬚起、三目八臂、執弓箭等。至今二像不同。今既曰「大自在」及「威靈帝」、定非藥叉矣。

しかし、諸々の経典には、摩醯首羅と名乗る夜叉神も存在し、この神は前述した色界の主宰者である摩醯首羅天とは異なる神である。不空三蔵が訳した『孔雀経』に、「摩醯首藥叉は、羅多国に止まり住する」と言う。このように「摩醯首羅と名乗る夜叉神は羅多国に居住する」と言うのであれば、〈この夜叉神は〉色界の有頂天に住する天主の摩醯首羅になるはずがない。

『金光明経』の「鬼神品」にも、供養すべき鬼神として、先ずは「大自在天」、即ち前述した色界の主宰者が登場し、その次に「大力鬼王、那羅延、摩醯首羅」などの夜叉衆が登場する。『金光明経』のこの内容を根拠に、〈神煥の〉旧『諸天伝』では、身分卑下であるはずの夜叉神摩醯首羅を、奉請すべき諸天の一員にした先人の判断について、疑問を投げかけたのである。

そのほか、『仏本行集経』には次のような話がある。「釈迦太子が降誕する時に、釈迦国の慣習に従い、

（人に）抱かれてその地の天神に礼拝しに行つた。その地には摩醯首羅という名の神が居り、極悪恐るべきでありながら、靈験あらたかな神でもある。抱かれた太子がこの神の所に至ると、神は法座から降り、自ら出迎え、最初に太子に対し跪拝の礼を行つた」という。『仏本行集経』に見られた神は「極悪恐るべき」であるとされたため、色界の主宰者である摩醯首羅天とは別人物であると解かされる。

先賢たちは（論説の中では）、この二人の摩醯首羅の存在を認めるものの、明確に区別しなかつたのは、両者の名が同じであるからである。さらに摩醯首羅には、中国では（第三の目を持つ威儀があるため）「三目」と意識され、この二人の摩醯首羅も共に第三の目を有するため、同名がゆえに、ますます（後学に）混乱を招いてしまったと思われる。

しかし、昨今に流伝した（摩醯首羅の）画像に、二種類に分かれ、その姿の違いをはつきり確認することができる。その中の一種は、菩薩の威容にして、三目と八臂の姿であり、（八臂のうち、四本の手には）それぞれ扠子、鈴、杵、尺などの法具を執り、その他の両手は結印して、両手は合掌する。もう一種は葉叉の威容にして、赤い髪を頭の上に束ね、三目と八臂の姿で、その手に弓矢などの武器を持つ。この二つの系統の（摩醯首羅の）畫像に書かれた威儀は、いまでも明白に分かれ、「大自在」または「威靈帝」という（摩醯首羅の）尊容は、葉叉像とは程遠いものであると言わざるを得ない。

◎『孔雀経』 不空訳『仏母大孔雀明王経』巻中に、「摩醯首葉叉、止羅多国住」とある。

◎『光明経』 「鬼神品」 、「大自在天」、『金光明経』 「鬼神品」では「自在天」とし、「大自在天」を取り上

げていない。「護世四王、無量鬼神、及諸力士、晝夜精進、擁護四方（中略）大弁天神、及自在天、火神等神、大力勇猛、常護世間」とある。

ちなみに、天台教学では、「自在天」と「大自在天」は別の神であると定めるため、行霆のような混同は生じない。この見解の違いについて、天台宗の宗暁は『金光明経照解』の卷下に、「霆師『諸天伝』、則不本此説」（行霆の『諸天伝』の説は、天台教学に基づいていない）と批判する。

そもそも、智顛の『観音義疏』卷下には、「自在天是欲界頂、具云婆舍跋提、此云他化自在。假他所作、以成己業、即是魔王也」とし、「大自在、即色界頂、魔醯首羅也」と別々に定義していた。

「大力鬼王」云々、『金光明経』「鬼神品」に、「大力鬼王、那羅延等、摩醯首羅、二十八部、諸鬼神等、散脂為首、百千鬼神、神足大力、擁護是等、令不怖畏」とある。

◎旧伝 宋代天台の神煥（知礼下六世）が著した『諸天伝』のこと。神煥の『諸天伝』はすでに散逸したため、その内容の一部は、わずかに行霆の『諸天伝』に、及び天台の史伝書『釈門正統』や『仏祖統紀』などから窺い知ることができる。神煥の摩醯首羅に対する見解は、「夜叉説」を否定し、摩醯首羅を天主（大千主）の一人に相当するとする天台教学の伝統説である。行霆による神煥批判の要点は、本論の「記」の「神煥と行霆による「摩醯首羅」の見解」の節を参照。

◎『本行経』 行霆は『義楚六帖』卷一六「幽冥鬼神部」「神王」部の「摩醯首羅」条を依用したと見られるが、誤字脱字が多いため、内容にまとまりがない。ここでは『義楚六帖』「摩醯首羅」条の内容を再掲す

る。また底本のこの部分の現代語訳も『義楚六帖』『摩醯首羅』条の内容に従う。

『本行経』云、太子生已、西国之法、合礼天神。其名摩醯首羅、其神極悪、而（復）有霊。抱太子至其神所、神自離座下階、先礼太子。神曰、此は大聖太子、不応礼（余）、受礼頭破七分。

（『義楚六帖』卷一六）

参考として、『祖庭事苑』卷六「礼天王」条も附する。

如『本行経』、太子生已、西国之法、合礼天神。其名摩醯首羅。其神極悪、而復有霊。抱太子至其神所、神自離座下階、先礼太子。神曰、此は大聖太子、不応礼（余）、受礼頭破七分。

（『祖庭事苑』卷六）

ちなみに、『本行経』の原文には「摩醯首羅」は登場しておらず、「無畏」と名乗る女性の天神と太子の話になっている。

時迦毘羅去城不遠、有一天祠、神名増長。彼神舍辺常有無量諸釈種族童男童女、跪拜乞願、恒得称心。時浄飯王、將菩薩還、至彼天舍、告諸臣言、今我童子、可令礼拜是大天神。爾時乳母、抱持菩薩、詣彼天祠。

時更別有一女天神、名曰無畏。彼女天像、從其自堂、下迎菩薩。合掌恭敬、頭面頂礼。於菩薩足、語乳母言、是勝衆生、莫生侵毀。不応令彼跪拜於我。我応礼彼！何以故、彼所礼者、能令於人頭破七分。

（『仏本行集経』卷八）

◎其神極悪 唐代青竜寺良賁の『仁王経疏』卷下に、「孔雀王経説、烏尸尼国国城之東有林、名奢摩奢那。此云尸林。其林縱広満一由旬、有大黑天神、是摩醯首羅變化之身、與諸鬼神無量眷屬、常於夜間遊行林中。有大神力、多諸珍宝。有隱形藥、有長年藥。遊行飛空、諸幻術藥與人貿易、唯取生人血肉、先約斤兩而買藥等（中略）若嚮祀者、唯人血肉彼有大力、即加護人所作勇猛、鬪戰等法皆得勝也」と述べ、摩醯首羅の分身の一種である大黑天神は、人々に対し身隠しの薬や不老不死の薬を与えるかわりに、生きた人間の血や肉を求めようとし、この神を拝めば、人々は勇猛になり、戦争にも勝利できるといふ。

◎古人嘗議 、『入大乘論』卷下「順修諸行品」に、「問曰、所言摩醯首羅者、為同世間摩醯更有異耶？答曰、是淨居自在、非世間自在！汝言摩醯首羅者、名字雖同、而人非一。有淨居摩醯首羅、有毘舍闍摩醯首羅。其淨居者、如是菩薩鄰於仏地、猶如羅穀障。於一刹那頃、十方世界微塵教法、悉能了知。能以口吹十方世界皆大震動、又以一身遍一切仏国」と言い、摩醯首羅天には二種あると述べながらも、実際の姿形の異同には触れていなかった。行霆は恐らくこのような事例を踏まえ、夜叉説の可能性を論証しようとしたのではないかと思われる。

行霆が取り上げた二種摩醯首羅説に対し、宋代天台の宗暉は『金光明経照解』の卷下に、「霆師此説、後

賢更審之」(行靈の二種摩醯首羅説について、天台教学を勉強する後学たちは、その良し悪しをよく見分けるべきである)と指摘した。

ただし、摩醯首羅の位置づけについて、行靈の結論の一つは、「今既曰「大自在」及「威靈帝」、定非業叉矣」としており、このような「夜叉説」を否定する内容に、天台の伝統説と大きな隔たりが見られなかった。ちなみに、二種摩醯首羅説について、『重編諸天伝』の総序に相当する「息総別位次之争」には、次のような結論が示されており、「如摩醯首羅、当有二神。今之所供、乃大自在天尊特之主、非業叉中同名之者」(摩醯首羅という天神は、二人いるに違いない。しかし法要に奉請し供養する神は大自在天であり、同じ名前を持つ業叉ではない。)とした上で、行靈は最後まで「夜叉説」も固執したのであった。

◎執持鈴杵并尺Ⅱ「抃」は白い抃子のこと。湛然『輔行伝弘決』卷十之一に、「摩醯首羅天者、此云大自在。色界頂天、三目八臂、騎白牛、執白拂、有大威力、能傾覆世界」とある。「鈴杵」は「金剛鈴」、「金剛杵」のこと。行靈の活躍した宋代には、密教の新訳經典に、この二種の道具をよく見かけることができる。北宋の法賢訳『仏説瑜伽大教王經』卷一に、「右手擲金剛杵、左手執金剛鈴振動」とある。「尺」は未詳。あるいは細長い形にした「宝剣」や「棒」または「縋索」のようなものを指すと思われる。

※ ※ ※

然『楞嚴』又云、「窮諸行空、已滅生滅。而於寂滅、精妙未円。若於所帰、寔為自体、尽虚空界十二類内所有衆生、皆我身中一類流出、生勝解者、是人則墮、能非能執。摩醯首羅、現無辺身、成其伴侶。迷佛菩提、

忘失知見。」若爾則雖無覺觀、号令下界、而其執情未除也。又云、「背涅槃城、生大慢天。」

所謂尊極三界、慢心不忘、未免念動、則傾覆世界耳。既居十地、統攝大千、雖無号令、而有形色中、此天獨尊、故當崇敬、以仰威靈。儻指為三目藥叉、則其陋矣。

ただし、注意するべきは、『首楞嚴經』が説く〈十種天魔外道の一人として登場した摩醯首羅の〉次の一説である。すなわち、「修行者は」諸行が空であり、生滅流転の理をよく理解できても、〈これは物事の諸相への認識に過ぎず〉、本当の寂滅の道理をまだ悟らせてはいない。さらにこのような理解に満足し、修行の目的は達成されたと考え、天地万物、すなわちこの世界の中のあらゆる存在が自分と一つのものになるとの邪見を起こせば、〈修行者は〉理解していかないにも関わらず理解できたと思ひ込む、という自己矛盾に陥ってしまう。〈この類の例を挙げれば、十種天魔外道の一人である〉摩醯首羅は、無量無辺の姿を現し、自分の教えに追随する者たちに利益を与え、願いを叶わせたとしても、本当の仏の教えからは逸脱し、仏の知見にはまったく従っていないことになる」という。〈『首楞嚴經』が説く魔王としての摩醯首羅は〉仏の教えに基づく悟りを開いてなくても、確かに三界にいる彼の追随者たちに対し、号令することができた。しかし、摩醯首羅自身の迷いや煩惱が、これによつて取り除かれたわけではない。このように、『首楞嚴經』は摩醯首羅のことを「諸仏如来の悟りの教えに背き、位は大慢天（自在天の異名）に止まる」と言及したのである。

〈行霆は思うに〉摩醯首羅は三界の主宰者の一人ではあるが、〈理解してはいないにも関わらず理解できたと〉いう慢心を捨て切れず、思いのままに追随者たちの心をつかみ、色究竟天を牛耳っていた。しかし

〈諸々の經典が説いていた〉十地菩薩に位し、大千世界を主宰するのであれば、摩醯首羅自身の教えが広めなくても、色究竟天のみならず、色界の十八天の人々は、みな摩醯首羅を主宰者と認め、崇敬し、その威霊をなだめ慰めて福德を得ようとすることができる。〈摩醯首羅を〉三目の夜叉神のみであると決めつける論説は、一方的すぎると言わざるを得ない。

◎『楞嚴』又云『首楞嚴經』卷十に、「又善男子、窮諸行空已滅生滅、而於寂滅精妙未圓。若於所歸覽為自体、尽虛空界十二類内所有衆生、皆我身中一類流出、生勝解者、是人則墮、能非能執。摩醯首羅、現無辺身、成其伴侶、迷仏菩提、亡失知見。是名第二立能為心、成能事果、違遠円通、背涅槃城、生大慢天、我遍円種」とある。

『首楞嚴經』に見える「摩醯首羅」が、「大慢天」、即ち「自在天」に生まれる説は、天台の伝統説、即ち自在天ではなく、色究竟天に生まれる説とは異なる。行霆もこの『首楞嚴經』の引用内容について、否定的な姿勢をとっている。

◎雖無覺觀、号令下界〓この内容は、『首楞嚴經』の取り上げた十種天魔外道の一人である摩醯首羅に対する説明である。因みに行霆は『重編諸天伝』附録の「伝後統弁」の「弁衆天所主」項に、「摩醯首羅」を「摩醯首羅、色頂天主、亦三界主、故云尊極梵王、色界天主。亦大千主。故以有覺觀、故統上冠下、故云号令主」と位置づけ、『首楞嚴經』が言う「覺觀の無い」摩醯首羅とは一線を画した。

◎儻指為三目葉又、則其陋矣。神煥の旧『諸天伝』に疑問視する摩醯首羅葉又説に対する批判である。行靈『重編諸天伝』に、「即葉又者、所以『旧伝』以列位卑下為疑也」とある。

讚曰、

摩醯首羅尊極主、居于色頂自在天。
總摂三界為所統、一一雨滴知大千。
三目八臂執白扨、乘騎白牛化無辺。
能覆世界傾天地、拳世尊崇仰大権。
万六千劫乃其寿、身量高勝難比肩。
十地菩薩之報処、威靈超出無與先。
但執慢心迷正見、計十二類為生縁。
別有葉又亦三目、住羅多国名濫伝。
昔年太子曾往謁、西域欽奉類真仙。
既非色頂尊崇主、品位難齊地上賢。
故今明示知終始、庶希降鑿赴几筵。

※ ※ ※

讚じて曰く、

摩醯首羅は尊極の主であり、色頂の自在天に居す。

三界を総撰して統べる所と為し、一一の雨滴により大千を知る。

三目八臂にして白牝を執り、白牛に乗騎して無辺を化す。

能く世界を覆して天地を傾き、世を挙げて尊崇して大権を仰ぐ。

万六千劫、乃ち其の寿なり、身量は高勝にして肩を比べ難し。

十地菩薩の報処にくらいし、威靈は超出して先んずるもの無し。

但だ慢心を執して正見に迷い、十二類を計して生縁と為す。

別に菓叉あり亦た三目なり、羅多国に住して名濫りに伝う。

昔年太子曾て往きて調うことあり、西域欽奉して真仙に類す。

既に色頂の尊崇の主に非ずんば、品位も地上の賢に齊し難し。

故今に明示して終始を知らしむ、庶希くは鑿を降して几筵に赴く。

※ ※ ※

〔記〕

天台教学から見た摩醯首羅

「摩醯首羅」が法要に奉られ、諸天を代表する一員として登場できたことに関して、行霆は『重編諸天傳』の総序に相当する「息総別位次之争」の中で、「摩醯首羅」は天台教団の伝統行事である「金光明懺

法」に供養すべきのみならず、通常の法要にも奉られる必要があると力説した。そこで行霽は、通常法要と金光明懺法の道場設置図をも掲載し、重要な資料として後世に残した。この影響を受け、近世の中国仏教寺院は、「金光明懺法」をはじめ、「齋天」または「供天」と言われた通常法要を営む際に、「摩醯首羅」を供奉すべき諸天の一員とした。

行霽はさらに、『重編諸天伝』の「摩醯首天伝」に、宋代天台の神煥の見解を批判し、「二種摩醯首羅」という新説を立てた。ただし、法要に奉る「摩醯首羅」のみが、大自在天という天主の身分であり、悪鬼の類に属する夜叉衆ではないとも主張した。

しかし、この行霽説は後に南宋代に活躍した天台宗の宗暎に非難された。曾て行霽が批判した神煥の見解も、『釈門正統』や『仏祖統紀』などの天台史伝書に次々と転載され、天台教学の正説として紹介された。以下、天台教学がどのように「摩醯首羅」の地位を定めたかについて、その変遷を検討したい。

摩醯首羅と大自在天

曇無讖訳『金光明経』の「四天王品」に、諸天が釈尊の金光明説法を聞きに来た人間界の国王のために、密かに降臨し、四天王とともに護衛する一場面がある。その中で、「摩醯首羅」は、護法神の一員として登場していた。

大梵天王、釈提桓因、大弁天神、功德天神、堅牢地神、散脂鬼神大將軍等、二十八部鬼神大將、摩醯首

羅、金剛密迹、摩尼跋陀鬼神大將、鬼子母及五百兒子、周匝圍繞。阿耨達龍王、娑竭羅龍王、無量百千萬億那由他鬼神諸天、如是等衆、為聽法故、悉自隱蔽、不現其身。至是人王所止宮殿講法之處。

（『金光明經』「四天王品」）

唐代義浄三藏が新訳した『金光明最勝王經』の「四天王護国品」は、曇無讖訳『金光明經』の「摩醯首羅」の箇所を、「大自在天」と言い換えた。

梵宮帝釈、大弁才天。大吉祥天、堅牢地神、正了知神大將、二十八部諸葉叉神、大自在天、金剛密主、寶賢大將、訶利底母五百眷屬、無熱惱池竜王、大海竜王、無量百千万億那庾多諸天葉叉、如是等衆、為聽法故、皆不現身、至彼人王殊勝宮殿莊嚴高座說法之所。

（『金光明最勝王經』「四天王護国品」）

新旧二つの訳に登場した「摩醯首羅」と「大自在天」とは、同一人物であると考えられるが、その一方で、天台教学側からすると、混乱を防ぐために、天台教判で「摩醯首羅」と「大自在天」の関係を判定する必要性が生じたのである。

智顛の『観音義疏』は、『法華経』の「普門品」（『観音経』とも言う）に対する注釈書である。「普門品」に登場した大自在天について、智顛は以下の説明を行った。

大自在天は、色界の最上階に住む魔醯首羅のことである。『楼炭経』には「阿迦尼吒」と言い、『華嚴経』では「色究竟天」のことを指す。有る人は、〈大自在天を〉欲界の第六天の自在天のことであると理解するが、もろもろの経論典籍では大自在天が色界の最上階に住むと言う。『大智度論』巻九に、「淨居天を超えれば、そこには大自在天王と称する十住菩薩が住んでいる」と言い、これは大自在天が大千世界の主宰者である明証である。『十住経』に、「大自在天の輝く光りは、一切の衆生に照らす」と言い、南本『涅槃経』巻二十二に、「大自在天に供養することには無量の功德がある」と言う。このため〈魔醯首羅は〉欲界の第六天に住していないことは明白である。『釈論』巻二にも、「魔醯首羅は、大自在と訳し、この神は白い牛に乗り、八臂と三眼の威儀を持つ」という。

（大自在、即色界頂魔醯首羅也。『楼炭』称为阿迦尼吒。『華嚴』称为色究竟。或有人以为第六天、而諸経論多称大自在是色界頂。『釈論』云、「過淨居天、有十住菩薩、号大自在。」大千界主。『十住経』云、「大自在天光明、勝一切衆生。」「涅槃」、「献供大自在天最勝。」故非第六天。『釈論』云、「魔醯首羅、此称大自在、騎白牛、八臂三眼。」）

（『観音義疏』卷下）

ここで、智顛の判定とは、「摩醯首羅」は大自在天のことであり、欲界の第六天、自在天に住んでいるのではなく、色界の最上階、即ち色究竟天に住み、十住菩薩の位を有し、天主の一人であるとする。行霆が主張した「摩醯首羅」が「夜叉」にもなる説は、ここでも見当たらない。

智顛の弟子である灌頂は『涅槃経疏』は次のように言う。

大自在天は、すなわち魔醯首羅のことであり、色界の頂に住み、大千界を司る。十地の菩薩の位を有し、さまざまな姿で大千界に権現される。

(大自在天即魔醯首羅、居色界頂、主大千界。十地菩薩、迹現其中。)

(『涅槃經疏』卷二)

摩醯首羅は、色界の頂に住み、大千界を統率する。

(摩醯首羅、居色界頂、統領大千。)

(『涅槃經疏』卷六)

湛然の『輔行伝弘決』では次のように述べ、智顛とほぼ同じ論調であることも確認できる。

摩醯首羅天は、中国では「大自在天」と訳される。色界の最頂さいていに住み、三目八臂の威容を現し、白牛に乗り、白い払子を手執り、大いなる威力を備え、この世を統治する。世の中の者みんながこぞつて摩醯首羅に敬服し、彼を仏の教化を広める模範とする。『大智度論』に、「大自在天には、菩薩が住んでおり、その名は摩醯首羅と言う」と言い、『華嚴經』に、「これは第十地の菩薩である」という。

(摩醯首羅天者、此云大自在。色界頂天。三目八臂、騎白牛、執白拂、有大威力、能傾覆世界。舉世尊之、以為化本。『大論』云、「大自在天有菩薩居、名摩醯首羅。」「華嚴」云、「是第十地菩薩。」)

(『輔行伝弘決』卷十之一)

その後の宋代天台の諸師も、一貫して智顛や湛然の説を忠実に受け継ぎ、行靈が説く「夜叉説」は全く見当たらなかった。

『経』「摩醯首羅」、此云「大自在」。

(知礼『金光明経文句記』卷五之上)

『経』云、「摩醯首羅」、此云、「大自在」。三目八臂、是色天主。

(従義『金光明経文句新記』卷六)

〈杭州の上天竺寺の恵覚法師齊璧の〉弟子である神煥が曾て諸天の行位を再編したことがある。君臣、賓主、男女、本迹の四項目を基準にして、次の決まりを述べた。すなわち、大梵天は三界に君臨し、最高神として、諸天とともに彼に臣服する。そのため、〈三天主と言えば〉大梵天が、三界の主宰者であり、三目の摩醯が大千界の主宰者であり、帝釈天は地居天を始める三十三天の主宰者である。

(嗣子神煥嘗考論諸天行位、以君臣、賓主、男女、本迹為綱目、謂大梵尊天君臨三界、統上冠下、諸天皆其臣屬也。大梵為三界主、三目摩醯為大千主、帝釈主地居三十三天。)

(神煥の説。行靈『重編諸天伝』附録)

智顛の『金光明経文句』や『観音義疏』などでは、摩醯首羅のことを「大自在」、または「威靈帝」

などに訳出されたと言う。このため、智顛は摩醯首羅を天主、すなわち大自在天のことであると判定した。しかし、行霆の『重編諸天伝』では智顛の説に従わず、「自在天」と「大自在天」を混淆した。

(『疏』中謂此摩醯首羅、翻為大自在、威靈帝等。此乃天台指首羅為天主、大自在天也。而霆師『諸天伝』則不本此説。)

(宗曉『金光明經照解』卷下)

一方、天台教団に属していない行霆からすれば、天台教学の枠組みに束縛されることはなく、天台の伝統教学を汲みながら、『重編諸天伝』を通じて自分の新説、すなわち「二種摩醯首羅」説を世に広めることができた。

摩醯首羅と金光明懺法

行霆の『重編諸天伝』では、天台教団の金光明懺法を行う際には、会場の設置に当たり、「摩醯首羅」を奉請すべき諸天の一員と決めつけ、さらに金光明道場の設置図に「摩醯首羅」を置くべき場所までをも指定した。一方、天台教団はこのような設置をしたか否やが問題となる。

天台智顛の『国清百録』に収録された「金光明懺法」を確認すると、「摩醯首羅」が奉請すべき諸天の列には並べられなかった。

一心奉請大梵尊天、三十三天、護世四王、金剛密迹、散脂、大弁、功德、訶利帝南鬼子母等五百徒党。

(『国清百録』卷一、「金光明懺法」)

さらに宋代天台の遵式と知礼がそれぞれ再編した『金光明懺法補助儀』と『金光明最勝懺儀』のいずれも、智顛の「金光明懺法」の定めた内容のままであり、「摩醯首羅」を「金光明懺法」に取り入れようとはしなかった。

『重編諸天伝』には、同時代の天台僧奉規の序文が含まれている。奉規の序には、天台僧の淨梵は、遵式の『金光明懺法補助儀』に不満を持っていたため、新たに「金光明懺法」を作ったと説く。この記述について、『釈門正統』及び『仏祖統紀』の「淨梵伝」にも、遵式への不満を略されたものの、「金光明懺法」を再編した事実は記されていた。

北禅淨梵(？〜一二二七)は四明知礼門下の本如系の神悟処謙の弟子である。十歳の時に、温州勝果寺の師永懺主のもとで出家し、十八歳で、超果惟湛に就いて勉強し、その後、神悟処謙の弟子となった。元祐年間(一〇八六〜一〇九三)に、蘇州の大慈寺に住持し、二十七名の僧侶とともに、二十八日一期の法華懺法を三度も行った。淨梵は、積極的に懺法や授戒会を行ったほか、『金光明懺法』などの懺法儀軌も修訂したと言われていた。

淨梵が修訂した金光明懺法の内容は不明であるが、金光明懺法は宋初の知礼や遵式によって補訂されたあと、実際に作法を行う僧侶の間に様々な見解の相違が生じ、さらに修訂が加えられたこともまた事実である。

金光明懺法に対する修訂は、四明知礼門下の広智系の神智鑑文の弟子である明智中立(一〇四六〜一一一四、

宋代天台の祖庭である明州延慶寺四世住職）も行った。宗暁の『金光明經照解』巻下「韋駄天神」条によれば、智顛の「金光明懺法」や遵式の『補助儀』がこれまで奉請しなかった「摩利支天」、「韋駄天神」の両天は、明智中立によつて、奉請すべき諸天の一員として、作法の中に初めて取り入れられたという。明智中立は、祖庭延慶寺の第四世の住持であるため、彼が定めた変化は後世に大きな影響を与え、その後の金光明懺法のほとんどが中立の改正を受け入れていた。

日本の俊苒律師（一一六六～一二二七）は、建久十年（一二九九）に宋土に渡り、宋地の仏学を学んだ。南宋の嘉泰三年（一二〇三）に、四明知礼門下の南屏系の法脈を持つ北峰宗印（一一四八～一二一三、南屏系、明州延慶寺十五世住職竹菴可観の法嗣）の弟子となり、天台教学を八年間に亘つて修学した。日本に帰朝した後、京都の泉涌寺において宋土で習い憶えた懺法を実修した。その中に、「金光明懺法」も含まれ、泉涌寺版「金光明懺法」として現在も伝えられている。

遵式の『補助儀』に比べ、この泉涌寺版「金光明懺法」（拙著『宋代天台教学の研究』収録、二〇〇三、山喜房仏書林）は、「韋駄天神、堅牢地神、菩提樹神」の三天を加え、さらに泉涌寺所伝の金光明懺法道場莊嚴図では「摩利支天、韋駄天神、堅牢地神、菩提樹神」の四天の設置をも是認した。

泉涌寺版「金光明懺法」は、確かに、宋代中期より修訂された天台教団の「金光明懺法」の特徴を有するものの、一一七三年に刊行された『重編諸天伝』の影響を受けていないように見える。なぜならば、行霆が精力的に論議を展開し、奉請すべき諸天の一員として招きたかった「摩醯首羅」が、泉涌寺版「金光明懺法」では全く触れていなかったのである。

神煥と行霆による「摩醯首羅」の見解

ところで、「摩醯首羅」を金光明懺法などの法要に正式に取り入れようとするもう一人の推進者が居た。それは、四明知礼門下の南屏系の法脈に属する澄覚神煥（生卒不明）である。神煥は南屏系の慧覚齊玉法師（？く一二九）の法嗣であり、紹興年間（一一三一～一一六二）に、思溪の覚悟寺を住持していた。神煥は供天の儀式について、各地の寺院の諸天配列が統一されていないことに気づき、様々な經典及び天台の伝統的な教理説明を参照した上で、『諸天伝』（散逸した。行霆が著した『重編諸天伝』とは別物）を著し、諸天神の説明や配列時の注意点について論じた。同じく南屏系の竹菴可観（二〇九二～一一八二、宋代天台の祖庭である明州延慶寺十五世住職）は、神煥の『諸天伝』を高く評価したこともあった。

神煥と行霆は「摩醯首羅」に対する見解の同異を、次のように整理する。

神煥説の特徴一、

摩醯首羅は三天主の一人であり、大千世界主として「供天」の法要に奉請すべきである。

神煥説の特徴二、

摩醯首羅を夜叉神と見る者がいる。天台の伝統教学にはこのような説は見当たらず、正説ではない。諸天の配列順位について、尊卑、長幼の序を守らなければならず、夜叉神としての摩醯首羅を認めるわけにはいかない。

行霆説の特徴一、

摩醯首羅は三天主の一人であり、大自在天、色頂天主として金光明懺法または通常の法要に奉請すべきで

ある。法要に奉請する摩醯首羅は夜叉神であつてはならない。ただし、法要に同参できる夜叉神の権利を剥奪してはいけない。

行霊説の特徴二、

大自在天を魔王と見なす『首楞嚴經』の説の影響を受けたと見られ、「大自在天」と「自在天」と混同する一面がある。

行霊説の特徴三、

様々な経典や論説または凶像から、摩醯首羅という夜叉神が存在することは否定し難い事実である。二種摩醯首羅説を認めるべきである。

行霊説の特徴四、

諸天の配列順位に関して、尊卑、長幼の序を守らなければならないという神煥の見解について、今時の法要では、天童八部が一堂に集まり、『華嚴經』に従えば、四十二の階位にいる様々な凡聖は皆な同列になり、夜叉神であるために、他の諸天と同列に扱うことはできないことは偏見であると言わざるを得ない。

以上のように、両者の論点の最大の相異は、「摩醯首羅は夜叉神であるや否や」という点に絞られる。しかし、両者が活躍した時代においては、少なくとも天台教団では、「摩醯首羅」を法要の奉請対象とすることを、広く実現できなかったようであつた。

南宋代の宗鑑が再編した『釈門正統』（初編は鐙菴吳克己によるもの）巻七の「神煥伝」によれば、当時、各地の寺院で行われた金光明懺法には、『金光明經』「鬼神品」に基づくものの、祭られた諸天の配列は統一されていなかった。神煥は少なくとも「七神」、「十六神」、「十八神」、「二十一神」の四種の配置法が存在した

という。これらの説を取捨し、神煥は「二十一神」説に近い「二十神」説を提起した。

智顛の「金光明懺法」が指定した奉るべき功德天、大弁天、四天王の六神を除き、増補された天神の名称や実態については、神煥は詳しく言及しなかった。しかし「神煥伝」の所録により、神煥が主張する「二十神」説は以下のものであると整理できる。

神煥の「二十神」説

大梵天、帝釈天、四天王、功德天、大弁天、摩利支天、韋駄天神、金剛密迹、摩醯首羅、散脂大將、菩提樹神、堅牢地神、訶利帝南鬼子母、日天、月天、竜王、閻羅。

（『釈門正統』巻七「神煥伝」、『仏祖統紀』巻三十三録神煥述「供天礼文」より整理）

神煥は、「訶利帝南鬼子母」を「訶利帝南」と「鬼子母」の二神に分ければ、以前に流行した「二十一神」説になるが、天台教理に従えば、「訶利帝南鬼子母」を一神と見るべきであると定めた。

因みに、行寔が主張する「二十神」説は、その奉請する順序は神煥説と異なるが、登場した諸天の名称はまったく同じである。

行寔の「二十神」説

功德天、大弁天、大梵天、帝釈天、四天王、日天、月天、金剛密迹、摩醯首羅、散脂大將、韋駄天神、堅牢地神、菩提樹神、鬼子母神、摩利支天、竜王、閻羅。

（『重編諸天伝』「息総別位次之争」「熏修道場図」より）

神煥と行寔は、教理思想について見解の相違が見られるものの、「金光明懺法」に奉請すべき諸天については、意見がほぼ一致したことは明らかである。行寔説は当時の天台教団に大きな影響を与えたこととは考

えにくい、天台教団に属する神煥の説に対しては、宋代天台の祖庭である延慶寺の十五世住職竹菴可観から次のような高い評価を受けた。

神煥の『諸天伝』の序文は数百字のみではあるが、諸天の分け方の意義を述べ尽くした。大誓言を立て、諸天を護持しようとする気持ちがよく伝わった。

(只数百字。囊括諸天。発誓護持之意尽矣。)

(『釈門正統』巻七「神煥伝」)

神煥の『諸天伝』の序文は数百字に過ぎないが、諸天の分け方の意義を述べ尽くした。

(大略数百字。囊括殆尽。)

(『仏祖統紀』巻十五「神煥伝」)

吳克己と宗暁による「摩醯首羅」の見解

天台宗史伝書『釈門正統』の編者の一人である吳克己(一一四〇～一一二一四)は、「装天像願文」(『釈門正統』巻三収録)を著し、南宋当時の金光明懺法などの方等經典の法要を行う際に設置すべき諸天像の名称を記した。その中、神煥と行霆の記述と同様に、摩醯首羅を奉るべき諸天の一員であると認めた。「装天像願文」に見られる諸天は、功德天、大弁天、地神、散脂大将、四天王、大梵天、帝釈天、摩醯首羅、金剛密迹、韋駄天、摩利支天、樹神、鬼子母などである。この中の地神、摩醯首羅、韋駄天、摩利支天、樹神の名は、

智顛の「金光明懺法」や遵式の『補助儀』には書かれておらず、恐らく明智中立または神煥の説から影響を受けたものであると考えられる。

しかし、宗暁の『金光明経照解』は、明智中立（一〇四六～一一一四、広智系、宋代天台の祖庭である明州延慶寺四世住職）による「金光明懺法」の改正を認めたのみであり、神煥と行霆が主張する「摩醯首羅」を法要に奉請すべきとする説については、まったく触れていなかった。

宗暁（一一五一～一二一四）は、月堂惠詢（一一一九～一二七九、広智系、宋代天台の祖庭である明州延慶寺十四世住職）の門下であり、延慶寺の首座を務めたこともある。宋代天台中興の祖である四明知礼の伝記資料『四明尊者教行録』を編纂したことで名を揚げた人物である。ほぼ同時代の竹菴可観（一〇九二～一一八二、南屏系、宋代天台の祖庭である明州延慶寺十五世住職）では、同じく南屏系の神煥の『諸天伝』を高く評価したのに対し、宗暁は『金光明経照解』を撰述する際に、行霆の『重編諸天伝』の一部内容を参考にし、神煥の『諸天伝』には一言も言及しなかった。教団内部の派閥に教理の相異が存在することは想起できるが、明智中立の代に「金光明懺法」の改正に終止符を打ちたかったとも考えられる。以上のように、「摩醯首羅」の法要入りについて、宗暁はやや消極的であると言わざるを得ない。

志磐の「十六神」供奉説

神煥や行霆が「摩醯首羅」の地位について問題提起して以来、宋代天台教団内容による「摩醯首羅」の法要入りについて、派閥によってさまざまな意見があったと見られる。宋代天台において、この問題に一定の

決着を付けたのは志磐（生卒不明、十三世紀後半に活躍）の『仏祖統紀』であった。

志磐の伝記は現存していないが、『仏祖統紀』に述べられた志磐に関する断片的な記載によれば、志磐は明州東湖（今の浙江省寧海県東銭湖）の月波山福泉寺の沙門であり、俗姓は盧氏、四明の出身、後漢の中郎尚書盧植（約一五九〜一九二）の三十二代子孫に当たることが分かる。また、餘姚の法性行持禪師（号は牧菴、雲門宗の僧）は志磐の高伯祖であることも記されている。

志磐は幼年、絜齋先生袁燮（一一四四〜一二二四、明州淳熙四先生の一人、宋代儒教四明学派の代表人物）の姪である儒学者袁機のもとで勉強した。南海（今の広東省廣州市）に一時移住した後、明州の福泉寺にて出家した。天台宗の法系伝承により、志磐は明智中立の弟子定慧介然とは五世代の間隔があり、宋代天台の広智系に属する人物である。『仏祖統紀』巻二四に示された法系図から推算すれば、志磐は広智尚賢——扶宗繼忠——草堂処元——息菴道淵——円辯道琛——月堂慧詢——逸堂法登——石坡元啓——無住宗淨——大石志磐の法系に属することになる。

まず、神煥『諸天伝』の序文について、『仏祖統紀』巻一五の「神煥伝」に収録したものを、『釈門正統』の引用文と対照して見ると、志磐により改正された箇所が二つ存在する。

一、金光明懺法の「七神」、「十六神」、「十八神」、「二十一神」の四種の配置法を「十二神」、「十六神」、「十八神」の三種の配置法に改正した。

二、神煥は法要に取り入れた「日宮天子」、「月宮天子」、「娑竭羅竜王」、「閻摩羅王」の四天に関する記述を削除した。

神煥が示した法会の諸天の配列数を、志磐は都合の良いように変えたことについて、志磐にはそれなりの

意図があり、自ら提唱した法要「十六神」配置説を、改正された神煥説をもって根拠づけたかったと考えられる。

『仏祖統紀』巻三三の「法門光顯志」は、宋代天台教団が行った様々な儀軌を紹介している。その中に、諸天神を祭る儀式を紹介する「供天」の一節がある。ここで志磐は、供天の法門を「金光明懺法」の一環と見て、実際に儀式を行う時の諸天の順位は、神煥が説いたように「主客」、「男女」、「本迹」、「顕晦」の四義に従って配列しなければならないと説いた。

志磐の説明は次の通りである。

私（志磐）は曾て神煥法師の「四義」に従つて、「供天礼文」（印版は東錢湖の尊教寺塔にある）を作り、供養すべき諸天を十六名と定めた。最初は大梵天と帝釈天であり、その次は北方天王である。知礼法師は『金光明經文句記』の中に、「經を説くものが先に北方を言う理由は、インドでは北の方向を上と見るからである」と説明した。北方天王の次は東方、南方、西方の天王であり、その次は功德天と大弁天である。摩利支天及び韋駄天については、明智法師が南湖に住持する時に加えられたのである（この事は『仏祖統紀』の「明智伝」に掲載していた）。その次は密迹、散脂、樹神、地神、鬼母、二十八部鬼神の順である。全部で十六名であり、この順序を以て法要の儀軌にしたい。訶利帝は中国では「悪賊」と訳され、これは鬼子母の怖い姿による訳語でもある。なぜならば、鬼子母は戒を受ける前に、王城の男女を喰らい、任人は彼のことを怨んでこのような名前を付けたからである。今、仏の教えを守るために、「訶利帝」の字面を削除しなければならない。神煥法師の『諸天伝』及び石芝宗暁の『金光明經照解』は共に、「『金光明經』には、訶利帝と鬼子母が分かれて登場したが、実は同じものである」と説明して

いた（先師無住宗浄法師は月波山慈悲普濟教寺に住した時、常に新年の「金光明懺法」において、「訶利帝南」の四字を削除し、唱えることもしなかつた。彼は「祖師たちは唱える時に、意味を理解せずにただ経文をオウム返しするだけで、これを削除することを怠つた」と述べた。確かその通りである）。祭る諸天の数を十二とした理由とは、『国清百録』の「金光明懺法」に従つたからであり、数を十四としたのは、後の人が樹神及び地神を加えたからであり、数を十六としたのは、摩利支天及び韋駄天を加えたからである。日宮天子、月宮天子、娑竭羅竜王などを加えて、十八、二十とするのは『金光明經』の内容に拠るものであるが、加えずである。行寔法師の『重編諸天伝』が、まさにこのような悪い手本である。

（述曰、誓嘗案煥師義、述「供天礼文」〔板在東湖尊教寺塔局〕定十六位。先梵釈、次北天。法智謂、「經先標北方者、西土以北方為上。」次東南西天、次功德大弁。若摩利支、韋駄二天、是明智住南湖日加入之（事見本伝）。次密迹、散脂、樹神、地神、鬼母、二十八部。共十六位、以此為定。訶利帝此翻惡賊。蓋是鬼子母、未受戒時食王城男女、居人怨之故作此目。今既護法、須當削去。煥師「天伝」、曉石芝「光明助解」、並云、「經中双拳、祇目一人」（浄無住居月波日、每當歲旦修懺、必於天位刪去訶利帝南一句、不令称唱。謂「祖師但順經文、失於刪削」。然哉！）。旧立十二位者、依『懺儀』也。十四位者、後人加樹神地神也。十六位者、加摩利支韋駄也。或加日月娑竭羅龍等、或爲十八、或爲二十。雖掘經文、実為汎濫。世有寔師「天伝」者、正墮此弊也。）

志磐は、神煥の「四義」に基づき、新しい「供天礼文」を作り、諸天を十六員と定めた。『釈門正統』が引用した神煥の序文では、二十員と定めたにも関わらず、志磐の『仏祖統紀』では「日宮天子」、「月宮天子」、「娑竭羅竜王」、「閻摩羅王」の四天を削除し、神煥への批判を避け、行寔説のみへの批判と展開した。

志磐が定めた「十六神」供奉説には以下の五つの特徴が見られる。

一、神煥や行霆が主張する供養の諸天が二十天であるのに対し、志磐は十六天でよいと定めた。その配列順次も神煥や行霆の主張とは異なる。

二、志磐は、『国清百録』の「金光明懺法」及び神煥の「四義」に従い、諸天の順位を大梵天・帝釈天、北方天王・東方天王、南方天王・西方天王、功德天・大辯天、摩利支天・韋駄天、密迹金剛・散脂大将、樹神・地神、鬼子母・二十八部と定めたが、『国清百録』の「金光明懺法」に見られた「五百徒党」のことをまとめて「二十八部」に改編した。

三、遵式や行霆が定めた釈尊の両脇に功德天、大弁天を置く作法に対し、志磐は神煥の「男女」、「主客」説に従い、二天を釈尊の両脇から離し、両班に設置した。また志磐は神煥の「顕晦」説に従い、両天女は仏の教えを宣揚したことがあるため、ほかの諸天よりも上位に置かれるべきであると定めた。

四、神煥や行霆がともに主張する法要に取り入れるべき日宮天子、月宮天子、娑羯羅竜王、閻摩羅王の四神を儀軌から削除した。そして同じ天台宗の先輩である神煥への批判を意図的に避け、批判の矢先をすべて行霆に向けた。

五、依然として、志磐は「摩醯首羅」を法要に配列しなかった。

第五点について、小論前述のように、宋代には、「摩醯首羅」の地位について、様々な意見が存在する。本来、『国清百録』の「金光明懺法」及び遵式の『金光明懺法補助儀』などは「摩醯首羅」を奉請したことがなく、神煥も行霆も、「摩醯首羅」がもし夜叉であれば、祭る対象になってはいけなうと言う。志磐はここで、「摩醯首羅」を採らない理由を明らかにしていないが、『仏祖統紀』卷三一「諸天通論」章の「論天

主」にその理由らしい記述がみえる。それによると、「摩醯首羅」及び「大梵天」は共に天主であるが、それぞれ主管する場所が異なる。「摩醯首羅」は色界の最上界に居り、素晴らしい果報を有するために天主となり、「大梵天」は色界の初禪天に居り、諸天を統率する働きを有するために天主となるのである。また「初禪天」に居る「大梵天」は言語に通じているため、世間の衆生を号令できるのである。しかし「二禪天」以上には言語という手段の必要性がなくなった。「金光明懺法」の場合には、色界の最上界にいる言語という手段がなくなつた「摩醯首羅」よりも、衆生に号令できる「大梵天」を祭るのが相応しいと解釈した。このような解釈は、既に宗暁の『金光明経照解』巻下「問答釈疑」の第十一問に見えるため、志磐は宗暁の説を引用しただけであると思われる。

以上のように、志磐は「金光明懺法」で祭る諸天を十六名と指定したが、教団内部への配慮が見られ、なぜ「十六」にしたかについての理由も、天台独自の教理に従うものであり、一般の僧侶に対しては、丁寧に説明することができていない。明清乃至近代では、志磐の説と行霆の「金光明道場図」の説の二系統が並行して伝わることになり、宋代以降の僧侶たちには、法要の設置について、この二系統の異説を選別する立場に置かれていたのである。

宋代以降の金光明懺法と摩醯首羅

元王朝に活躍した天台僧自慶は、一三四七年に『増補教苑清規』を刊行した。『増補教苑清規』の序文によれば、雲外法師自慶は杭州天竺山の大円覚教寺の住持である。『教苑清規』の印版は上天竺山の白雲堂の

火災によって失われ、自慶は自分の所蔵した『教苑清規』を再訂し、さらに禅院、律院の清規との区別を考慮し、『増補教苑清規』を刊行したのである。

『増補教苑清規』には、金光明懺法の規定も書かれている。「誠勸門第八」の「月分須知」に、毎年正月の始めに、各寺院は祈祷、又は七晝夜や三晝夜の金光明懺法、又は三日間の供天の儀を行うべきであると記し、ほか十一月にも、二十三日の冬至の日に、金光明懺法の実行、または諸天に冬の齋食を供養すべきと規定した。

この記述から、当時は伝統の「金光明懺法」と、志磐が決めた「金光明懺法」から派生した「供天」の儀を混同していたかのようにも見える。ほかの記録がないため、その実態は全く不明である。

明末の藕益智旭（一五九九～一六五五）は仏教の諸宗統合を目指し、仏教各宗教学の振興に力を尽くした。彼が最も力を入れたのは天台教学であり、常に天台の教観双修の基本に従って、教学と懺法を共に行った。

門人の成時は智旭の文章を集め、『靈峯宗論』十巻を刊行した。『靈峯宗論』の巻一には金光明懺法に関する文章が三篇収録されている。「再礼金光明懺文」は、智旭ら六人が金光明懺法を行う時に読んだ礼懺文である。文中では奉請する主尊を「功德大天」と示した。もう一篇の「礼金光明懺文」の中で、智旭は、金光明懺法を「最勝経王吉祥妙懺」と呼んでおり、これは知礼の編集とされた『金光明最勝懺儀』の流れを受けた可能性があると思われる。また奉請する主尊も功德天に決めていた。

この二つの資料により、智旭が行った金光明懺法の主尊が功德天になり、天台智顛の『国清百録』に決めた「金光明懺法」の原点に復帰したかとの意図が見える。

さらに「講金光明懺告文」では、智旭は明確に、遵式の「金光明懺法補助儀」に従うと言い、法要に奉る

諸天も、大梵、帝釈、護世四王、大功徳天の七名に決めた。元明代の戦乱を経て、すでに式微に向いた天台教団の伝統儀軌「金光明懺法」の再興について、智旭の選択は行霊の「二十神」説ではなく、志磐の「十六神」説でもなく、もつとも原点に近い智顛の『国清百録』に類似する方式である。もちろん「摩醯首羅」は智旭が行った「金光明懺法」には登場していない。

明末清初の弘賛（生卒不明）は、広東地方で活躍した名僧であり、金光明懺法に關係する『供諸天科儀』を著した。

『供諸天科儀』の序文によれば、供天の作法は本来、『金光明經』由来の金光明懺法から派生したものである。金光明懺法の場合には、功徳天を主神として仏の隣に奉り、道場が広げれば、さらに大弁天や四天王を設置する。そして先に主客尊卑の順に従い諸天を奉請し、その次に八部を一括して奉請し、最後に功徳天を奉請すること三回、天女呪を諷誦すること七回、功徳天及びその従属を招請することをもつて終了する。かつては、奉請する諸天を十六名とした場合もあり、後に日天、月天、竜王、閻魔が加えられ、二十名とされた場合もある。最近の寺院は、二十四名を置く場合もあるが、これは正しい置き方とは言えない。供天の作法や奉る諸天は、金光明懺法とはやや異なるものの、その置き方は決めた儀軌に従う必要があるという。

弘賛の序では、金光明懺法の内容について、遵式が編纂した「金光明懺法補助儀」及び行霊が著した『重編諸天伝』にその根拠があるという。供天については、志磐の『仏祖統紀』卷三十三「法門光顯志」に記載された神煥説に基づく「供天」の内容から影響を受けたとも述べた。

弘賛の『供諸天科儀』には、摩醯首羅を諸天の一員として奉られていた。『供諸天科儀』に見られる諸天を奉請する順序は、大梵天——帝釈天——北方天王——東方天王——南方天王——西方天王——金剛密迹

——摩醯首羅——波旬魔王——散脂大将——弁才天——功德天——韋駄天——堅牢地神——菩提樹神——歡喜夜叉（鬼子母）——摩利支天——日宮天子——月宮天子——四大電王——娑羯羅阿耨達竜王——蓮華面夜叉王——乾闥婆王——阿修羅王——金翅鳥王——緊那羅王——莫呼羅伽王——閻魔王である。さらに、その後、楞嚴呪を読むのであれば、楞嚴会を護衛する諸天八部聖衆も奉請しなければならないとする。

上記諸天の配列について、志磐が決めた摩醯首羅抜きの「十六神」説よりも、行霆『重編諸天伝』に書かれた通常仏会の内容に類似し、その上でさらに波旬魔王、四大電王、蓮華面夜叉王、乾闥婆王、阿修羅王、金翅鳥王、緊那羅王、莫呼羅伽王などの天神が加えられた。それぞれの天神の紹介は、弘誓が行霆の『重編諸天伝』の内容を多く参照し、『供諸天科儀』の「諸天行儀」章に記した。弘誓は序の中で、「摩醯首羅」を含む供養すべき諸天が、『重編諸天伝』の説に従うと明言したが、新設した諸天が作法の中に加えられた理由を、全く明らかにしていない。

南宋の志磐が編纂し、明末の祿宏（一五三五～一六一五）が校訂し再編した『法界聖凡水陸勝会修齋儀軌』六卷は、水陸道場の作法を紹介するものである。清末の咫観（同治年間（一八六二～一八七四）に活躍）は、その注釈書『鶏園水陸通論』（『法界聖凡水陸大齋普利道場性相通論』とも呼ぶ）九巻を著した。この二種の法要関連の著述は、ともに統藏経に収録されている。

『法界聖凡水陸勝会修齋儀軌』巻二には、金光明懺法に近い諸天を奉請する作法が記されていた。その奉請する順序は、大梵天——帝釈天——多聞天王——持国天王——增長天王——広目天王——大功德天——大弁天——摩利支天——金剛密迹——北天散脂尊天——南天韋駄尊天——菩提樹神——堅牢地神——鬼子母天——二十八部天であり、『仏祖統紀』に見られた志磐の「十六神」説と一致し、「摩醯首羅」は見られなかつ

た。

しかし、清末になると、咫観の注釈書『鵝園水陸通論』では、「光明会上、二十諸天」と示し、神煥及び行霆の「二十神」説を取り入れていた。もともと七日一期の水陸会を行う際に、第五日目に、金光明法会を行う必要があるため、咫観はもう一度古来の「金光明懺法」の設置法を確認して、志磐の「十六神」説を放棄し修正を行ったと思われる。

筆者が所蔵する源洪法師儀潤（生卒不明）編纂の『水陸儀軌会本』も清代の作であり、志磐の『水陸儀軌』に書かれていない具体的な進退の規則や水陸道場の設置図などを増補したものである。その第六巻に、水陸道場内に掛ける水陸畫式などが収録されている。全部で二十三席、計七十三軸の畫式の中で、様々な仏会の諸天図が集められていた。その中の上堂第八席の左軸は『金光明經』に従ってできたものである。描かれた二十名の天神も行霆の『重編諸天伝』に記された「通常仏会」の「二十神」説と同様であり、もちろん「摩醯首羅」はその中の一員である。

『供諸天科儀』、『鵝園水陸通論』、『水陸儀軌会本』の三つの例から、清代に、金光明修懺作法の諸天を供養する部分のみが独立され、「供天」作法として成立したことが分かる。この三種の著述は、少なからず行霆の『重編諸天伝』の説に影響を受けたと見られる。「摩醯首羅」もこのような流れのもとで近世の法要に奉られる諸天の一員として徐々に定着したのである。

「二十四神」 供奉説の再出現

鎌田茂雄編『中国仏教儀礼』（東京大学東洋文化研究所、一九八六年）には、民国時代の二種類の金光明懺法の資料、『禅門日誦』の「金光明懺齋天法儀」と『訂定齋天科儀』を収録している。

『禅門日誦』の「金光明懺齋天法儀」について、一部の増補を除き、智顛や遵式が制定した金光明懺法の範疇をほぼ超えてはいない。当然、「摩醯首羅」は登場しない。ただし、題名に「齋天」二字を加えた点は興味深い。清初の弘贊は金光明懺法の一部を独立させ、「供天」の儀式を確立した。『禅門日誦』では、かつて独立された「供天」の儀式をもう一度金光明懺法と合併させようとする動きに見える。

筆者の調査によれば、『中国仏教儀礼』が収録した『禅門日誦』は、中国の湖北省荊沙市の章華寺で作られたものである。撰者や刊行時期について書かれていないが、清代の中期にできたものと思われる。現在、その初版である清代の刊本は一冊のみ存在し、貴重書として章華寺の寺宝となっている。

清代に完成された『禅門日誦』所録の「金光明懺齋天法儀」は、民国時代にさらに増補された。『中国仏教儀礼』にはその「金光明懺齋天法儀」の修訂版『訂定齋天科儀』も収録されている。同じく章華寺の僧である寛蓮は、『訂定齋天科儀』の編者である。

寛蓮（一九二六～一九九七）は十二歳で、牟尼庵演林法師のもとで出家し、十六歳で、湖南省の古大同寺にて具足戒を受けた。その後は章華寺に移り、維那、知客などを歴任した。二十三歳になると、廬山の東林寺で一年間の浄土行を修し、それが終わると、再び章華寺に戻り、知客を再任した。一九四九年後、中国仏教協合理事、湖北省仏教協会副会長、章華寺方丈などを務めた。『訂定齋天科儀』は、寛蓮が一九四三年の夏

に修訂し終えたものであると見られる。

『訂定齋天科儀』の序文によれば、齋天の法門は、必ず『金光明経』に従う。修行者が祈願すれば、功德天はその要求を必ず叶える。このような修行法は浙江、広東、南洋、北京、武漢などの寺院で盛んに流行し、偶に福建及び台湾の寺院にも見える。しかし、儀式の次第はそれぞれの実行者によって異なっていたため、寛蓮は、『国清百録』の「金光明懺法」、知礼の『金光明最勝懺儀』、遵式の『金光明懺法補助儀』の三書を参照して、相互に補訂し、『齋天科儀』の善本を修訂したという。

この序文からすれば、志磐が制定した金光明懺法から派生した法要「供天」は、智顛や遵式が制定した金光明懺法に合併されるべきであり、「供天」と金光明懺法を合併しても、この法要の主尊は『金光明経』に基づき、功德天にしなければならないという。しかし、同じく『金光明経』の由来とは言え、もともと目的の異なる「供天」と金光明懺法を合併するには、諸天が登場する順序まで配慮しなければならない。この点について、寛蓮の『訂定齋天科儀』では、次のように対処した。

法要始めの際に、諸天を奉請する順序は、従来の「供天」の儀軌に近い大梵天——帝釈天——北方天王——東方天王——南方天王——西方天王——日宮天子——月宮天子——金剛密迹——摩、醯、首、羅——散脂大将——大弁天——韋駄天——堅牢地神——菩提樹神——鬼子母——摩利支天——竜王——閻魔——功德天にした。『金光明経』「空品」の偈文を説き終わり、礼拝と供養を行う際に、功德天——大弁天——大梵天——帝釈天——持国天王——增長天王——広目天王——多聞天王——金剛密迹——散脂大将——韋駄天——堅牢地神——菩提樹神——鬼子母——訶利帝南——摩、醯、首、羅——日宮天子——月宮天子——星宮天子——三十三天——閻魔——竜王——緊那羅天——光明会上護法諸天という「金光明懺法」に基づく「二十四神」の順序に

した。

寛蓮がここで、金光明懺法の「二十四神」供奉説をはじめて正式に儀軌資料に取り入れた。また、『禪門日誦』の「金光明懺齋天法儀」には登場できなかった「摩醯首羅」が、清代の寺院に流行した『供諸天科儀』、『鶏園水陸通論』、『水陸儀軌会本』の記述と同様に、法要に奉る諸天の一員であると認めた。

現代に行われている金光明修懺作法は、そのほとんどが「齋天」と呼ばれ、弘贊の『供諸天科儀』或いは民国に成立した『齋天科儀』の流れを受けたものであり、「摩醯首羅」を含む「二十四神」供奉説に従ったものでもある。

その作法の手引きとして、『宝華律堂齋天科儀』（新文豊、一九九七）などは各寺院によつていまも利用されている。「齋天」が行われる期間は毎年の旧暦正月に限られる。道場の設置について、一般的には前日の午後、寺院の大殿又は法堂の前の空き地に、三つの壇を建てる。第一の壇は主壇であり、釈尊の像が祭られる。さらにその周辺に、香、華、燈、水、果、茶、食、宝、珠、衣などの「十供養」が置かれ、釈尊の両側には、二十四神の位牌が設置される。壇の前には七つの坐蒲が置かれ、法事に参加する僧侶の座席となる。真ん中の席は導師の座であり、残りの六席は法楽を演奏する僧の席である。第二の壇は、諸天を奉請するために設けられる。壇の上には諸天を奉請する疏文が置かれ、紙で作った金馬、碧鶏も置かれる。諸天に疏文を伝達するためのものを意味するであろう。第三の壇は、諸天のための供養を置く壇である。一般的には二十四組の食器及び精進料理が置かれる。

金光明懺法の「二十四神」供奉説は、かつて清初の弘贊の『供諸天科儀』に「置く位置がない」また「安置する序列に相応しくない」などの理由で否定されたものの、後に復活できた事実は、「二十四神」供奉説

が清初から数世紀を経ても根強く存続できたことを物語る。また宋代天台教団では天台教学の立場において、繰り返し論証した訶利帝南鬼子母が二神ではなく、一神であることも、恐らく数合わせしやすいため、再び「訶利帝南」と「鬼子母」に分けられた。この点から、当時の中国仏教では、一宗一派の教理思想に拘らない面があることも覗い識ることができよう。金光明懺法も天台教学に基づく天台宗独自の作法から、宗派に問わず一般寺院にも受け入れ易い「供天」や「齋天」の作法へと変容したのであった。「摩醯首羅」もこの流れに乗って、天台教団独自の「金光明懺法」から中国仏教儀礼の通常法要に正式に登場することとなった。

(了)

臨濟宗の回向文 訳注（二）

——尊宿送喪の念誦と回向文（上）——

妙心寺派教化センター 教学研究委員会 小川 太龍

本稿（『臨濟宗の回向文 訳注（二）』、ならびに次稿の前半箇所では、『論叢』本号に同時掲載、丸毛俊宏「臨濟宗の回向文 訳注（三）——尊宿送喪の念誦と回向文（下）・尊宿臨時行事の回向文——」、尊宿の送喪に関する念誦と回向文の訳注を試みる。

現在、臨濟宗各派において用いられている尊宿送喪の念誦・回向文は、永祿九（一五六六）年に編纂された天倫楓隱（生没年未詳）の『諸回向清規式』と、貞享元（一六八四）年に刊行された無著道忠（一六五三—一七四五）の『小叢林略清規』に拠るところが大きい。そこで本訳注稿では、『諸回向清規式』を底本とすることを基本として、それがない場合は『小叢林略清規』を用いる。さらに現在、行われるものの両本に未収の場合は、適宜『諸回向清規式抄』（禅文化研究所編集部編、二〇〇四年）、『江湖法式梵唄抄』（改編版）吹田良忠監修・禅文化研究所、臨濟宗経典研究会編、二〇一八年）を用いることとする。

また『諸回向清規式』については、『大正新脩大藏經』卷八一所収本と善通寺（香川県・真言宗善通寺派総本山）所蔵本（明暦三年版・一六五七年）、『小叢林略清規』については、同じく『大正新脩大藏經』卷八一所

取本と江湖叢書影印本（貞享元年版・一六八四年）との、それぞれ字句の異同を確認する。

さて、尊宿送喪の念誦と回向文を取り上げるにあたり、その内容と式次第を確認しておこう。ただし、現在の式次第は、伝統を継承しつつも、必ずしも古形と同じではなく、また完全な統一が取れている訳でもない。すなわち、『江湖法式梵唄抄』が指摘するように、現在では古くはなされなかつた密葬と津送を分けて行うことも多く（六八頁a）。また、各種清規には見えるものの現在ではほとんど行われない仏事もある（「掛真仏事」「拳哀仏事」等）。一方で清規には見えない回向が現在ではなされることもあり（「鎖龕回向」「起龕回向」は行われることがあっても管見の限り現在のものとは異なる）、さらに地域や状況による差異もある。すなわち、全てを網羅した式次第を把握することは困難を極めるのである。しかしながらひとまず、現在の尊宿送喪の指針となっている『江湖法式梵唄抄』に沿って、以下にその細目を《1》から《10》まで挙げ、簡単にその内容を示す。なお、訳出を試みる念誦と回向文は、ゴシック体で示し、題の下に訳注に用いる底本も合わせて記す。

《1》「入龕仏事」（訳注底本『小叢林略清規』）

遺体を龕がだ（棺）に納める納棺の仏事であり、淨髪・沐浴の後、法衣（涅槃衣）を着け入龕する。入龕の後、「入龕念誦」を唱え、「十仏名」を唱和し、入龕念誦諷経として『大悲呪』（『大悲円満無礙神呪』）を唱え、「回向（入龕念誦諷経回向）」を行う。清規によっては、この後に「楞嚴呪」「回向」を載せるものがある（本稿訳注「尊宿大夜念誦」注（6）参照）。

《2》「当夜念誦（とうやねんじゆ）」（大夜念誦（たいやねんじゆ））（訳注底本『諸回向清規式』）

現在は通夜の念誦にあたる。当夜は遷化したその日の夜を指し、大夜は遷化した次の日の夜で茶毘の前夜を指すとも言われ、諸清規の記述から勘案してもそれが窺える。諸本により当夜と大夜の名付けは異なるものの、その念誦の内容は同じである。念誦を唱え、「十仏名」を唱和した後、『大悲呪』を唱える。その後の「回向（当夜・大夜念誦諷経回向）」については諸本により異なる（本稿訳注「尊宿大夜念誦」注（6）参照）。本稿では、底本にしたがい「大夜念誦」に訳注を施す。

《3》「龕前念誦（がんぜんねんじゆ）」（訳注底本『諸回向清規式』）

現在は「当夜念誦」と合わせて通夜の念誦にあたる。龕（棺）の前での念誦という意味であり、諸清規の記述から勘案すると、これこそが葬儀の前晩の念誦、つまり通夜の念誦にあたることが考えられる。「龕前念誦」の後、「十仏名」を唱和し、龕前念誦諷経として『大悲呪』を唱え「回向（龕前念誦諷経回向）」を行う。

《4》「移龕（いがん）」

龕を寢堂から法堂（方丈）に移すこと。諸清規を見る限り、特に念誦・回向は行わない。

《5》「鎖龕仏事（さがんぶつじ）」（訳注底本『江湖法式梵唄抄』）

「鎖」字には「とどろす」としめる。しめる」という意味がある。「鎖龕」とは「棺を閉じる」こと。現在は

『大悲呪』を読誦した後、「鎖龕回向」を行う。諸清規に「鎖龕」の語が見え、その中には「法語」をなすことを記すものもあるが、尊宿の「鎖龕回向」について記すものは見えない。

《6》「起龕仏事」(訳注底本『諸回向清規式』)

「起龕」とは、棺を送り出すために「棺を起す」こと。すなわち「出棺」の仏事にあたる。現在では「起龕念誦」の後、『大悲呪』を読誦し、「回向(起龕念誦諷経回向)」をなす。また出棺して火葬場(土葬の場合は埋葬地)に向かう道中には、「往生呪」を唱え適宜、鳴物を入れる。現在では葬列を行わないため、葬儀式中にこれらを行う。一方、諸清規では、「起龕念誦」の後、「十仏名」を唱和することを記すものの、『大悲呪』や「回向」を記すものはない。ただし、葬列において「諸法器」を鳴らし、山門を過ぎて「往生呪」を唱えることを記す清規は多い。また、後述のように二度の起龕を記す清規もある(方丈から山門、山門から山頭)。

《7》「奠湯・奠茶仏事」

葉湯と茶を供える儀礼。まず葉湯、次に茶を供える。奠湯導師・奠茶導師が、それぞれ葉湯・茶を供えた後に法語を唱える。また現在、この仏事の前に弔辞や弔電の披露が行われることが多い。なお、現在は葬儀式中に一度のみ行われる儀礼だが、後述の『勅修百丈清規』では、少なくとも三度の奠湯・奠茶仏事が記されている。

《8》「山頭念誦」(訳注底本『諸回向清規式』)

山頭は、山の上のことで、火葬場や埋葬地(土葬の場合)が設けられたことから、転じてそれらを指す。「山頭念誦」とは、火葬場や埋葬地における念誦。現在は秉炬(土葬の場合は下鑊)の前の念誦とするが、諸清規では秉炬の後の念誦とする。また念誦中には唐宋音で阿弥陀仏の名を、「南無西方極樂世界、大慈大悲阿弥陀仏」と唱和する。『諸回向清規式』『小叢林略清規』等、日本の清規には三度唱えることが記され、現代でもそれを踏襲している。一方で『叢林校定清規總要』『禪林備用清規』『勅修百丈清規』等には十度唱えることが記される。なお、現在では儀式進行の都合上、《8》《9》《10》は葬儀式中に行われる。

《9》「秉炬仏事」

葬儀を執り行う導師が松明(炬火)を手に取り、棺に火を手向ける。この作法を「秉炬」または「下火」という。導師は棺に松明を手向けたのち(土葬の場合は鑊)、法語を唱える。なお秉炬と下火は、火を手向けるという作法は同じだが、その内容が異なるとする説もある。すなわち前者の法語は長く、複数人で行うものであり、後者の法語は短く、一人で行うものだという(『百丈清規左釺』巻上・四八二頁b)。

《10》「茶毘」(訳注底本『諸回向清規式』)

秉炬仏事後、『楞嚴呪』を唱え「回向(茶毘回向)」を行う。棺に火を点け、火葬して弔うことを「茶毘」という。読経中に参列者たちが順次焼香する。現在は『観音経』(『観世音菩薩普問品』)が読誦されることも多い。

以上が、現在の臨濟宗で行われている尊宿送喪の大まかな流れと内容であり、そこで唱えられる念誦は和訓を用い、回向は音読（漢字を音読みする）を用いるのが通例とされる（『江湖法式梵唄抄』六八頁b）。また『江湖法式梵唄抄』は、遷化後から葬儀までに、各仏事を以下の流れで行うことも記す。《1》「入龕仏事」の後、通夜として《2》「当夜念誦（大夜念誦）」から《5》「鎖龕仏事」までを行い、津送として《6》「起龕仏事」から《10》「荼毘」までを行う。ただし密葬と津送に分けて行う場合はまた異なる。

次に、ここまで述べた現代の式次第を踏まえ、以下の『勅修百丈清規』（二三三六―三三四年）卷三（127b-1129b）に見える尊宿送喪の記述を例に取り、比較を行うことで、現在の次第と古い清規のそれとの違いを簡単に確認しておく。

《1》「入龕仏事」《2》「当夜念誦」は遷化した当日に行われ、入龕して三日して「擗龕」^{えんがん}として棺の蓋を覆い（入龕三日擗龕）、《4》「移龕」として法堂へ棺を移して、《5》「鎖龕仏事」を行う。そして法堂において、「法堂掛真（法堂にて頂相を掛ける）」^{はつちうけしん}「挙哀（棺の側で鳴き声をあげる儀礼）」^{あゐ}「奠茶湯」「対靈小參」「奠茶湯」の順にそれぞれの仏事を経た後に、大夜の仏事として《3》「龕前念誦」が行われる。そこで一夜を過ぎた後、《6》「起龕仏事」を経て棺を山門へ移し、「山門首真亭掛真（山門にて頂相を掛ける）」^{さんもんしゆしんていけしん}「奠茶湯」を行う。山門での一連の儀式の後、再び「起龕」し、山頭へと到り、《9》「秉炬仏事」《10》「荼毘」、そして《8》「山頭念誦」となる。なお、「奠湯・奠茶」は三度行われるが、そのいずれが現在の《7》「奠湯・奠茶仏事」にあたるのかは不明である。ただし、順番としては「秉炬仏事」の直前の「奠茶湯」がそれにあたると思しい。

このように、『勅修百丈清規』の尊宿送喪の次第内容と現行のそれとは大きく異なっており、また諸清

規間でも相違がある。さらに現代にあっても、前述の通り地域や状況による違いが見られるのである。しかしながら、その順番はどうであれ、右に挙げた《1》から《10》までは、現在の尊宿送喪において比較的共通する項目であると考えられるため、本稿ならびに次稿において、それぞれの訳注を試みることにする。

《凡例》

- 『諸回向清規式』は、国文学研究資料館・新日本古典籍総合データベースで公開されている善通寺所蔵本を用いた。
(http://basel.nijl.ac.jp/view/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=XSEI-11301・最終閲覧日：二〇一三年三月三十一日)
- 『小叢林略清規』は、禅文化研究所編集部編『小叢林略清規』（江湖叢書・禅文化研究所、一九九五年）所収の訓読文・付録の影印を用いた。
- 原文・校記・書き下し文・口語訳・語注の順に並べた。
- 訳注は念誦・回向に絞った。そのため底本中の読誦經典の指示等は脚注において示した。
- 原文・引用における「割り注」はへ〜で表記した。
- 特別に使い分けがなされている場合を除き、常用漢字を用いた。
- 書き下し文は、『諸回向清規式』『小叢林略清規』を参考にしながら、現代仮名遣いを用いた。
- 現代語訳に際し、〔 〕で適宜ことを補った。
- 参考文献・略号は以下の通り。
- T……『大正新脩大藏経』全一〇〇卷（高楠順次郎編、大正一切経刊行会・一九二四―一九三二年）
- X……『新纂大日本統藏経』全九〇卷（西義雄・玉城康四郎監修、河村孝照編、国書刊行会・一九八〇―一九八九年）
- 『漢語』……『漢語大辞典』全十二冊（羅竹風主編・上海辞書出版社・一九七九―一九九三年）

- 『大漢和』……………『修訂版大漢和辞典』（諸橋轍次・大修館書店・一九七九年）
- 『漢辞海』……………『漢辞海』第四版（戸川芳郎監修・三省堂・二〇一六年）
- 『中村』……………『仏教語大辞典』（中村元・東京書籍・一九八一年）
- 『禅学』……………『禅学大辞典』（駒澤大学内禅学大辞典編纂所・大修館書店・一九七八年）
- 『百丈清規左臚』……………『勅修百丈清規左臚・庸峭余録』上・下（《禅学叢書》八・中文出版社・一九七七年）
- 『禅林象器箋』……………『禅林象器箋』（《禅学叢書》九・中文出版・一九七九年）
- 『諸回向清規式抄』……………『諸回向清規式抄』（禅文化研究所・二〇〇四年）
- 『江湖法式梵唄抄』……………『江湖法式梵唄抄』改编版（禅文化研究所・二〇一八年）
- 本多道隆「二〇二二」…「臨済宗の回向文 訳注（一）―葬儀・法事の偈文と回向文―」（『花園大学国際禅学研究所論

叢』第一七号・四五九―四九六頁）

《目次》

尊宿送喪

尊宿入龕念誦・入龕念誦諷經回向

尊宿大夜念誦（尊宿当夜念誦）

尊宿龕前念誦・龕前念誦諷經回向

鎖龕回向

起龕念誦

山頭念誦（「臨濟宗の回向文 諷注（三）」収録）

荼毘回向（「臨濟宗の回向文 諷注（三）」収録）

尊宿入龕念誦・入龕念誦諷經回向

〔「小叢林略清規」に拠る。『諸回向清規式』に無し。『小叢林略清規』卷下「送喪儀・尊宿入龕念誦并回向」781-717c-718a、禪文化本・一九四頁／三一八頁b〕

〔尊宿入龕念誦〕

切⁽¹⁾以⁽²⁾、冥⁽³⁾權妙密、示化迹⁽³⁾於人天、至性⁽⁴⁾円明、契玄機於仏祖。恭惟⁽⁵⁾堂頭和尚、瞰然⁽⁶⁾智月、光収万頃之波。
允⁽⁷⁾矣悲心、式副⁽⁷⁾十方之感。瞻⁽⁸⁾顔無地⁽⁸⁾、披志有帰。是集⁽⁹⁾真徒、讚揚聖号。為⁽¹⁰⁾如上縁念^(四)。

(一) 化迹Ⅱ『小叢林略清規』（禪文化本）は「化迹」と振る。

(二) 式副Ⅱ『小叢林略清規』（大正・禪文化本）は「式副」と振る。

(三) 地Ⅱ『小叢林略清規』（大正・禪文化本）は「地」と振る。

(四) 為如上縁念Ⅱ『小叢林略清規』（大正・禪文化本）は「為如上縁念」と振る。

*

切せつに以もつれば、冥みやう権こん妙みょう密みつ、化迹けじやくを人天じんてんに示しし、至性しじやう円明えんみやう、玄機げんきを仏祖ぶつそに契あはわしむ。恭うやうやしく惟おもんれば堂頭どうちやう和尚おんがう、
皦然きやうぜんたる智月ちげつ、光ひかりり万頃ばんけいの波なみに収ままる。允まことなるかな悲心ひしん、式方しきかたの感かに副かう。瞻顔せんがん地無ちむく、披志ひし帰かへする有あり。
是こゝに真徒しんたを集あめて、聖号せいごうを讃揚さんやうす。為如上縁いじやうねんにんによしやう（如上じやうの縁えんの為ために念ねんず）。

*

ひそやかに思いをめぐらしますと、「入龕にゅうこんする和尚おんがうの」教化けくわはそれとは分わからない方便へんぱんを用もちいた綿密めんみつなものであり、人界じんがい・天界てんがいにその跡あとは残のこされています。また、「和尚おんがうの」素晴すはらしい性質せいしやうは円えんかに明あらかであり、その奥深おくふかい境涯きやうがいは仏祖ぶつそと並ならぶものでありました。謹こゝろんで住持ぢゆぢ和尚おんがうを思おもうと、「和尚おんがうの」衆生しゆじやうへの教化けくわは燦然さんぜんと光ひかりり輝きらく月の光ひかりが波なみを照あらすようでありました。「またその」大慈だいじ悲心ひしんは真実しんじつのものであり、世界中せかいぢゆうの衆生しゆじやうの信心しんしんと機根きこんに応こたじる様ようは「見習けんじゆうべき」模範もはんでもありました。もうその尊顔そんげんを拝らいすることは叶かないませんが、「私わたしたちの」真心しんしんは「和尚おんがうを」抛なり所ところとしています。「そこで」ここに僧侶そうりよを集あめて、仏菩薩ぶつぼさつの御名ごなを讃ほめ歎たのみます。「これは」上述じよじゆの縁えんにより念誦ねんじゆするものです。

【入籠念誦諷經回向】

上来念誦(五)諷經功德奉為、堂頭和尚、無生報地、妙極莊嚴(六)。十方(云云)。

*

(五) 念誦 〓 『小叢林略清規』(大正・禪文化本)は「念誦」と振る。

(六) 無生報地妙極莊嚴 〓 『小叢林略清規』(大正・禪文化本)は「無生報地妙極莊嚴」と振る。

*

上来念誦諷經功德奉為、堂頭和尚、無生報地、妙極莊嚴(上来念誦諷經する功德は堂頭和尚の為にし奉り、無生の報地、妙極を莊嚴せんことを)。十方(云云)。

*

これまで経文を読誦した功德は、和尚に捧げるものであり、「和尚が赴く」生死を超越した悟りの地をこの上なく厳かに整えるものです。一切の諸もろの「仏がたよ、諸もろの尊き菩薩がたや修行者たちよ、偉大なる完成された最高の智慧よ。この功德が成就しますように」。

*

(一) 切以……十方(云云) 〓 ほぼ同文が『勅修百丈清規』(一三三六—一三四三年)卷三「入籠」(T48-1127c)

に見え、「乃唱十仏名。次大悲呪」を「清浄法身毘盧遮那仏、云云。拏大悲呪」に作る点のみ異なる。また『禪

林備用清規』(一三二一年)卷九「邇・入籠念誦」(X63-633b)や南山律宗の『律苑事規』(一三二五年)卷九

「制・入籠」(X60-128c)、日本曹洞宗の『瑩山清規』(一三二四年)卷上「尊宿遷化」「入籠念誦」(T82-430a)

にも類似文が見える。相違点については、それぞれの注で指摘する(以下、各書の巻数や頁数は略す)。

(2) 切以^レうやうやしく思いを巡らせること。ここにおける切は窃が転訛したものとされ、謙讓の意が込められた「ひそやかに」の意。本多「二〇二二、四八六」「龕前念誦」注(2)参照。

- (3) 冥権妙密、示化迹於人天^ニ入龍する和尚の教化が細密で優れていたことを讃える。「冥権妙密」は、方便を駆使し綿密であるうえに、一見してもそれとは分からない接化の様。これについて無著道忠(一六五三—一七四五)は『百丈清規左觴』において以下の様に解説する。「祖師の善権の方便、玄妙秘密にして甚だ見難し(祖師善権方便、玄妙秘密甚難見也)。(卷上・四七二頁b)。「冥権」は仏道を示すにあたり、それと明白にはわからない教導、「妙密」は細密な様、妙も密も「細かな」の意。「冥権」について、北宋の仏日契嵩(一〇〇七—一〇七二)は、教導にあたり仏道以外も用い、また不測であることを次のように示す。「権なる者に、顕権有り冥権有り。……聖人の之を冥権するは、則ち異道を為し、他教を為し、善惡と其の事を同じうするを為し、夫の信ぜざる者の与に、預め其の得道の遠縁を為すなり。顕権は見るべくも、冥権は測らざるなり(権也者、有顕権有冥権。……聖人冥権之、則、為異道、為他教、為与善惡同其事、与夫不信者、預為其得道之遠縁也。顕権可見、而冥権不測也)。(『鐙津文集』卷二「輔教編」中「示化迹於人天」)。「示化迹於人天」は、人・天両界において教化した痕跡を示すこと。これについて無著は『百丈清規左觴』において以下の様に解説する。「言うところは、化度の迹を人間・天上に示すなり(言示化度之迹於人間・天上也)。(四七一頁b)。同意の「化跡」について、北宋の元照(二〇四八—一一一六)は、「化跡は往昔の因縁を謂う(化跡謂往昔因縁)」と述べる(『四分律行事鈔資持記』卷中「釈相篇」[40-263a]。なお『禪林備用清規』『律苑事規』『瑩山清規』は、「美権普く示し、化迹を人天に分かつ(美権普示、分化迹於人天)」に作る。
- (4) 至性円明、契玄機於仏祖^ニ性質が円かに明らかであり、その玄妙なる境地は仏祖に適う。「至性円明」について無著は『百丈清規左觴』において以下の様に解説する。「言うところは、常に化迹を垂ることを示せども至極の妙性、円満にして虧けず、明浄にして汚るること無きなり(言示常垂化迹而至極妙性円満而不虧、明浄而無汚也)。(卷上・四七二a)。また同様に「契玄機於仏祖」についても次のように言う。「言うところは、仏祖の玄妙

- の機智に契同して、異なること無く別なること無きなり(言契同仏祖玄妙之機智、無異無別也)。(前同)。「玄機」は玄妙なる機微のこと。唐の元康(生没年未詳)は「玄機と謂うは聖人の心なり(玄機謂聖人心也)」といふ(『肇論疏』巻下「涅槃無名論并表上秦主姚興」745-190b)。なお「禪林備用清規」「律苑事規」「瑩山清規」は、「妙体独り存し、玄機を仏祖に起こせしむ(妙体独存、起玄機於仏祖)」に作る。
- (5) 堂頭和尚||堂頭は方丈と同義で住持の居処をいう(『禪林象器箋』巻一「殿堂類上」「堂頭」六一頁a)。転じて堂頭和尚、または堂頭で住持を指す(『禪林象器箋』巻一「呼称類上」「堂頭和尚」「方丈和尚」二〇一頁ab)。「瑩山清規」は「東堂和尚」に作る。
- (6) 皦然智月、光収万頃之波||智慧の月の光が海の波に降り注ぐ。「皦然」は光り輝くこと。『統一切経百義』(九八七年)に「放光也」と見える(巻一〇「琳法師別伝巻中・皦然」7477c)。「智月」は智慧の月、悟りが衆生を利益することを一切を照らす月の光にたとえたもの。『華嚴経』(八十華嚴)に「如来の智月、世間に出ず(如来智月出世間)」とあり(巻八〇「入法界品」T10:44c)、また別訳『華嚴経』(六十華嚴)には、「仏の智慧の月、普ねく法界を照らす(仏智慧月普照法界)」と見える(巻一三「如来昇兜率天宮一切宝殿品」7:48c)。「万頃」は、地面や水面が広々としている様。「光収万頃之波」は、悟りが世界に遍満する様を智月の光が大海を照らすに喩える。加えて無著は、遷化の様も譬喩していると述べる(「今ま遷化するが故に光収まる」と言う(今遷化故言光収)、『百丈清規左篇』巻上・四七二頁a)。またこの表現には、以下の二義があるという。「謂うところは仏祖化に赴く、以て月の水波に影するを喩う。故に波に光収まる」と言う。又た月の光を波に喩うは、「郊祀の歌」の如し。今ま波を取むと言うは即ち光を取むるなり(謂仏祖赴化、以喩月影於水波。故言光収於波。又月光喩波、如郊祀歌。今言収波即収光也)。(同前)。なお「禪林備用清規」「律苑事規」「瑩山清規」は、「孤円たる智月、俄に万水の波に収まる(孤円智月、俄収万水之波)」に作る。
- (7) 允矣悲心、式副十方之感||その模範たる大悲心は、衆生の求めと機根に一致し応じる。「矣」は文末に置き感嘆を表す(『漢辭海』一〇一〇頁b)。「感」は「衆生の信心・善根が諸仏菩薩に通じてその力が現れること」

〔中村〕一九〇頁a)、を指す「感応」の「感」。すなわち、衆生の信心・機根をいう。「悲心」について無著は、遷化した和尚の大悲心だと注す（「悲心は遷化の人の大悲心（悲心遷化人之大悲心）」『百丈清規左觸』卷上・四七二頁a）。また「式」を接続詞ではなく、「のり（法度）」と解釈することについて、前句の「光」と対として取るためだと次のように説明する。「式は法度なり。以て光の字に對す。若し『用て也』の訓に依れば、則ち虚字と成る。恐らくは是ならず。言うところは今ま此土に滅を示す。蓋し十方の国土の衆生の機に應副して、其の感に赴きて度生するなり。其の悲心の應ずる所、自然に法度有り、故に式と言うなり（式、法度也。以對光字。若依用也訓、則成虚字。恐不是。言今此土示滅。蓋應副十方国土衆生之機、赴其感而度生也。其悲心之所應、自然有法度、故言式也）」（『百丈清規左觸』卷上・四七二頁ab）。一方で、『禪林備用清規』『律苑事規』『瑩山清規』には、「廣大なる悲心、却つて十方の感に應ず（廣大悲心、却應十方之感）」と見え、「式」は、継続を表す副詞の「却（そのままの意）」に作る。すなわち、三書を踏まえると、「式」は「前の事実を受けて続ける意である接続詞」として、「式て」（『漢辭海』四八五頁c）と読むのが妥当ということになる。この立場により訓読すると、「允なるかな悲心、式て十方の感に副う」となり、現代語訳は、「（和尚の）大悲心は真実のものであり、それにより世界の衆生の信心と機根に應じる」となる。しかし、句形から見れば、「曠然智月、光収万頃之波」と「允矣悲心、式副十方之感」は四字十六字の対句に見えるから、やはり無著の主張の方が説得力があるろう。

(8) 瞻顔無地、披志有帰 || 和尚の顔をもう拝することができないが、皆の真心は和尚に帰す。「瞻顔無地」について、無著は次のように注す。「今ま俄に化し去り、復た其の面を見んと欲すれども、然も見ることを得るの処無きなり（今俄化去、欲復見其面、然無得見之処也）」（『百丈清規左觸』卷上・四七二頁b）。また、「披志有帰」についても次のようにいう。「衆、今ま心志を披開して、有徳の人を慕向す。故に此の有徳の人は、即ち衆心の帰趣する所なり（衆今披開心志、慕向有徳之人。故此有徳人者、即衆心之所帰趣也）」（前同）。なお「披志」と同意と思われる「披心」は真心を露わにすること（「今ま十方の仏菩薩の前に對し、披心懺悔し敢えて復た〔罪を〕造らず（今對十方仏菩薩前、披心懺悔不敢復造）」『大毘盧遮那仏説要略念誦經』T18-55c）。

(9) 真徒Ⅱ「真徒」について無著は僧だと述べる(「真法を学ぶ徒属、即ち僧を言うなり(学真法徒属、即言僧也)」。『百丈清規左觸』卷上・四七二頁b)。

(10) 為如上縁念Ⅱすでに示したとおり、『小叢林略清規』では、「為如上縁念」とルビが振られており、当時から唐宋音で読まれていたことが分かる。また当該箇所注ではないが、無著は次のように述べる。「上に所謂、堂頭の寂に帰す等の因縁の為に、大衆、須らく下の文の十号を念すべし(為上所謂、堂頭帰寂等因縁、大衆須念下文十号也)」。『百丈清規左觸』卷上・四七三頁b)。「如上」は上述と同意。なお『律苑事規』は、「讚揚聖号。為如上縁念(乃唱十仏名、次大悲呪、回向云)」を「専誠に『仏説阿弥陀経』一卷を誦誦し、四聖の洪号を称念す(専誠誦誦仏説阿弥陀経一卷、称念四聖洪号)」に作る。「四聖」は一般的には「阿弥陀仏・観音菩薩・勢至菩薩・大海衆菩薩」をいうが(『禪林象器箋』卷一三「誦唱類」「四聖号」五四四頁a)、ここでは何を指すのか不明。また、『瑩山清規』は「為如上縁念」を「仰憑大衆念」に作る。

なおこの後に「十仏名」、そして『大悲呪』を唱え、回向を行う指示が見える(「乃唱十仏名、次大悲呪、回向云)。十仏名は諸仏菩薩の名。その内容は資料により一定していないが、現在の臨濟宗では以下を唱える。「清浄法身毘盧遮那仏、円満報身盧舎那仏、千百億化身釈迦牟尼仏、当来下生弥勒尊仏、十方三世一切諸仏、大聖文殊師利菩薩、大行普賢菩薩、大悲観世音菩薩、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜」。十仏名を唱えることについての詳細は、本多「二〇二二、四八五―四八八」「籠前念誦」注(10)を参照。

(11) 無生報地、妙極莊嚴Ⅱ誦経の功德により和尚が輪廻して至るべき、生死を超えた悟りの地を莊嚴する。「上來念誦……妙極莊嚴」の本回向箇所は、すでに示した通り、唐宋音のルビが振られており、訓読せずに誦まれていたことが分かる。なお、「入籠念誦経回向」という呼称は『江湖法式梵唄抄』(六九頁a)に依つたものであり、諸本には見えない。「無生」は「空のこと。生滅を離れた絶対の真理」(『中村』一三三〇頁b)。「報地」は来るべき報いとして輪廻する先(本多「二〇二二、四九〇」)「鎖籠」「起籠」「仏事」注(3)「莊嚴報地」参照)。「妙極」は「絶妙至極の略。こよなききわみ」(『中村』一三〇三頁c)。「三論玄義」に「仏は大覚と名づけ、老は天

尊と曰う。人はとも同に上聖にして、法は俱に妙極なり（仏名大覚、老曰天尊。人同上聖、法俱妙極）（T45, 2a）と見える。「莊嚴」は功德により飾ること（本多「二〇二二、四九〇」同前、参照）。無著は「無生報地」について、悟りの境涯であることを次のように述べる。「報地は、修因に依つて感ずる所の報土なり。無生の報地は所謂無生国、乃ち本分の家郷なり（報地者、依修因所感報土也。無生報地、所謂無生国乃本分家郷也）」（『百丈清規左麟』卷上・四七三頁a）。また「妙極莊嚴」は次のようにいう、「浄土の莊嚴、修因の功德の感ずる所なり。今ま此の無生の国念、其れ莊嚴妙好にして極めて至れり（浄土莊嚴、修因功德所感。今此無生国、其莊嚴妙好極至）」（同前）。さらに「奉為」以下について、無著は「堂頭和尚の無生の報地、妙極莊嚴の為にし奉る」と、現行とは異なる訓点を打ち理解すべきことを述べている。すなわち『百丈清規左麟』に「奉^レ為^二堂頭和尚（乃至）妙極莊嚴」と立項し、「此くの如く点すべし（可如此点）」（同前）と見える。

尊宿大夜念誦（一）尊宿当夜念誦

（『諸回向清規式』に拠る。『諸回向清規式』卷五「諸念誦之部・尊宿大夜念誦」T81-676a、普通寺本・二五丁表、『小叢林略清規』卷下「送喪儀・尊宿遷化当夜念誦」T81-718、禪文化本・一九四—一九五頁／三一八頁b）

【尊宿大夜念誦】

白大衆。⁽¹⁾ 某和尚⁽²⁾、已皈⁽³⁾真寂、衆失所依。但念無常、慎勿放逸。為如上緣念⁽⁴⁾。

- (一) 尊宿大夜念誦 〓 『小叢林略清規』（大正・禪文化本）は、「尊宿遷化当夜念誦」に作る。
- (二) 某和尚 〓 『小叢林略清規』（大正・禪文化本）は「堂頭和尚」に作る。

(三) 飯 Ⅱ 『小叢林略清規』(禪文化本は「帰」に作る。

(四) 為如上縁念 Ⅱ 『小叢林略清規』(大正・禪文化本)は「為如上縁念」と振る。

大衆に白す。某和尚、すでに真寂に飯して、衆、所依を失す。但だ無常を念じて、慎しみて放逸すること勿かれ。為如上縁念(如上の縁の為に念す)。

*

大衆に申しあげます。某和尚はすでに遷化なさり、大衆は抛り所を失ってしまいました。「しかしながら、無常であることを思い、「仏道修行を」怠けてはなりません。「これは」上述の縁により念誦するものです。

*

(一) 白大衆、……拏大悲呪 Ⅱ ほぼ同文が『勅修百丈清規』(一三三六—一三四三年)卷二「入龕」(T48-127c)・『叢林校定清規總要』(一二七四年)卷下「當代住持涅槃・大夜念誦」(X63-612b)・『禪林備用清規』(一二二一年)卷九「邇・入龕念誦」(X63-653b)にそれぞれ見え、『入衆須知』(一二六三年)「尊宿大夜」(X63-568a)には類似文が見える(次項の「龕前念誦・回向」にも通じる)。相違点については、それぞれの注で指摘する(以下、各書の巻数や頁数は略す)。現在では大夜・当夜ともに葬儀の前日夜の通夜と同義に用いられているが、無著道忠は「古解曰」として、当夜が死去した夜であり、大夜とはその次の日で茶毘の前夜という説を示す。「物故の夜を当夜と云う。次の夜を大夜と曰う。又た次は茶毘の夜なり(物故之夜云当夜。次夜曰大夜。又茶毘夜也)」(『百丈清規左觸』卷上・四八七頁a)。

(二) 某和尚、已飯真寂。衆失所依 Ⅱ 「飯」は「帰」の異体字。『諸回向清規式』以外の諸本は「帰」に作る。「飯真

寂」は遷化と同義。『釈氏要覽』に以下の通り見える。「釈氏の死、涅槃・円寂・帰真・帰寂・滅度・遷化・順世と謂うは、皆な一義なり(釈氏死、謂涅槃・円寂・帰真・帰寂・滅度・遷化・順世、皆一義也)。(巻下「送終・初亡」T154-307b)。また『俱舍論本義抄』にも「真寂に帰す、亦た涅槃と名づく(帰於真寂、亦名涅槃)」とある(巻一〇(第十一巻抄) T63-327a)。

(3) 但念無常、慎勿放逸。積尊の遺誡を踏まえた句。例えば法顯(三三七―四二二)訳『大般涅槃經』(小乘涅槃經)巻上に次のように見える。「生死は甚だ危脆にして、身命は悉く無常なり。常に解脱を求め、放逸の行を造すこと勿かれ(生死甚危脆、身命悉無常。常求於解脱、勿造放逸行)。(T1-193a)。「無常」は、全てのものが流転し固定していかないという真理。「放逸」は、怠け疎かにすること。なお『入衆須知』は「但だ無常を念じて、切に放逸すること勿かれ。恭しく大衆を哀めて、龕幃に肅詣し、諸仏の洪名を誦持して、上、尊靈の覺路を資く(但念無常切勿放逸。恭哀大衆、肅詣龕幃、誦持諸仏洪名、上資尊靈覺路)」に作る。

(4) 為如上緣念。前項「尊宿入龕念誦并回向」注(10)参照。『諸回向清規式』にはルビがない。なお『叢林校定清規總要』『入衆須知』は、「仰憑大衆念」に作る。「仰憑大衆念(仰いで大衆を憑んで念す)」は、本多「二〇二二、四八八」「龕前念誦」注(9)参照。

またこの後に、「十仏名」「大悲呪」の順に唱える指示が見える(次十仏名。〈見于前。〉挙大悲呪)。しかし、諸本により読誦する経典や表現が異なる。底本である『諸回向清規式』には、回向が記されていないが、『小叢林略清規』(大正・禪文化本)は「回向は前に同じ」と見える(乃唱十仏名。次大悲呪回向、同前)。これに従うと、「入龕回向」と同じということになる。一方、『勅修百丈清規』『禪林備用清規』にも「回向、同前」と見えるが、両清規は、「入龕念誦・十仏名・大悲呪・入龕回向・楞嚴呪・回向、大夜念誦・十仏名・回向(回向、同前)」と、入龕回向の後に傍点箇所『楞嚴呪』とそれに伴う回向が入っており、該当の回向は以下の通りとなる。「上来」諷経する功德は、堂頭和尚の為にし奉り、品位を増崇す。十方三世、云云(上来)諷経功德、奉為堂頭和尚增崇品位。十方三世云云)。また『叢林校定清規總要』に見える以下の網がけ箇所の回向と同様で

ある。「尊宿入龕の読経回向の記述なし」大夜念誦・十仏名・大悲呪・回向（諸本の開山祖忌回向や百丈忌回向に類似する）・楞嚴呪・回向。これは現行の『江湖法式梵唄抄』に見える以下の「当夜諷経回向」に近い。「上來諷経する功德は、新示寂〇〇禪師の真慈の為にし奉り、品位を増崇す。十方三世……（上來諷経功德奉為、新示寂〇〇禪師真慈増崇品位。十方三世……）（六九頁b）。なお『叢林校定清規總要』に見える以下の回向は、『勅修百丈清規』では「百丈忌」、『禪林備用清規』『律苑事規』では「開山祖忌」にそれぞれ見える回向とほぼ同じである。「上來念誦諷経する功德は、堂頭某人和尚大禪師の為にし奉る。伏して願くは、曇花再現して、重ねて覚苑の春に敷き、慧日長明にして、永く昏衢の夜を燭さんことを。再び大衆を勞して念ず。十方云云（上來念誦諷経功德、奉為堂頭某人和尚大禪師。伏願曇花再現、重敷覚苑之春。慧日長明、永燭昏衢之夜。再勞大衆念。十方云云）。また『入衆須知』の回向は以下の通り。「上來念誦諷経する功德は、尊靈を資助して、報地を莊嚴す。伏して願わくは意に随わんことを（上來念誦諷経功德、資助尊靈、莊嚴報地。伏願隨意）」。

尊宿龕前念誦・龕前念誦諷経回向(一)

『諸回向清規式』に拠る。『諸回向清規式』巻五「諸念誦之部・尊宿龕前念誦」次奉大悲呪 回向日」
 『81-675c』普通寺本・二三丁表、『小叢林略清規』巻下「送喪儀・尊宿龕前念誦并回向」『81-718a』禪文
 化本・一九五―一九六頁／三二八頁b―三二九頁a)

【尊宿龕前念誦】

白大衆。堂頭和尚、入般涅槃(一)。是日已過、命亦隨滅。如少水魚、斯有何樂。衆等當勤精進、如救頭然(二)。
 但念無常、慎勿放逸。恭敬大衆、肅詣龕幃、誦持万德洪名、奉為増崇品位。仰憑大衆念(四)。

(一) 尊宿龜前念誦・回向 〓 『諸回向清規式』は「尊宿龜前念誦」「次奉大悲呪 回向日」と立項されており、『小叢林略清規』(大正・禪文化本)は「尊宿龜前念誦并回向」に作る。

(二) 般涅槃 〓 『小叢林略清規』(大正・禪文化本)は「般涅槃」と振る。

(三) 頭然 〓 『小叢林略清規』(大正・禪文化本)は「頭然」と振る。

(四) 仰憑大衆念 〓 『小叢林略清規』(大正・禪文化本)は「仰憑大衆念」と振る。

*

大衆に白す。堂頭和尚、般涅槃に入る。是の日已に過ぐれば、命も亦た随つて減ず。少水の魚の如し、斯に何の樂か有らん。衆等当に勤めて精進し、頭然を救うが如くすべし。但だ無常を念じて慎しんで放逸することを勿かれ。恭しく大衆を哀めて龜幃に肅詣し、万徳の洪名を誦持して、品位を増崇し奉る。仰憑大衆念(仰いで大衆を憑んで念ず)。

*

大衆に申しあげます。住持和尚はすでに遷化なさいました。「経典が説くように、今日という」この日が過ぎ去つてしまつたら、寿命も「それに」随つて「その日の分」減少します。「それは」水の少ない「所にいる」魚のようなもので、どこに安樂の境地があるでしょうか。「だからこそ」皆、勤めて精進し、頭に燃えさかる炎があれば「懸命に」払いのけるように「努力」しなければなりません。「つねに」無常であることを思い、「仏道修行を」怠けてはなりません。謹んで、僧侶たちを集めて棺の帳の前に厳かに進み出て、諸々の聖者の御名(「十仏名」)を誦みあげ、「和尚の菩薩としての」階位を高め奉ります。伏して大衆も「一緒に」唱えるようを願います。

【龕前念誦諷經回向】

上來念誦諷經功德奉為、新示寂⁽⁸⁾ 某和尚 伏願⁽⁶⁾、不忘願力、再現曇花、棹慈航於生死逝波、接群迷於菩提彼岸。再勞大衆念⁽⁷⁾。十方三世一切諸仏⁽⁹⁾ 云云

(五) 示寂⁽⁸⁾ 『小叢林略清規』(大正・禪文化本)は「示寂⁽⁸⁾」と振る。

(六) 伏願⁽⁶⁾ 『小叢林略清規』(大正・禪文化本)は「伏願⁽⁶⁾」と振る。

(七) 忘願力、……再勞大衆念⁽⁷⁾ 『諸回向清規式』(大正・普通寺本)は「不忘願力、再現曇花、棹慈航於生死逝波、接群迷於菩提彼岸」と振り、「小叢林略清規」(大正・禪文化本)は「不忘願力、再現曇花、棹慈航於生死逝波、接群迷於菩提彼岸、再勞大衆念⁽⁷⁾」と振る。

*

上來念誦諷經功德奉為、新示寂某和尚。伏願、不忘願力、再現曇花、棹慈航於生死逝波、接群迷於菩提彼岸。再勞大衆念⁽⁷⁾。十方三世一切諸仏⁽⁹⁾ 云云(上來念誦諷經する功德は、新示寂某和尚の為にし奉る。伏して願わ

くば、願力を忘れず、再び曇花を現じ、慈航を生死の逝波に棹さし、群迷を菩提の彼岸に接せんことを。再び大衆を勞して念ぜん。十方三世一切の諸仏⁽⁹⁾ 云云)

*

これまで經文を誦誦した功德は、新たに遷化なさつた某和尚のために捧げます。どうか〔和尚よ〕衆生濟度の願いをお忘れにならず、優曇華の花が開くように、再び慈悲の舟で生死〔輪廻〕の流れに棹さして進み、迷える衆生を彼岸へとお渡しくださいますように。再び大衆に勞をとり唱えることを願います。一切の諸も

ろの仏がたよ、「諸もろの尊き菩薩がたや修行者たちよ、偉大なる完成された最高の智慧よ。この功德が成就しますように」。

*

(1) 白大衆、……〈見于前〉 〓 大夜・宿夜の念誦としてほぼ同文が『勅修百丈清規』(一三三六―一三四三年) 卷三「対靈小參奠茶湯念誦致祭」(T48-1128c)、『禪林備用清規』(一三二一年) 卷九「化、念誦式・宿夜」(X63-655a)、『瑩山清規』(一三二四年) 卷上「尊宿遷化・龕前念誦」(T82-430b) に見え、『律苑事規』(一三二五年) 卷九「民、念誦諸式・宿夜廻向」(X60-130c) に同意文が見える。一方で、より古い清規である、『禪苑清規』(一一〇三年) 卷二「念誦」(X63-527b-c)、『入衆須知』(一二六三年)「念誦」(X63-533c-564a)、『叢林校定清規総要』(一二七四年) 卷下「四、念誦巡堂」(X63-608b-c) には、「三八念誦」(三七と八がつく日に行われた僧侶を戒める儀礼) のうち、特に「初八・十八・二十八」の念誦として、「白大衆……慎勿放逸」までの箇所が見える。ただし、それらは「堂頭和尚、入般涅槃」を「如来大師、入般涅槃」に作り、その後に釈尊入涅槃からの期間を計算して述べることに記される(例えば『禪苑清規』には「至今皇宋元符二年、已得二千四十七年〈以後随年増之〉と見える。このことから、釈尊入涅槃を述べ修行者を戒め鼓舞する「三八念誦」の文言が、後に「尊宿龕前念誦」に転用された可能性がある。これは、『禪苑清規』卷七の「尊宿遷化」には、龕前念誦に当たるものが見えず、『叢林校定清規総要』卷下「当代住持涅槃・涅槃台念誦、回向」(X63-612 b-c) には、異なる文言が見えることから考えられる。なお、『入衆須知』「尊宿大夜」(X63-568a) は前項で示した通り「龕前念誦・回向」とも通じる表現が見える。また、『禪林備用清規』卷二「住、念誦・下八」(X63-628f)、『勅修百丈清規』卷二「念誦・下八」(T48-1121a)、『諸回向清規式』卷五「諸念誦之部・下八無常念誦」(二七 a b・T81-676c)、『瑩山清規』卷上「念誦・八日」(T82-428b) は、『禪苑清規』等を承けた三八念誦を載せるものの、『小叢林略清規』には見えない。以下、特筆すべき相違がある場合は該当注中で記す(各書の巻数や頁数は略す)。

(2) 是日已過、命亦隨滅。如少水魚、斯有何_レ住持和尚の遷化に際して、經典の句を用いて、無常迅速である命の危うさを戒める。この句は、『法句經』や『出曜經』に見える無常を説いた句であり(兩經では、「亦」を「則」に作る。『法句經』巻上「無常品第一第十三章」T4-599a・『出曜經』巻二「無常品第一之一」T4-610b-c、同卷三「無常品第一之一」T4-621b-c)・中国・日本では主に後者を出典とすることが多いが(『法苑珠林』卷六四T53-771a・『諸經要集』巻八T54-72c・『翻訳名義集』巻六T54-165a)・一方で前者を出典として「是日已過……慎勿放逸」のほぼ同文を引くものもあることから、特に出典にこだわっていなかったことも考えられる(『円覚經道場修証儀』巻二「礼懺法八門・六、余雜事・白衆等聽說黃昏無常偈」X74-385b-c3)。また、字句の一致する直接の引用は、『広弘明集』(六六四年)巻二七に収録される、南齊の蕭子良(文宣・四六〇―四九四)による「淨住子淨行法」中の「生老病死門、第五」(T52-308c)による。「少水魚」は、いつ尽きるとも分らない人間の生命を、いつ干上がって死ぬかもしれない浅瀬の魚に喩えたもの。

(3) 衆等当勤精進、如救頭然_レ經典の句を用いて、修行に励むことを述べる。『雜阿含經』卷三九に「当に勤修して精進すること、猶お頭然を救うが如くすべし(当勤修精進、猶如救頭然)」(T2-284c)と見える。「如救頭然」は、常に修行に邁進することを、頭に火が降りかかった際に、懸命に払いのけようとすることに喩えたもの。「然」は「燃」と同義。『雜阿含經』巻七に「頭衣の焼然、尚お暫らくも忘るべけんや(頭衣焼然、尚可暫忘)」(T2-46a)とあり、『大般若波羅蜜多經』巻五八七「第十二淨戒波羅蜜多分之二」に「雖だ心に精勤して、勇猛に修習し、時に間斷無きことと頭然を救うが如くすべし(雖応精勤、勇猛修習、時無間斷、如救頭然)」(T7-1037c)と見える。また無著道忠は、「頭然ヲ救方如」とルビを振り、「古解に曰わく、救とは弘の義なり(古解曰、救者弘義)」と解説する(『百丈清規左觴』巻上・三八四頁b)。なお、前注「是日已過……斯有何」と本注の句を一連の偈文として扱うことは、すでに唐代の圭峰宗密(七八〇―八四一)の『円覚經道場修証儀』に「黃昏無常偈」(X74-385b-c3)として見える。また『律苑事規』巻十「化、日用偈章」には「普曜經偈」(X60-141a)として見える。

(4) 但念無常。慎勿放逸。前項「尊宿大夜念誦」注(3)参照。

(5) 恭哀大衆、肅詣龜幃、誦持万徳洪名。住持または維那が大衆を集めて棺の前で「十仏名」を唱えさせる。無著は「恭哀大衆」について、恭は住持もしくは維那にかかること以下の様に述べる。「恭の字は哀むる者に係る。衆を哀むる者は、住持或いは維那なり。故に恭の字は住持、或いは維那に係る(恭字係哀者。哀衆者、住持或維那。故恭字係住持或維那)」(『百丈清規左麟』卷下・八八頁a)。また「肅詣龜幃」の「肅詣」についても同様に、「肅の字も亦た住持、或いは維那に係る(肅字亦係住持或維那)」(同前)と見える。「龜幃」は棺の周りに張られた幕。本多「二〇二二、四八七」。「龜前念誦」注(6)参照。なお「龜」は、仏像や神像を納める厨子(『漢辞海』一六八〇頁a)。転じて仏僧の棺を指す。『釈氏要覧』卷三「龜子」に、「今の釈氏の周身、其の形、塔の如し。故に龜と名づく(今釈氏之周身、其形如塔。故名龜)」(T54307c)と見える。「誦持万徳洪名」とは、仏の名を唱えることであり、ここでは「十仏名」を指す。無著は次のように述べる。「万徳円満なる者は仏なり。洪名は仏に大名称有り。下文の「十仏名」を言う(万徳円満者仏也。洪名仏有大名称也。言下文十仏名)」(『百丈清規左麟』卷上・四八八頁a)。「洪名」は大きな名聲。

(6) 奉為増崇品位。經典の読誦により地位を上昇させる。無著は「増崇品位」について次のように述べる。「経呪の功德に託して其の地位をして高昇せしむるなり。品位とは譬えば菩薩の十地の如き是れなり(託経呪功德令其地位高昇也。品位者譬如菩薩十地是也)」(『百丈清規左麟』卷上・三四二頁a)。

(7) 仰憑大衆念。仰憑は敬意を示した語であり、「うやまい、よりどころとする」の意(『漢語』第一冊、一一二頁)。本多「二〇二二、四八八」。「龜前念誦」注(9)参照。またこの後に、「十仏名」「大悲呪」の順に唱え、回向を行う指示が見える(次十仏名。〈見于前〉次拳大悲呪。回向曰)。

(8) 上来念誦諷経功德奉為……十方三世一切諸仏(云云) 本回向は、全文にわたりルビが振られていることから、当時から唐宋音で誦まれていたことが窺える。なお、「龜前念誦諷経回向」という呼称は『江湖法式梵唄抄』(七〇頁a)に依ったものであり、諸本には見えない。「示寂」は、「寂は寂滅・円寂の略で、ニルヴァーナの意。ニ

- ルヴァーナを示現することで、特に高僧が死ぬことをいう」(『中村』五四九頁c)。
- (9) 不忘願力、再現曇花 〓 遷化した和尚が下化衆生を忘れず再来することを優曇華の花になぞらえる。「不忘願力」について無著は次のように述べる。「度生の願力を忘れること莫きなり(莫忘度生之願力也)」(『百丈清規左騰』巻上・四八八頁a)。「曇花」は、「優曇華」の略。「udumbara」の音写。ウドンバラの花。……三千年に一度だけ花が咲く樹といわれ、また如来が出現し、転輪王が出現すれば花が咲くともいわれ、……経典の中では希有なことの譬喩とする」(『中村』九二頁b)。当箇所「再現曇花」について、無著は高僧の再来を指すと述べる(「今は善知識の再来に比するなり(今比善知識再来也)」同前)。
- (10) 棹慈航於生死逝波、接群迷於菩提彼岸 〓 慈悲心により衆生を悟りへと導くことを、舟で彼岸に渡すに喩える。「逝波」は「戻ることのない水の流れ。またそこから戻ることのない時の流れ。例えば唐の賈島(七七九―八四三)は「去臘昨年今夏を催し、流光月日の移ろい、逝波に等し(去臘催今夏、流光等逝波)」と詠う(『全唐詩』巻五七三「賈島三・送玄巖上人帰西蜀」中華書局本・第一七冊・六六七二頁)。また『叢林校定清規總要』には「生死海中」と見える。これを『瑩山清規』巻上「尊宿遷化・龕前念誦(182,430b)も承ける。生死輪廻を脱し悟りの彼岸に至ることは仏典に広く見える説であり、例えば『大智度論』には、「此岸を名づけて生死と為し、彼岸を涅槃と名づく、中に諸もろの煩惱の大河有り(此岸名為生死、彼岸名涅槃、中有諸煩惱大河)」と見える(巻六五「釈諸波羅蜜品」[25,510c]。また「棹慈航……彼岸」に類似した表現が宋の宗鏡(生没年未詳)の『銷積金剛經科儀會要註解』巻二に「快く般若の慈舟に登り、直に菩提の彼岸に到る(快登般若慈舟、直到菩提彼岸)」と見え、それを解説して、慈航とは智慧の船であり、それにより生死の海を越え、涅槃の岸に到ることだとする(「……慈航とは、般若の智に喩えて、慈航と為すなり。菩提彼岸とは、本覚の真心に喩ゆるなり。人の般若の舟に登りて、生死の苦海を出で、直に涅槃の彼岸に到るを要むるなり(……慈航、喩般若智、為慈航也。菩提彼岸者、喩本覚真心也。要人登般若之舟。而出生死苦海、直到涅槃之彼岸矣)」X24-675c-676a)。
- (11) 再勞大眾 〓 大眾に「十方三世一切諸仏……」を唱えることを指示する。なお現在、訓読する場合、上句と続

けて「……群迷を菩提の彼岸に接し、再び大衆を勞して念ぜん」とするが、意味を踏まえるならば上句で切り、
「……群迷を菩提の彼岸に接せんことを。再び大衆を勞して念ず」とする方が正しい訓読である。

鎖龕回向

〔『江湖法式梵唄抄』に拠る。『諸回向清規式』『小叢林略清規』『諸回向清規式抄』に無し。『江湖法式梵唄抄』『鎖龕仏事・鎖龕回向』七一頁b〕

〔鎖龕回向〕

上來念誦諷經功德奉為、新示寂○○和尚鎖龕之次増崇品位。十方三世……。

*

上來念誦諷經する功德は、新示寂○○和尚の為にし奉り、鎖龕さがんの次で品位びんゐを増崇ぞうそうす。十方三世……。

*

これまで經文を讀誦した功德は、新たに遷化なさった○○和尚のために捧げ、棺を閉じるにあたって〔和尚の菩薩としての〕階位を高めるものです。一切の諸もろの〔仏がたよ、諸もろの尊き菩薩がたや修行者たちよ、偉大なる完成された最高の智慧よ。この功德が成就しますように〕。

*

(1) 上來……十方三世……諸本に「鎖龕回向」または「鎖龕念誦」は見え、古くは鎖龕に際して、個別的回向が用いられていなかったことも考えられる。『諸回向清規式』『龕前』(卷四「諸葬礼式之部」32a-181-67a)は、龕前における作法について一番から五番を挙げ、一番に「鎖龕仏事」と見え、「鎖子、盆ぼん袱ふくを以て之を盛り、行

者、之を進め、侍者接取し呈して之を渡す（鎖子以盆袱盛之、行者進之、侍者接取呈渡之）とある。さらに三番「念誦」には「大悲呪鎖龕念誦、又た龕前念誦なり（大悲呪鎖龕念誦、又龕前念誦也）」と見え、『大悲呪』を唱えることを指して「鎖龕念誦」としているが、これも「龕前念誦」と同一視している。ただし、鎖龕に際して法語が唱えられていたようであり、『叢林校定清規總要』巻下「当代住持涅槃・移龕之時」(X63-62b)には「鎖龕。〈有法語〉と見え、例えば『虚堂和尚語録』巻六「仏事」に「質知庫鎖龕」(T47-1034a)と題した法語が見える。なお、黄檗禅の葬送儀礼を分析した楊慶慶氏は、鎖龕仏事について、江戸期に作成された黄檗禅の内規である『黄檗山内清規』に詳しい記述があることから、「黄檗宗の独自性を見ることができよう」と指摘している（『黄檗宗の独自性——『黄檗清規』『黄檗山内（小）清規』を中心に——』『東海仏教』第六七輯、二〇二二年、五九頁）。「鎖龕」は龕の蓋を鎖すこと。本多「二〇二〇、四八九—四九〇」「鎖龕「起龕」仏事」注（一）も合わせて参照。ここに見える「次」は動作が続けて起こる様を示したものであり、「……した時、……した機会に」に相当する（古賀英彦『禪語辞典』思文閣出版・一九九一年・一七八頁下、劉堅・江藍生（編）『唐五代語言詞典』上海教育出版社・一九九七年・六九頁）。

尊宿起龕念誦

（『諸回向清規式』に拠る。『諸回向清規式』巻五「諸念誦之部・尊宿起龕念誦」T81-675c、普通寺本・二三丁裏—二四丁表、『小叢林略清規』巻下「送喪儀・尊宿起龕念誦」T81-718a、禅文化本・一九六頁／三一九頁a）

【尊宿起龕念誦】

金棺自拳透拘尸之大城、幢幡(三)揺空赴茶(三)毘之盛礼。仰憑大衆称念洪名、用表攀違上資覺路念(一)。

(一) 金棺自拵……資覚路念ニ『諸回向清規式』(善通寺本)は「金棺自遶拘尸之^シ大城。幢幡揺空赴茶毘之^シ盛礼。仰

憑大衆称念洪名。用表攀遶上資覚路念」と振る。『諸回向清規式』(大正本)もほぼ同じだが、「遶」と振る。

『小叢林略清規』(禅文化本)は「金棺自拵遶拘尸之^シ大城。幢幡揺空赴茶毘之^シ盛礼。仰憑大衆称念洪名。用表攀

遶上資覚路念」と振る。『小叢林略清規』(大正本)もほぼ同じだが、「大・上」の濁点(、)の指示がなく、

「遶・称念」と振る。

(二) 幢幡ニ『小叢林略清規』(大正・禅文化本)は「幢旆」に作る。

(三) 茶ニ『小叢林略清規』(大正・禅文化本)は「茶」に作る。

*

金棺自拵遶拘尸之^シ大城。幢幡揺空赴茶毘之^シ盛礼。仰憑大衆称念洪名。用表攀遶上資覚路念。(金棺、自ら拵

して拘尸之^シ大城を遶り、幢幡、空に揺らいで茶毘之^シ盛礼に赴く。仰いで大衆に憑みて洪名を称念し、用つて攀遶を表し上

資覚路を資けて念す。

*

〔釈尊の〕黄金の棺は自ら浮かんでクシナガラの街を巡り、〔供養のための〕送葬幡は、はためき、厳かな
火葬の地へと進んだ〔といわれます〕。伏して大衆に仏の御名を称え〔心に〕念じることを願います。これ
は、〔和尚との〕惜別の意を表し、〔和尚の〕上求菩提の助けとするために唱えるものです。

*

(1) 金棺自拵……資覚路念ニほほ同文が『勅修百丈清規』(一三三六―一三四三年)卷三「出喪掛真奠茶湯」

(T48-1128c)、『叢林校定清規總要』(一二七四年)卷下「当代住持涅槃・拳龕念誦」(X63-612b)、『禅林備用清

規』(一三二一年)卷九「化、念誦式・起龕」(X63-655a)、『律苑事規』(一三二五年)卷九「民、念誦諸式・起

龕 (X60-130c)、『瑩山清規』(一三二四年)卷上「尊宿遷化・拳龕念誦」(T82-430b)、『黃檗清規』(一六七〇年)「遷化章第十・出喪・茶毘」(T82-778c)にそれぞれ見える。また類似した文言が『禪苑清規』(一一〇三年)卷七「亡僧・拳龕念誦」(X63-541c)、『入衆須知』(一二六三年)「平僧大夜念誦・拳龕念誦」(X63-568b)にも見える。それぞれの相違点は注で指摘する(各書の巻数や頁数は略す)。なお『瑩山清規』はこの前の箇所「念安快昔日与今別不同(念うに安快なる昔日と今と別に同じからず)」と見える。また『黃檗清規』は以下の通りルビを振る。「金棺自举、遶拘尸之金城。幡旛、揺空、赴茶毘之盛礼。仰憑大衆、称念洪名。用表攀違、上資覺路念」。「起龕」は、茶毘もしくは土葬に付すために棺を送り出すこと。本多「二〇二〇、四九〇】「鎖龕【起龕】仏事」注(2)も合わせて参照。

(2) 金棺自举、拘尸之金城 〓 釈尊の棺が自ら空中に浮かびクシナガラ(クシナガラ)の街を巡ったという故事を踏まえる。『大般涅槃經後分』卷下「機感茶毘品」(T12-906c-907b)に以下の説話が見える。釈尊入滅後、クシナガラの人々も誰もが供養できるように、沙羅林中の釈尊の金棺を動かそうとするも力士(護法神)の力を持ってしても動かすことが叶わなかった。しかし、釈尊の大悲心により棺は自ずから浮かび(自举棺、昇虚空中)、クシナガラの街へ向かい、西門から入り東門から出て、また南門から入り北門から出るという巡り方を三回、西門から入り東門から出て、北門から入り南門から出るという巡り方を四回、合計七回クシナガラの街を巡り(是くの如く左右、拘尸城を遶り経ること七匝)如是左右遶拘尸城経于七匝)、供養を受けた。「金棺」は黄金でできた棺。釈尊は自身の入滅にあたり「転輪聖王(法によって統治する理想的な王)と同様に金棺を用いることを指示している」(『長阿含經』卷三「遊行經」T1-208-b)。「拘尸之金城」は「拘尸那揭羅城」のことで、クシナガラ(梵: Kusinagara)の街。釈尊入滅の沙羅林にほど近いマツラ国の都市。

(3) 幡幡揺空、赴茶毘之盛礼 〓 天や人が供養の旗を釈尊の茶毘の場所に持ち寄ったこと、または金棺が自ずから茶毘の場所へ赴いた故事を踏まえる。前注と同様に『大般涅槃經後分』卷下「機感茶毘品」(T12-907b)に、釈尊の「茶毘所」に一切大衆や四天王・諸天が「無数宝幡」を持参したとの故事が見える。「幡幡」は、「旗(はた)」

のことであり、時と場合により目的や功德の種類が異なり、ここでは葬送に際しての供養の旗。「茶毘」は、火葬のことであり梵・dhyaṃpavānの音写。『一切経音義』に、「闍維（或いは闍維、或いは茶毘。古に耶旬と云う。此〔中国〕に焚焼と云うなり）」(闍毘（或闍維、或茶毘。古云耶旬。此云焚焼也）) (卷二五「大般涅槃經音義・卷上」[344b])と見える。「盛礼」は盛大な祭礼・儀式。また『叢林校定清規總要』『禪林備用清規』『律苑事規』等は、土葬の場合、「茶毘」を「難提」と変えることを割り注にして挿入する（葬は（則ち）難提と云う）／（葬（則）云難提）。「難提」は塚、仏塔・供養塔のこと。『祖庭事苑』に「梵（インド）に塔婆と云い、此〔中国〕に方墳と云う。或いは支提と云い、或いは難提と云う（梵云塔婆。此言方墳。或云支提、或云難提）」(卷一「雪竇洞庭録・十字」[643a])と見える。なお『禪苑清規』と『入衆須知』は、前注箇所と合わせて、それぞれ「欲拳靈龜、赴茶毗之盛礼。仰憑尊衆、誦諸聖之洪名」、「将拳靈龜、赴茶毗之盛礼。仰憑尊衆、誦諸仏之洪名」に作る。

(4) 用表攀違上資覺路念（別れと供養のために「十仏名」を唱える。この後に「十仏名」を唱える指示が見える（次十仏名。見于前。）。なお『小叢林略清規』（大正・禪文化本）は「乃唱十仏名」に作り、その後に「全身入塔則茶毘為（難提）（全身入塔せば、則ち茶毘を（難提）と為す）」と加える（大正本は「難提」のルビがない）。「攀違」は官吏が目上への書状で用いる「辞」の謙讓表現。『鶏肋編』卷下「從官門狀」に「參ずるには云わく『起居』と、辞するには云わく『攀違、某官謹狀（つつしんで申し述べ）』」（と（參云『起居』、辞云『攀違、某官謹狀』）（唐宋史料筆記叢刊・中華書局本・一九八三年・九四頁）と見える。無著道忠も「攀違」について「離別なり（離別也）」と述べ（『百丈清規左輔』卷下・八八九頁b）、「表攀違」について以下の様にいう。「拜別の義を表すなり。違は背離なり。攀は韻書に下より上に援（ひ）くなり。〔此に止む〕其の人高位に在り、故に高く衣を攀（ひ）きて別るなり（表拜別の義也。違、背離也。攀、韻書自下援上也。〔止此〕其人高位、故高攀衣而別也）」（『百丈清規左輔』卷上・四九〇頁b）。また無著は「上資覺路」については、悟りを得ることの助けであることだと注する（「上、菩提を求む、故に上と云う。本覺に向かうの路、故に覺路と云う。念誦の功德を以て之

を資助するなり（上求菩提、故云上。向本覺之路、故云覺路。以念誦功德資助之也）」『百丈清規左牘』卷下・八八九頁b）。なお現在、「十仏名」ではなく、『大悲呪』を唱えた後に、以下の「起龕回向」が読まれる。「上來念誦諷經する功德は新示寂○○和尚の為にし奉り起龕の次いで品位を増崇す。十方三世……（上來念誦諷經功德奉為。新示寂○○和尚起龕之次増崇品位。十方三世……）」（『江湖法式梵唄抄』「起龕回向」七二頁a）。現在用いられる「起龕回向」は諸本に見えず、本稿冒頭で示した通り、諸清規に見える式次第と現在のそれとの間には齟齬がある。起龕については、『勅修百丈清規』等では二種の起龕が記されており、一つ目は法堂（方丈）から山門へ、二つ目は山門から山頭（火葬場・埋葬地）への起龕が見える。すなわち、それだけ仏事も複雑であり、その間には『大悲呪』や回向を行う事も記されており、現代に至り単純に「十仏名」が『大悲呪』に変化し回向を行うようになったとは言えない。なお『瑩山清規』には「挙龕念誦」の後に『大悲呪』を唱えることは見えないが、「龕前回向」と同内容の回向が見える。

臨濟宗の回向文 訳注 (三)

—— 尊宿送喪の念誦と回向文 (下) ・ 尊宿臨時行事の回向文 ——

妙心寺派教化センター 教学研究委員会 丸毛 俊 宏

尊宿山頭念誦

『諸回向清規式』卷五・諸念誦之部「山頭念誦」24a～b・181-675c～676a、『小叢林略清規』卷下・回向「尊宿山頭念誦并回向」25b・181-718a～b)

是日、則有(一)新示寂(某)和尚(二)、化縁既畢、遽返真常。(3)靈栳遍遠於拘尸、性火自焚於此日。仰憑大衆、資助覺靈。(7)(8)南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀仏(10)(11)。南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀仏。南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀仏。(12)上來、稱揚聖号、恭贊化儀。(13)(14)体格先宗、峻機不容於仏祖。(15)(16)用開後学、悲心仍撰於人天。(17)(18)收幻化之百骸、入火光之三昧。(19)(20)茶傾三奠、香爇一炉。頂戴奉行、和南聖衆。(21)(22)(23)(24)

(一) 則有／即有 〓 『諸回向清規式』に「則有」とあり、『小叢林略清規』に「即有」とある。

(二) 〈某〉和尚／堂頭和尚 〓 『諸回向清規式』に「〈某〉和尚」とあり、『小叢林略清規』に「堂頭和尚」とある。

(三) 南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀仏。『諸回向清規式』に「南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀仏。南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀仏。南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀仏」とあり、『小叢林略清規』に「南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀仏。〔三念仏名〕」とある。

*

是の日、則ち新示寂(某)和尚有りて、化縁既に畢つて、遽に眞常に返る。靈棺遍く拘尸を遶り、性火自ら此の日に焚く。仰いで大衆に憑みて、覺靈を資助す。南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀仏。南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀仏。南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀仏。南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀仏。南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀仏。上来、聖号を称揚し、恭しく化儀を賛す。体は先宗に格り、峻機は仏祖を容れず。用は後字を開き、悲心は仍りて人天を損す。幻化の百骸を収め、火光の三昧に入る。茶、三奠を傾け、香、一炉に爇かん。頂戴奉行、和南聖衆。

*

今日、ここに、新示寂(新たに遷化された)某和尚は、衆生を導くべき仏縁を終えて、すみやかに涅槃の境地に入られました。(「釈尊の」靈妙な棺が拘尸(クシナガラ)の街(の上空)を遍く巡り、清浄なる炎が「棺の中から」自ら「発火したように」この日に「遺体を」焼き尽くします。僧侶たちにお願ひして、「亡くなった和尚の」靈に對し、助力します。西方の極樂浄土世界におられる、廣大無辺の慈悲の阿彌陀仏に帰依します。西方浄土の極樂世界におられる、廣大無辺の慈悲の阿彌陀仏に帰依します。西方浄土の極樂世界におられる、廣大無辺の慈悲の阿彌陀仏に帰依します。

これまで、「阿彌陀仏の」名号を賛嘆し、慎み深く教化に力を添えてきました。(某和尚にそなわった)

体(本体)は古徳・先人の教えをきわめ、峻烈なはたらきは仏祖ですら手出し出来ないほどです。「その」用(はたらき)は「仏道修行に励む」後学の者を導き開き、慈悲の心は人間界・天上界を教化します。「まばろしのように変化する」実体の無い一身の体を収めて、「三昧の境地に入り」火葬されました。お茶を幾度もお供えし、香を炉中に焚きます。仏の教えを頂き、奉じて行い、僧侶たちと稽首し唱和します。

*

- (1) 新示寂||「寂滅の相を示した意で、尊宿・亡僧の位牌の頭に関する語」(『禪学』p.612)。「示寂」は、「寂は寂滅・円寂の略で、ニルヴァーナの意。ニルヴァーナを示現することで、特に高僧が死ぬことをいう」(『中村』p.549)。
- (2) 化縁||「教化・勸化する因縁事情」(『禪学』p.285)。「人びとを導く機縁。教化する縁」(『中村』p.291)。
- (3) 遽返真常||『百丈清規左觸』「遽返真常」条に「忠曰く」として、「真際常住の家郷なり」(p.493)とある。そのうち「真常」は、「真実常住、または真空寂のことで、涅槃の境を指す」(『禪学』p.612)、「真如常住の意。ニルヴァーナの境をいう」(『中村』p.784)。
- (4) 靈棺||「死骸をおさめる棺。靈龜とも」(『禪学』p.1302)。
- (5) 遶於拘尸||『百丈清規左觸』「遶拘尸之大城」条に『大般涅槃經後分』卷二「機感荼毘品」(T12907b)を引用し、「爾の時、如来、七宝の金棺、徐徐として空に乘じ、拘尸城の東門より出づ。空に乗じて右に繞り、城の南門に入り、漸漸に空を行きて、北門より出づ。空に乗じて左に繞り、還りて拘尸の西門より入る。是くの如く転転し繞りて三市し已わりて、空に乗じて徐徐として、還りて西門に入る。空に乗じて行き、東門より出でて、空を行きて左に繞りて、城の北門に入り、漸漸に空に行きて、南門より出でて、空に乗じて右に繞り、還りて西門に入る。是くの如く転転して、繞り経ること四市、是くの如く左右に拘尸那城を繞ること、七市を經る」(p.490)とある。「拘尸」は、「拘尸那竭(掲・伽)羅。中インドにあった都城の名。釈尊入滅の地として有名」

『禅学』p.247)。

(6) 性火自焚於此日 、『百丈清規左觸』「性火自焚於此日」条に『大般涅槃經後分』卷二「機感茶毘品」(T19, 909c)を引用し、「爾の時、拘尸城の内に、四力士有り。瓔珞もて身を蔽し、七宝の炬を持す。大車輪の如く、爛光普く照す。以て香楼を焚きて、如来を茶毘す。炬を香楼に投ずれば、自然に殄滅す。迦葉、告げて言う、大聖の宝栴は、三界の火の焼くこと能わざる所なり。何ぞ況んや、汝が力能く焚かん。〔広説乃至〕爾の時、如来、大悲の力を以て、心胸の中より、火は椗外に踊りて、漸漸に茶毘す。七日を経て、妙香楼を焚き、爾して乃ち方に尽く」(p.493)とある。「性火」は、「地・水・火・風の四つの元素が結合した火を事火というのに対して、火の元素のみのものを性火という。火の元素は一切の色法(物質的なもの)にあまねくゆきわたっていると考えて、かくこう」(『中村』p.713)。

(7) 資助 、『物資をもちて助けるい』(『中村』p.547)。

(8) 覺靈 、『亡くなった者の靈位。一切衆生悉有仏性の上から死者をも証覺の仏位とみて尊称する。亡くなった人の追善供養などにおける回向文などで用いる。尊靈とも』(『禅学』p.153)。

(9) 西方極樂世界 、『阿弥陀仏の淨土。単に淨土ともいう。西の方に向かつて、十万億の仏国土を過ぎたかなたにあり、もろもろの苦しみがなく、ただ楽しみのみがあり、阿弥陀仏はここにおいて、常に説法をしているという』(『中村』p.433, p.414)。『百丈清規左觸』「南無西方極樂云云」条に「古解に曰く」として、「蒙山和尚遷化茶毘の場に、春屋念誦す。挙して曰く、「南無靈山会上釈迦牟尼仏」と。其の意は、謂えらく遠土の弥陀に求めず、近く靈山の名を称す」とあり、唱える名号は一樣でなかつた。ただ無者は、「弥陀を唱え、尊宿の覺路を助けることとは、渠の仏に代わりて化を揚げ、其の滅に及んで邊に渠を抑損して、唱導の儀を以て之を待つとの謂うに非ず。夫れ宗師の智眼、上に挙仰の仏無し。故に茶毘の念誦に云う、「峻機仏祖を容れず」と。……」(p.493)とある。阿弥陀仏の名号は唐宋音で「南無西方極樂世界、大慈大悲阿弥陀仏」と読み、三唱することが記される。なお『勅修百丈清規』卷三「茶毘」(T48-1129a)、『禅林備用清規』卷九「化壇」(X63-655b) などには、十唱す

- ることとされる。これは『観無量寿経』の「十念弥陀」に拠ったものであろう。
- (10) 大慈大悲＝「大慈」は、「广大無辺のいつくしみ。普通には仏の慈を大慈といい、菩薩や祖師にも用いる」(『禅学』p.795)とあり、「大悲」は、「偉大なる慈悲。衆生の苦を救済する仏菩薩の大慈悲心をいう。一般の凡夫や声聞における慈悲は単に悲といい、仏菩薩における慈悲を大悲または大慈大悲という」(『禅学』p.814)とある。「大慈大悲」は、「仏の广大無辺の慈悲。(禅宗では「だいでいひ」とよんだ)」(『中村』p.918)。
- (11) 阿弥陀仏＝梵 Amitā 略して弥陀。仏光の無量である点から無量光 Amitābha とも呼ばれ、寿命の無限である点から無量寿 Amityus とも呼ばれる。これは阿弥陀仏が時間(寿)・空間(光)を通じて、無量無限の偉大な仏であることを意味している」(『禅学』p.9)。「西方浄土、極楽世界にあつて、法を説く仏。また、さつている仏。永遠に救いを与える仏。いのちと光きわみなき仏」(『中村』p.9、p.10)。
- (12) 上来＝「これまで云云してきたところ、の意」(『禅学』p.590)。
- (13) 称揚＝「他人の徳を賛嘆すること。賞賛・賞揚すること」(『禅学』p.589)。「他人の徳をほめたたえること」(『中村』p.731)。
- (14) 聖号＝「聖者の名号。仏菩薩の名号をこう」(『禅学』p.542)。「仏の名をこう」(『中村』p.726)。
- (15) 化儀＝「衆生を教化するのに用いる形式・仕方。教化の方便のこと」(『禅学』p.266)。「教化のしかた。教える方法。手段。導くしかた。化導の儀式的意。仏が衆生を教化指導するのに用いる説法の形式・しかた」(『中村』p.291)。「百丈清規左觸」「恭賛化儀」条に「忠曰く」として、「尊宿、減を示すこと、猶お仏の八相の中の涅槃の如し。実に是れ化度の儀式なり。今、仏名を唱えて、入滅の儀式を賛成するなり」(p.494)とある。
- (16) 体＝「本体・実体のこと」(『禅学』p.780)。「本体。実体。根本のもの。体性の略」(『中村』p.910)。
- (17) 仏祖＝「仏陀と祖師」(『禅学』p.1088)。「仏教の祖である釈尊。または仏と祖師」(『中村』p.1195)。
- (18) 用＝「はたらき。作用。功能」(『禅学』p.1242)。「はたらき。作用。活動」(『中村』p.1385)。
- (19) 後学＝「初学者」(『中村』p.395)。

- (20) 悲心 〓 「他人の苦しみを悲しむ心。いつくしみ。抜苦の心」(『中村』p.1130)。
- (21) 人天 〓 「人間界と天上界の略。六道(六趣、地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人間界・天上界)または十界の中の二界。迷いの世界とす」(『禅学』p.936)、「人びとと神々。また、人間界と天上界。人びとや天の神々。人間の世界と天界。人間と天(神々)との世界という意。また、その衆生」(『中村』p.1070)。
- (22) 幻化 〓 「まぼろしのように変化すること。また、虚仮で実体のないこと」(『禅学』p.279)、「幻と化。幻は幻人のしわざ、化は仏や菩薩の神通力のつくり出したものをこう」(『中村』p.334)。
- (23) 百骸 〓 「多くの骨。身体全部」(『大漢和』八卷p.47)。
- (24) 火光三昧 〓 「身から火を出す禅定のこと」(『禅学』p.156)、「身から火を出す禅定。火の光につつまれて瞑想していること」(『中村』p.144)。「百丈清規左觸」「火光三昧」条に「忠曰く」として、「今、火葬を称して、雅かに火光三昧と言う。火光は実に是れ三昧の名なり」(p.494)とある。
- (25) 三奠 〓 「仏前に三度たてまつること。幾度も仏前にお供えすることをこう」(『禅学』p.404)。
- (26) 和南 〓 「尊敬をささげること。稽首。また敬礼して口に唱える語の一」(『禅学』p.1326)。
- (27) 聖衆 〓 「多くの聖賢。衆聖」(『禅学』p.551)、「仏の弟子たち。聖なる人びとの意。声聞・独覚・菩薩をいう。仏・菩薩・縁覚・声聞などの聖者の群衆」(『中村』p.727)。

茶毘回向

(『諸回向清規』 卷五・諸念誦之部「山頭念誦」24b・T81-676a / 『小叢林略清規』 卷下・回向文「尊宿山頭念誦并回向」25b・T81-718b)

上來⁽¹⁾、念誦⁽²⁾諷⁽³⁾經⁽⁴⁾功德、奉為⁽⁵⁾堂頭和尚、茶毘⁽⁶⁾之次、增崇⁽⁷⁾品位。十方三世一切諸仏（云云）（一）

（二） 十方三世一切諸仏（云云） 〓 『諸回向清規式』に「十方三世一切諸仏（云云）」とあり、『小叢林略清規』に「十方（云云）」とある。

*

上來^{じよらい}、念誦^{ねんじゆふぎん}諷^{ふう}經^{きやう}する功德^{くどく}は、堂頭和尚^{どうとうわうしやう}の為^{ため}にし奉^{たてまつ}り、茶毘^{たび}の次^{ついで}で、品位^{ひんい}を増崇^{ぞうそん}せんことを。十方三世一切^{じつぽうさんぜいげいつぱ}の諸^{しよ}仏^{ぶつ}（云云）

*

これまで経文を読誦した功德は、堂頭和尚のために捧げるものであり、火葬するにあたって、「修行によつて得られる境地の」階位を増し高めるものです。世界中の、そして過去・現在・未来という三世の一切の諸もろの仏がたよ、諸もろの尊き菩薩がたや修行者たちよ、偉大なる完成された最高の智慧よ。「この功德が成就しますように。」

*

（一） 上來 〓 「これまで云云してきたところ、の意」（『禪学』p.390）。

（二） 念誦 〓 「心に仏を念じ、口にその名号を称すること」（『禪学』p.1003）、「心に念じながら、経や真言・陀羅尼などを唱えること。また、寺院において一定のきまり文句を声高に唱える作法」（『中村』p.1080）。

（三） 諷經 〓 「声を出して経文を読誦すること」（『禅学』p.1063）、「声をあげて経文を諷誦すること」（『中村』p.1182）。

- (4) 功德 〓 「善いことをした報い」(『禅学』p.251)、「すぐれた徳性。よい性質。(特別の)性質。価値ある特質。善を積んで得られるもの。いわゆる徳をこう」(『中村』p.260)。
- (5) 堂頭和尚 〓 「禅院の住持、住職のこと。堂頭と略して呼ぶこともある」(『禅学』p.935)、「禅寺の住持・住職」(『中村』p.1012)。
- (6) 荼毘 〓 「燃焼の意。死骸を火葬にすること。転じて、広く葬式のことをもいう」(『禅学』p.829)、「死骸を火葬すること」(『中村』p.902)。
- (7) 増崇品位 〓 「増崇」は、「うやまう。尊敬すること。恭しく供養すること。禅僧の霊位(主として住持職以上)に対して用いる」(『禅学』p.740)。「品位」は、「亡僧の敬称」(『禅学』p.1159)。「百丈清規左觴」『増崇品位』条に「忠曰く」として、「経呪の功德に託して、其の地位をして高昇せしむるなり。品位とは、譬えば菩薩十地の如き、是れなり」(p.342)とある。

祖師遠忌回向〔宿忌／半齋〕

(『諸回向清規式』巻一・諸回向之部「祖忌宿忌半齋」32b～33b・181-634c～635a)、『小叢林略清規』巻下・回向「祖師忌回向」8b～9a・181-714a)、『新修臨濟宗勳行聖典』第二巻 p.167～p.171、p.232～p.235、p.242～p.245)

(1) 宝明空海湛(2) 死生漩瀆之波、(3) 大寂定門融今古去来之相。

仰冀(4) 真慈(5) 俯垂昭鑑。

〈某〉門今月〈某〉日伏値。〈開山某名国師大和尚／前住当山某名大禅師〉(二)示寂(6)之辰。〈預於斯晚〉(三)

虔備香華灯燭、茶⁽⁸⁾〈湯之儀／菓珍饈⁽⁹⁾〉三、以伸供養。〈仍／謹〉集⁽¹⁰⁾〈合山／現前⁽¹¹⁾〉比丘衆⁽¹²⁾〈同音〉諷誦。大⁽¹³⁾〈仏頂
 万行首楞嚴神呪／悲円満無碍神呪〉⁽¹⁴⁾所集殊勲奉為。〈上酬慈蔭⁽¹⁵⁾／真慈增崇品位⁽¹⁶⁾〉⁽¹⁷⁾伏願。慧炬重輝耀祖室⁽¹⁸⁾光明之
 種靈根⁽²⁰⁾再孽⁽²¹⁾回少林花木之春。十方三世一切諸仏諸尊菩薩摩訶薩⁽²²⁾〈云云〉⁽¹⁶⁾

(一) 〈開山某名国師大和尚／前任当山某名大禪師〉 〓 『諸回向清規式』に「開山某名国師大和尚／前任当山某名大
 禪師」とあり、『小叢林略清規』に「前任妙心〈某名〉和尚大禪師」とある。

(二) 〈預於斯晚〉 〓 『小叢林略清規』に無し。

(三) 茶〈湯之儀／菓珍饈〉 〓 『諸回向清規式』(善通寺本)に「儀」とするが、大正蔵に抛り「儀」として書き下
 し等をおこなった。『小叢林略清規』に「茶菓珍饈」とある。

(四) 大〈仏頂万行首楞嚴神呪／悲円満無碍神呪〉 〓 『小叢林略清規』に「大悲円満無碍神呪」とある。

(五) 〈上酬慈蔭／真慈增崇品位〉 〓 『小叢林略清規』に「真慈增崇品位」とある。

(六) 十方三世一切諸仏〈云云〉 〓 『諸回向清規式』に「十方三世一切諸仏諸尊菩薩摩訶薩〈云云〉右紀事〈仏殿、
 法堂、開山塔、並塔頭月忌半齋回向、如此。但半齋可除預於斯晚湯之儀等句、而入同音二字。宿忌義依之可知也。
 凡亡者仏事之回向等、皆效之。祖師忌半齋中陰間、可誦其幾忌日。七七已過、則迄于三十三回可誦示寂之辰。三
 十三年過去、則可誦其正当幾遠忌也。〉とあり、『小叢林略清規』に「十方〈云云〉祖師名位等式、如記通回向
 宿忌示寂之辰下加〈預於斯晚〉。茶菓珍饈為〈茶湯之儀〉、除〈同音〉兩字。五十年忌已上、稱〈五十年忌之辰〉
 一百回忌之辰」等、自其已前、都称示寂之辰。」とある。

*

宝明⁽¹⁾の空海⁽²⁾は、死生⁽³⁾流洩⁽⁴⁾の波⁽⁵⁾を湛⁽⁶⁾え、大寂⁽⁷⁾定門⁽⁸⁾は、今古⁽⁹⁾去来⁽¹⁰⁾の相⁽¹¹⁾を融⁽¹²⁾す。

仰あおぎ冀こいねがわくば、真しん慈じ、俯ふして昭しょう鑑かんを垂たれたまえ。

〔某もん〕門もん今こん月げつ〔某もん〕日にち、伏ふして〔開山某名国師大和尚／前住当山某名大禪師〕示じ寂じやくの辰しんに值あう。〔預あらかじめ斯この晩ばんに〕虔うやうやしく香こう華げ灯とう燭しやく、茶さ〔湯とうの儀ぎ／菓か珍しん饌しゆう〕を備そなえ、以もつて供く養やうを伸のぶ。〔仍よつて／謹つしんで〕〔合がっ山さん／現げん前ぜん〕の比ひ丘くしゆう衆しゆうを集あつめ、〔同どう音おんに〕大だい〔公こう頂てい万ばん行ぎやう首しゆ楞らう嚴えん神しん呪じゆ〕悲ひ円えん滿まん無む得とく神しん呪じゆ〕を諷ふう誦じゆす。集あつむる所ところの殊じゆ勲くんは、為ためにし奉たてまつり、〔上かみ〕慈じ蔭いんに酬むかいんことを／真しん慈じもて品ひん位いを増ぞう崇そうせんことを。〕

伏ふして願ねがわくば、慧え炬こ重こみねて祖そ室しつの光こう明みやうの種しゆを輝き耀やうし、靈れい根こん再またび少しやう林りんの花か木ぼくの春はるに孽げつ回かいせんこと。十方じつぱう三世さい一切いっさいの諸しよ仏ぶつ諸しよ尊そん菩ぼ薩さつ摩ま訶か薩さつ〔云云〕

※ 『諸回向清規式』(善通寺本・訳注底本)の原文に従い、書き下しを行なつた。なお、現行の回向文の訓みかたは、「集あつむる所ところの殊じゆ勲くんは、上かみ、慈じ蔭いんに酬むかいんことを／集あつむる所ところの殊じゆ勲くんは、真しん慈じの為ためにし奉たてまつり、品ひん位いを増ぞう崇そうせんことを」であり、「奉たてまつり、真しん慈じ……」の個所については、原文の表記に基づく書き下し文とは異なる。

*

浄じやう明みやうな〔空くう〕なる宝ほうの海かい〔に喩よえられるような涅槃ねはんの尊そんい境地じやう〕は、生しよ死じ流りゆう転てんする波なみは立たたず静じやうかで穏おんやかであり、大だいいなる寂じやく静じやうの門もん〔静じやく寂じやく無む為ゐの悟ごりの境地じやう〕は、今いまと古こ、過か去きよと未み来らいのすがたを円えん融じゆうして生しやう滅めつ去きよれないものである。

仏祖ぶつその慈じ悲ひよ、どうか〔わたしたちを〕ご照しやう覧らんください。

〔某もん〕寺院いじやういんにおいて、今いま月の〔某もん〕日にち、〔開山某名国師大和尚／前住当山某名大禪師〕が亡なくなられた時ときを迎むかえました。〔あらかじめこの夜よに〕、つつしんで、香かう・華け・灯とう燭しやく、茶さ〔や湯とうのお供まがえ〕・菓か子し・ご馳ち走しゆ〕を供まがえ、供まが養やういたします。〔そこで／謹つしんで〕〔このお寺てらに住すべて／目めの辺へり〕の僧そう侶りを集あつめて、〔声こゑを共ともにして〕『大だい〔仏ぶつ〕

頂万行首楞嚴神呪／悲円満無碍神呪』をお唱えします。「こうした供養によつて」集めたすばらしい功德は、〔開山某名国師大和尚／前住当山某名大禪師〕のために捧げるものであり、〔慈しみに満ちた仏恩にむくい奉るものであります。／仏祖の慈悲でもつて(修行によつて得られる境地の)階位を増し高めるものです。〕伏して願うことには、智慧の明かりが重ねて〔祖師伝来の〕禪の奥深い教えという〔慈悲や智慧という〕光明のおおもとを光り輝かせ、仏性がまた再び達磨〔正伝の教え〕の花や木に春として芽吹きめぐつてくることを〔願います〕。世界中の、そして過去・現在・未来という三世の一切の諸もろの仏がたよ、諸もろの尊き菩薩がたや修行者たちよ、偉大なる完成された最高の智慧よ。〔この功德が成就しますように。〕

*

(1) 宝明空海Ⅱ「平等一如の涅槃の境地を海にたとえて言ったもの。明空の空海で、浄明空寂なる宝のような尊い涅槃の海を指すもの」(『禅学』p.115)。『百丈清規左臈』「宝明空海」条に「忠曰く」として、「己下の句は、歎真なり」とある。さらに『楞嚴経』巻五(T19-126)「頓に如来の宝明空海に入りて、仏知見に同じくす」を引用し、その解釈として長水子璿(九六五〜一〇三八)『首楞嚴義疏注経』巻五(T39-88b)により、「空、是れ如来蔵なるを以ての故に、満足周遍して、一切の法を具す。光明遍く法界の性を照らす故に、摩尼の宝の意に隨いて出生するが如く、大溟渤して、深広含摂するが如し。平等性智、達解照了、境智一如なるを、仏知見と名づく」(p.341)とある。

(2) 死生漩復波Ⅱ「涅槃を海に、生死を漩り復れる大波小波にたとえると、涅槃寂靜の境には生死・起滅のすがたはまったくないことをいう」(『禅学』p.438)。『百丈清規左臈』「湛死生漩復之波」条に「忠曰く」として、「生死輪廻を以て、海中の漩復に比するなり」とある。また同末に「漩復」について「忠曰く」として、「言うころは、生死の回流は、仏智の空海に入らば、即ち湛然寂靜にして、復た波浪の相無きなり。漩復は、三界の輪廻

比するなり。乃ち回転の義を取るなり」(p.342)とある。

- (3) 大寂定門融今古去来之相 〓 「大寂定の境地は寂靜無為にして、現在・過去とか過去・未来というようない切差別の相を渾融し、一体平等であること」(『禅学』p.797)。「大寂定」は、「禅定の境地。また、仏の悟りの境地」(『禅学』p.797)。「本来の安らぎであるニルヴァーナ」(『中村』p.919)。「百丈清規左體」。「大寂定乃至去来之相」条に「忠曰く」として、「寂定門中、今古の相を融すと言は、亦た過去無く、亦た未来無きなり。又た滅去生来無きなり」(p.342)とある。

- (4) 真慈 〓 「仏祖の慈悲。真実なる慈悲の意」(『禅学』p.612)。
- (5) 昭鑑 〓 「仏・菩薩が衆生を照し鑑みて護りたまふこと」(『禅学』p.534)。
- (6) 示寂 〓 「仏・菩薩・僧の死をいう。円寂。寂滅」(『禅学』p.432)。「寂は寂滅・円寂の略で、ニルヴァーナの意。ニルヴァーナを示現すること、特に高僧が死ぬことをいう」(『中村』p.549)。
- (7) 香華 〓 「仏に供える香と花」(『禅学』p.308)。「芳香ある花。仏にちよびける香と花」(『中村』p.394)。
- (8) 茶汤 〓 「仏祖の神前および亡者の霊などに、毎朝または法要などに供する湯茶のこと」(『禅学』p.851)。「禅寺で、毎日仏祖の靈前に供える茶と湯とをいう」(『中村』p.956)。
- (9) 珍饈(羞) 〓 「立派な馳走。羞は膳または薦、供養の食物」(『禅学』p.870)。
- (10) 台山 〓 「一叢林全体。全山。また、一山の僧衆全体も指す。闔山」(『禅学』p.164)。
- (11) 現前 〓 「まのあたり。目の前に在るもの」(『禅学』p.291)。「目の前に現れてゐること。目の前にあること」(『中村』p.338)。
- (12) 諷誦 〓 「經典を暗誦すること。声をあげて經文を誦んじ読むこと。諷經。諷誦」(『禅学』p.1074)。「經典を暗誦すること。經文を唱えること。節をつけて暗誦すること。節をつけて經文を読むこと」(『中村』p.1182)。
- (13) 殊勲 〓 「殊勝功勳の略。すぐれた功徳」(『禅学』p.502)。
- (14) 慈蔭 〓 「慈悲蔭覆の意。慈悲を蒙る、おかげを受けるの意」(『禅学』p.416)。「大慈悲の蔭覆の意で、慈悲を

- いおむたいと」(『中村』p.572)。
- (15) 真慈 〓 「仏祖の慈悲。真実なる慈悲の意」(『禅学』p.612)。
- (16) 増崇品位 〓 「増崇」は、「うやまう。尊敬すること。恭しく供養すること。禅僧の靈位(主として住持職以上)に対して用いる」(『禅学』p.740)。「品位」は、「亡僧の敬称」(『禅学』p.1159)。「百丈清規左觸」『増崇品位』条に「忠曰く」として、「経呪の功德に託して、其の地位をして高昇ならしむるなり。品位とは、譬えば菩薩十地の如き、是れなり」(p.342)とある。
- (17) 慧炬重輝 〓 『百丈清規左觸』「慧日重輝」条に「忠曰く」として、「師の生前に慧日輝き、今、滅後復た輝くを願うが故に、「重」と云う」(p.342)とある。なお「慧炬」は、「智慧のたいまつ」(『禅学』p.94)。「智慧の灯炬。智慧が無明の闇を照らし、険難な道を知らせることを慧炬に喩えてごう」(『中村』p.106)。
- (18) 祖室 〓 「祖師の室内の義。教外別伝不立文字の祖師の禅の妙旨は、経巻祖録だけでは十分に把握され得ない。正法を嫡嫡相承した正師の室内に入つて参究することが必要であるとされる」(『禅学』p.770)。「祖師の室内の意。師家の室内に入つて参究して、はじめて禅の妙旨を体得する」(『中村』p.859)。
- (19) 光明之種 〓 『百丈清規左觸』「光明之種」条に『大慧普覚禅師語録』卷二九「答陳教授」(747-936b)を引用し「光明の種子をして吾家の本分の事に有ることを知りて、邪見の網の中に墮ちやらしむ」(p.342)とある。なお「光明」は、「自己本具の仏性のはたらきをあらわす語として用いる」(『禅学』p.325)。
- (20) 靈根 〓 「靈利な宿根。本来、人の具えている靈妙なはたらき。仏性」(『禅学』p.1303)。
- (21) 再孽 〓 「自己本具の仏性のはたらきをあらわす語として用いる」(『禅学』p.325)。「孽」は、「枯れた樹木や、切り倒されたりした樹木の切り株から出る若芽」(『漢辞海』p.753)。
- (22) 少林花木之春 〓 『百丈清規左觸』「少林花木之春」条に「忠曰く」として、「某師の法幢盛んなるは、是れ達磨の児孫の栄達なり。故に、少林の春を回すと云うなり」(p.342)とある。なお「少林」は、「少林寺の略称。達磨の別称」(『禅学』p.592)。

献粥〔飯〕通回向

『諸回向清規式』卷一・諸回向之部「祖忌献粥供膳通回向」32b・T81-634c、『小叢林略清規』卷下・回向「献〔粥〕飯」祖師通回向」2b・T81-712b、『新修臨濟宗勤行聖典』第二卷 p.246～p.247)

仰冀⁽¹⁾真慈⁽²⁾ 俯垂⁽³⁾昭鑑⁽⁴⁾。上來⁽⁵⁾〔虔備〕〔献粥／香膳〕〔茶湯諷誦〕。大悲円満無礙神呪⁽⁶⁾。大悲円満無礙神呪⁽⁷⁾所集殊勲奉為。〔某祖師名〕〔上酬慈蔭〕〔真慈增崇品位〕。〔五〕十方三世〔云云〕切諸仏〔云云〕〔六〕〔香或作肴〕〔七〕

- (一) 『諸回向清規式』に、回向表記に附して「或除仰冀真慈等句。開山献粥風経用之」とある。
- (二) 仰冀真慈 俯垂昭鑑＝『小叢林略清規』に無し。
- (三) 〔虔備〕〔献粥／香膳〕＝『小叢林略清規』に「〔献粥／虔備香膳〕」とある。
- (四) 大悲円満無礙神呪＝『小叢林略清規』に「〔経名〕」とある。
- (五) 〔某祖師名〕〔上酬慈蔭／真慈增崇品位〕＝『小叢林略清規』に「〔某名〕真慈增崇品位」とある。
- (六) 十方三世〔云云〕切諸仏〔云云〕＝『小叢林略清規』に「十方〔云云〕」とある。
- (七) 〔香或作肴〕＝『小叢林略清規』に無し。

*

仰ぎ冀^{あお}わくば、真慈^{しんじ}、俯^ふして昭鑑^{しょうかん}を垂^たれたまえ。上來^{じょうらい}〔粥茶湯を献^{けん}じ〕〔虔^{つし}んで香膳茶湯を備^{そな}え〕、大悲円満無礙神呪を誦誦^{ふじゆ}す。集^まむる所の殊勲^{しゆん}は、〔某祖師の名〕の為にし奉^{かみ}り、〔上^{かみ}、慈蔭^{じいん}に酬^{むく}いんことを〕〔真慈もて品位^{ひんい}を増崇^{ぞうそう}せんことを〕。十方三世〔云云〕切^{さい}の諸仏^{しよぶつ}〔云云〕〔香は或いは肴^{しよ}に作る。〕

※ 『諸回向清規式』(善通寺本・訳注底本)の原文に従い、書き下しを行なった。なお、現行の回向文の訓みかたは、「集むる所の殊勲は、上、慈蔭に酬いんことを」集むる所の殊勲は、真慈の為にし奉り、品位を増崇せんことを」であり、「奉為。〔某祖師名〕」の個所については、原文の表記に基づく書き下し文とは異なる。

*

仏祖の慈悲よ、どうか〔わたしたちを〕ご照覧ください。これまで、《〔仏祖の真前に〕〔粥や湯茶をささげ〕／度み深く料理をととのえた食膳や湯茶を供え終え》、『大悲円満無礙神呪』をお唱えしました。〔こうした供養によつて〕集めたすばらしい功德は、〔某祖師名〕のために捧げるものであり、〔慈しみに満ちた仏恩にむくいるものであります。〕／仏祖の慈悲でもつて〔修行によつて得られる境地の〕階位を増し高めるものです。〕世界中の、そして過去・現在・未来という三世の一切の諸もろの仏がたよ、諸もろの尊き菩薩がたや修行者たちよ、偉大なる完成された最高の智慧よ。〔この功德が成就しますように。〕〔香〔の文字〕は、ある場合には有〔という文字〕になっている。〕

*

- (1) 真慈 〓 「仏祖の慈悲。真実なる慈悲の意」(『禅学』p.612)。
- (2) 昭鑑 〓 「仏・菩薩が衆生を照し鑑みて護りたまうこと」(『禅学』p.534)。
- (3) 上来 〓 「これまで云云してきたところ、の意」(『禅学』p.590)。
- (4) 献粥 〓 「仏祖真前に粥を供すること。この後に修する読経を、献粥諷経という」(『禅学』p.286)。
- (5) 茶汤 〓 「仏祖の神前および亡者の霊などに、毎朝または法要などに供する湯茶のこと」(『禅学』p.851)。「禅寺で、毎日仏祖の靈前に供える茶と湯とをいう」(『中村』p.956)。
- (6) 諷誦 〓 「經典を暗誦すること。声をあげて經文を誦んじ読む」と。諷経。諷誦(『禅学』p.1074)。「經典を暗

誦すること。経文を唱えること。節をつけて暗誦すること。節をつけて経文を読むこと」(『中村』p.1182)。

(7) 殊勲 〓 「殊勝功勲の略。すぐれた功德」(『禅学』p.502)。

(8) 慈蔭 〓 「慈悲蔭覆の意。慈悲を蒙る、おかげを受けるの意」(『禅学』p.416)。「大慈悲の蔭覆の意で、慈悲をこおむったこと」(『中村』p.572)。

(9) 真慈 〓 「仏祖の慈悲。真実なる慈悲の意」(『禅学』p.612)。

(10) 増崇品位 〓 「増崇」は、「うやまう。尊敬すること。恭しく供養すること。禅僧の靈位(主として任持職以上)に対して用いる」(『禅学』p.740)。「品位」は、「亡僧の敬称」(『禅学』p.1159)。『百丈清規左觚』「増崇品位」条に「忠曰く」として、「経呪の功德に託して、其の地位をして高昇ならしむるなり。品位とは、譬えば菩薩十地の如き、是れなり」(p.342)とある。

執筆者一覧（五十音順）

飯島孝良

花園大学国際禅学研究所専任講師

小川太龍

花園大学文学部准教授・国際禅学研究所兼任研究員

富増健太郎

花園大学国際禅学研究所研究員

丸毛俊宏

妙心寺派教化センター教学研究委員・国際禅学研究所客員研究員

林 鳴宇

花園大学国際禅学研究所客員研究員

花園大学国際禅学研究所論叢 第十八号

二〇二三年五月三十一日発行

編集兼
発行者

花園大学国際禅学研究所

〒〒1000001

京都市中京区西ノ京壺ノ内町八一
花園大学内

電話 〇七五―八二三―〇五八五

FAX 〇七五―二七九―三六四一

印刷 河北印刷株式会社

電子達磨 # 3 禅語漢語考釈支援システム に関して

富増 健太郎

1. はじめに

この文章は、花園大学国際禅学研究所（以下、国禅研と表記）のホームページ（<http://iriz.hanazono.ac.jp>）において公開している、「電子達磨 # 3 禅語漢語考釈支援システム」（以下、電子達磨 # 3 と表記）（<http://saku.hanazono.ac.jp>）に関する小論である。

2022年9月、それまで公開していた、「禅学総合資料庫 電子達磨 #2infolib」（以下、電子達磨 # 2 と表記）をリニューアルし、電子達磨 # 3 を公開した。以下に、リニューアルの経緯を簡単に記す。

国禅研のホームページに電子達磨 # 2 が公開されたのは、2005年9月である。公開当時、ウェブブラウザといえば、Internet Explorer（以下、IE と表記）が主流であった。そのため、電子達磨 # 2 は IE でのみ動作保証をしていた。しかし、その後、インターネットとそれを取り巻く環境が劇的に進歩をとげ、2022年6月16日にマイクロソフトによるIEのサポートが終了した。そして2023年2月14日には、IE が完全無効化された。先に書いた通り、IE でのみ動作保証をしていた電子達磨 # 2 にとって、IE の完全無効化はこれから先の存続に関わる大問題であった。そこで、国禅研専任講師（当時）の飯島孝良氏を中心に、2021年7月より電子達磨の全面リニューアル計画が始動した。その後、一般財団法人人文情報学研究所首席研究員の永崎研宣氏、花園大学文学部教授師茂樹氏にご助言をいただき、また花園大学国際禅学研究所客員研究所員（顧問）の芳澤勝弘氏のご助力を得て、株式会社メタ・インフォ（<https://www.meta-info.co.jp/>）によって電子達磨 # 3 の作成が開始された。

電子達磨#3 禅語漢語考釈支援システムに関して

作成を開始した時点で、既にIEのサポートが終了しており、いつ電子達磨#2が利用できなくなるかわからない状況だった。そのため、すべての検索結果画像の公開準備ができていなかったが、検索システム本体の公開を優先した。検索結果データ等々の改良については、追って進めているところである。

電子達磨に登録されているデータの中には、非常に貴重な写本・版本がある。それら貴重書の現物を見ることができるといのが、電子達磨の最大の特徴である。ただ、検索そのものをどのようにすべきかがわかりにくいこともあり得るだろう。利用者が電子達磨を利用して、困ったときに頼るのがヘルプ欄である。だが、電子達磨#3のヘルプ欄は公開時点で必要最小限の情報しか書かれていない。そこで今回、『花園大学国際禅学研究所論叢』第18号の場を借り、電子達磨#3の利用方法を掲載することにした。いわゆる、操作マニュアルである。今まで電子達磨を利用したことがない人やパソコンそのものが苦手な人、あるいは既に何度も電子達磨を利用したことのある人にとっても、以下に書かれていることが一助となれば幸いである。

2. 電子達磨のあゆみ

本小論の目的である、電子達磨#3の操作マニュアルを記す前に、電子達磨の歴史について書かれた「電子達磨のあゆみ」(<http://saku.hanazono.ac.jp/about>)を以下に掲載する。「電子達磨のあゆみ」は電子達磨#3上でも公開しているが、それを敢えて、ここに掲載するのは、操作マニュアルをより理解するためには、「電子達磨のあゆみ」が欠かせないからである。

なお、掲載にあたっては「電子達磨のあゆみ」執筆者である飯島氏よりご許可をいただいたことを明記しておきたい。

電子達磨のあゆみ

その黎明

『電子達磨』は、1991年から副所長として就任した、スイス人研究者のウルス・アップ教授が世界に向けて発信した情報誌（通訳）の名前である。アップ教授は各種禅録の電子テキストを公開（2000年～）、『Zen Base CD 1』（ウルス・アップ編、CD-ROM、1995年）の出版、『臨濟録一字索引』（1993年）を嚆矢とし、『無門関一字索引』（1994年）や『禅関策進一字索引』（1996年）などの各種索引を出版、1997年にはその集大成となる『一字索引叢書 総合索引』を刊行した。

2005年から副所長として就任した芳澤勝弘教授は、それまでに手掛けた無著道忠禅師の注釈シリーズを中心とした『基本典籍叢刊』（財団法人禅文化研究所刊）の索引シリーズを再編し、これをウェブ上で利用するための検索ツールを構築し、これに「禅学総合資料庫 電子達磨 #2 Digital Bohddharuma General Archives for Zen Research」と命名したのである（このとき、表記を「達摩」から「達磨」に改めた）。

禅学総合資料庫 電子達磨 #2infoLib について

「禅学総合資料庫 電子達磨 #2infoLib」は、禅録・漢詩の読解に役立つ抄物類の検索システムとして構築された。キーワードで検索すれば、写本・版本の該当ページにリンクする、いわばWeb版禅学大辞典（メタ・ディクショナリ）である。



禅学総合資料庫 電子達磨 #2infoLib
Digital Bodhidharma
General Archives for Zen Research

いわゆる禅学と称する分野で扱われる文献は、そのほとんどが漢文である。これらを解説してゆくには通常の漢語辞典だけではおよそ間に合わないのである。禅学に関する辞書類も整備されつつあるとはいえ、まだまだ完備というにはほど遠い状態である。登山家が未踏峰の山に挑むときには、みずからルートを開きつつ、岩場の隙間にナッツ（鉄杭）を打ち込んで、これにロープを結わえて、これをたよりにして登攀してゆくのだが、それと同じような作業が求められるのである。

では、禅学の分野では先人の開発してくれたルート、つまり後学者のためになるような工具書（ツール）がまったくないのかといえば、決してそういうわけではない。室町時代以降、禅は日本文化の形成に大きな影響を与えて来たのであり、禅学はいわばメジャーな学問領域であったといえる。しかも漢文は日本人にとっての唯一の外国語でもあった。多くの先人たちが輝かしい、すぐれた精華を残してくれているのである。いわゆる「抄物」を含めた注解書である。

それらの中には、版本として刊行されたものもあるが、すべてが公刊されているというわけではない。多くは写本として伝わっているのだが、人知れず埋もれているものも少なくないのである。そして、印刷が容易ではなかった時代に於いては、写本は人々に写されることによって広まっていったのであるが、この「写しの文化」はかならず「烏焉馬」の誤謬を含む。つまり写し間違いである。こうしてできたいくつかの写本のうち、長い歴史のなかで消滅を免れて今日まで残っているものも少なくないのである。

写本は多くの場合、数が希少である。中にはたった一種類しか存在しないような「天下の孤本」も多い。そして、当然のことながら写本は人の手によって書かれたものであり、中には判読しがたい草書まじりのものもある。現代人が読みかつ利用するには、これまた大きな困難がともなう。そもそも、貴重な写本を閲覧する機会を得ること自体が一大困難である。

このような、禅学における困難を解決する一助として、2005年に花園大学国際禅学研究所で考案されたのが、「禅学総合資料庫 電子達磨#2infolib」である。

主として、寺院に秘蔵されてきた貴重な歴史的遺産を、ご許可をいただいで、まずはデジタル画像にする。同時に、複製本を作成する。写本には「天下の孤本」が多いので、複製本を作成することは大いに意味があるのである。ついで、当該文献に含まれる基本テキストを作成する。そして、このテキスト・データと画像データをリンクするのであるが、これには Infocom 社 (<http://www.infocom.co.jp/index.html>) のデジタル・アーカイブ・システム InfoLib (<https://service.infocom.co.jp/das/product/infolib/index>).

html) を採用した。公文書、古文書、貴重書、研究成果、学術情報などのデジタルコンテンツをインターネット上で広く公開するためのデジタル・アーカイブ・ソリューションである。

このデジタル・アーカイブ「電子達磨」は、いわば、印刷文化史におけるもっとも原初的な形態である写本と、デジタルによる情報処理というもっとも先端的な要素を結合したのものである。

「電子達磨 #2infolib」が公開されるや、禅学をはじめ、国文学・国語学・漢文学・日本史学などで活用され、学術機関のみならず国内外の一般層にも幅広く利用されてきた。掲載したコンテンツも随時増加してきた。

〔※〕上記「電子達磨」の特徴とその意義については、Web マガジン「AMeet」へ芳澤勝弘氏（花園大学国際禅学研究所顧問）が寄稿された記事においてその趣旨説明がなされている（<https://www.ameet.jp/digital-archives/448/>）。以上の内容は、この記事に加筆したものに基づいている。

新バージョン「電子達磨 # 3 禅語漢語考釈支援システム」について

しかし、2022年6月、「電子達磨」をはじめとして広範囲で利用されてきた Internet Explorer のサポートが停止されることとなった。このことは、「電子達磨」が採用していたビューアが機能しなくなることを意味し、ことによると「電子達磨」そのものが閲覧不能になることが想定された。これを却って好機と捉え、バージョン・アップしたのが「電子達磨 # 3 禅語漢語考釈支援システム」である。

有益な辞書はあまたある。しかし、完璧な辞書というものはあり得ない。こと禅学のような限られた領域では、この分野での研究所産は必ずしも豊かではない。この「電子達磨」は最新の成果と古くからある抄物類とを通貫して検索し、禅語の意味を検討し考釈するための支援システムである。具体例として、徳川時代の学僧・無著道忠が撰述した禅学叢書については、現在の水準から言っても該博な知識に基づく詳細な研究で成されているが、「電子達磨」はこれを多く提供している。また、禅語の辞書類、公案の注釈書というべき『禅林句集』（『句双紙』）、『臨濟録』『碧巖録』の抄物類、禅門で重んじられてきた漢詩文に関する注釈書類、日本臨済宗中興の祖・白隠禅師の禅籍類など、禅学研究に不可欠な文献とそこに収録された術語

が一括で検索できる。しかも曖昧検索機能となっているため、新旧字体を問わないで検索できるという大きな特徴も高く評価されてきた。現在もお上記の資料に関連したものが新たに見出されており、今後も国内外において貴重な禅学資料を増強する計画である。

この度のシステム再構築にあたり、IIIF (International Image Interoperability Framework) システムを活用して、データベース間の相互検索可能性の向上を図っている。この IIIF の相互運用性にあるメリットは、ひとつのソフトウェアを作るだけで、世界中の IIIF 公開サイトのデータが同じ方法で使える点にあり、国際的な規模で複数のサイトを横断してテーマごとに画像を集めるような閲覧方法が実現できるものといえる。

IIIF は、画像へのアクセスを標準化し相互運用性を確保するための国際的なコミュニティ活動である。2018年5月には、国会図書館デジタルコレクションが IIIF に対応したことで34万点の IIIF 対応デジタルコンテンツが出現することとなり、Web サイト間での画像の自由な横断的操作が可能になった。この IIIF に対応する機関とコンテンツが増えれば増えるほどサービスの質が向上するものであり、東大、京大、慶應大、国文学研究資料館等も相前後して対応した。現在は多くの大学図書館が IIIF システムに対応しており、これによって画像データは公開する大学ならびに研究機関の間で相互運用することが可能になるものである。

実際、現在は IIIF に対応したオープンデータベースがいくつも生まれしており、IIIF を活用したデータベースに他のデータベースを利用するユーザも集まっていき、国際レベルでの相互利用によって各データベースの利用者が一層増加していくような好循環が生まれつつある。「電子達磨」もこの相互利用を活かすよう計画している。

活用され得る関連分野について

現在、IIIF システムなどでデジタル化した古典籍の画像データが関連分野で広く活用され、仏教学では SAT (大蔵経テキストデータベース) が活用されている。「電子達磨」も同様のシステムの導入で、国内外で展開する以下の諸分野に資するデータベースとなり得る。

◆禅学ないし仏教の研究者

禅籍や漢詩類の抄物類を公開するものであることから、まずは仏教研究者に活用されるものと考えられる。とくに、『臨濟録』や『碧巖録』などは難解をもって知られるが、こうした重要なが難解な禅籍を解釈するうえで大いに参考になる注釈書を収録する「電子達磨」は、これまでもきわめて重宝がられてきた。今後も、こうした動向に大いに資するものといえる。

◆国語学の研究者

禅学以外でいちやく抄物類に学術的価値を見出したのは、じつは抄物にある書込みそのものを室町時代語や徳川時代語の重要な日本語資料として扱う国語学の研究者であった。これに加えて、抄物類にある訓読そのものに国語学的価値を見出す研究も多く、今後の活用が引き続き期待される。

◆国文学・漢文学の研究者

更には、中世から近世における国文学の研究者にも利用され得るものである。殊に、五山文学（中世禅林で発展した漢詩文）の注釈も豊富に収録する「電子達磨」は、国内ばかりか海外の日本文学研究者にも重宝されている。また、この五山文学の薫陶を受けている（五山から還俗した）朱子学者である藤原惺窩や林羅山についても、その思想と背景を知るために活用すべき資料が多く収録されているため、大いに役立てられ得る。

◆日本史（中世史ないし近世史）の研究者

また、中世史ないし近世史を研究対象とする日本史研究者にも、資するところはきわめて大きい。禅文化などをはじめとした文化史研究では抄物類は活用されてきており、今後も室町時代から徳川時代にかけての禅文化とその知的背景を探る有効な資料となり得る。

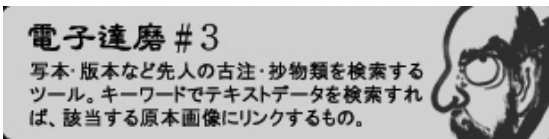
上記の分野に関連する他分野においても、更なる活用が期待される。「電子達磨 # 3」を活用される諸氏におかれては、是非とも多くの御要望やリクエストを御願いたい。この電子データベースを、研究や探究を志向する多くの方がたに育てて頂きたいと考えている。

3. 操作マニュアル

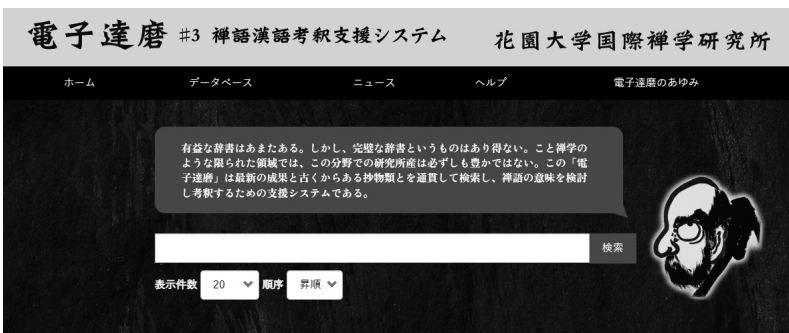
本項では、電子達磨 # 3 を実際に利用する上で、知っておくべきことや注意点について記述する。なお、以下の文章は、初めて電子達磨を利用する人を想定している。そのため利用経験のある人にとっては、既知の情報もあるだろう。何について説明しているのかがわかるよう、項目建てをしておく。各自の興味と必要に応じて取捨選択していただければ幸いである。

3-1. 電子達磨 # 3 アクセス方法

電子達磨 # 3 を利用するにはまず、国禅研のホームページにアクセスしなければならない。ホームページのアドレスは <http://iriz.hanazono.ac.jp> である。ホームページが開くと画面左下部に下の電子達磨 # 3 のバナーがある。



これをクリックすると、電子達磨 # 3 にアクセスできる。あるいは、<http://saku.hanazono.ac.jp> と直接、ブラウザのアドレスバーに入力してもアクセスできる。また、検索サイトで「電子達磨」と入力して、検索結果からもアクセス可能である。



「有益な辞書はあまたある。しかし、完璧な辞書というものはあり得ない。

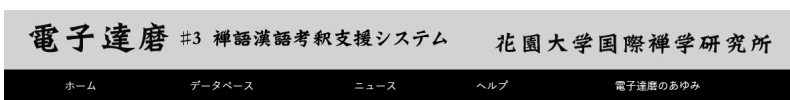
こと禅学のような限られた領域では、この分野での研究所産は必ずしも豊かではない。この「電子達磨」は最新の成果と古くからある抄物類とを通貫して検索し、禅語の意味を検討し考釈するための支援システムである」と言っている達磨の画像が表示されれば、アクセス成功である。以下、この画面を「ホーム画面」と呼ぶ。

なお、電子達磨#2では、初回利用の際にユーザ登録が必要であった。しかし、電子達磨#3はユーザ登録なしで即、検索ができる。また、ブラウザを問わず利用できるため、パソコンだけでなく各種スマートフォン・タブレットでも検索が可能となった。

3-2. ホーム画面に関して

次に、ホーム画面の説明をする。

ホーム画面上部には「ホーム」・「データベース」・「ニュース」・「ヘルプ」・「電子達磨のあゆみ」という項目がある。



「ホーム」はホーム画面へ戻るためのものである。そのため、検索をしていない状態でクリックしても、特に何も起こらない。「ホーム」は検索結果画面でも同じ位置に表示されるので、新たに検索をしたい時、検索結果画面からホーム画面に戻りたい時等は「ホーム」をクリックすると、ホーム画面に戻る。

「データベース」には電子達磨#3に登録されている書籍の書誌情報やその書籍の説明が書かれている。また、各データベース名をクリックすると、その書籍を最初のページから閲覧することができる。

電子達磨 # 3 禅語漢語考釈支援システムに関して

漢語辞典類 I	
データベース名	
諸徳大漢和辞典	
漢語大詞典	

漢語辞典類 II (工事中)	
データベース名	
詩語解	
文語解	
葛原詩話	

禅語辞典類	
データベース名	
禅語辞典類 (『神学大辞典』『禅語辞典』『禅語字彙』『織田仏教大辞典』)	

無著道忠撰述禅学叢書	
データベース名	説明
禅林象器箋 ぜんりんしょうきせん 刊記：寛保元年 所蔵：龍華院 撰者：無著道忠撰	全20巻、目録1巻。 禅林の規矩・行事・機構・器物などについて、その起源・意義など、その理由・意義を詳述したもの。一種の禅学大事典である。 寛保元年(1741)3月1日から校讎をはじめ、毎日20紙ずつ、5月26日に終える。時に89歳。

「ニュース」には電子達磨 # 3 に関して、国禅研から利用者に伝えたい事柄が表示される。主にデータベースの更新状況が表示されることになる。また、電子達磨 # 3 上で何か不具合などが生じた場合、その解決方法等は「ニュース」に表示される。

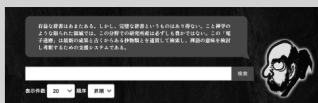
2022-09-01	「電子達磨 # 3」画像データ公開状況 (2023年3月6日現在)
2022-09-01	「電子達磨 # 3 禅語漢語考釈支援システム」公開のお知らせ

「ヘルプ」には電子達磨 # 3 の利用法が書かれている。ただし、必要最小限にとどめられていることは既に触れたとおりである。くわしい説明は、この小論をご参照いただきたい。

ヘルプ

1. 検索画面

【検索窓】



- 検索キーワードを指定して検索ができます。
- 入力フィールド内にて、スペースでキーワードを区切るとAND検索となります。あいまい検索のため、漢字の旧字体と新字体を区別しません。

【表示件数】

- 検索結果の一覧表示件数を、「20」、「50」、「100」、「200」、「1000」から選択できます。

【表示順指定】

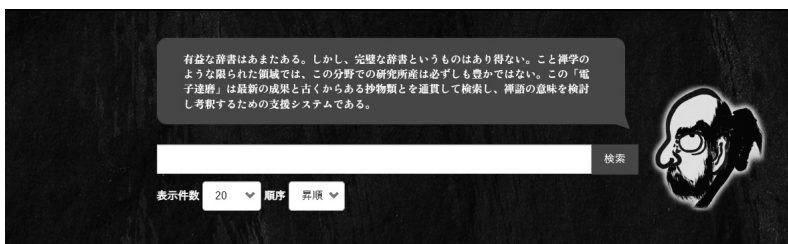
- 検索結果の表示順を、「昇順」または「降順」から選択できます。
- 表示順を設定して「検索」ボタンをクリックしてください。

2. 検索結果画面

検索結果はデータベースの登録順に表示されます。

「電子達磨のあゆみ」は、本小論「2. 電子達磨のあゆみ」のとおりである。

次は検索窓部分について説明する。



検索窓に検索キーワードを入れて右端の「検索」を押すと、検索ができる。詳しくは「3-4. 電子達磨 # 3 検索方法」で説明する。ここでは、検索窓の下にある「表示件数」と「順序」について、説明する。

「表示件数」は、検索結果の一覧表示件数を表し、初期設定は「20」になっている。他に「50」、「100」、「200」、「1000」が選択できる。

電子達磨#3 禅語漢語考釈支援システムに関して

「順序」は、検索結果の表示順を表し、初期設定では「昇順」になっている。「昇順」の場合、登録されているデータベースの上から順に、検索結果が表示される。

他に「降順」が選択できる。「降順」の場合は、登録されているデータベースの一番下から順に、検索結果が表示される。

重要なのは、「表示件数」、「順序」とともに、検索前に選択しておかないと検索結果の一覧表示に反映されないという点である。

「表示件数」と「順序」の下にあるのは、電子達磨#3に登録されているデータの一覧である。

データベース 全選択

- 漢語辞典類**
 - 陔馮大業和辞典 漢語大詞典
- 漢語辞典類II(江事中)**
 - 詩語解 文語解 葛原詩証
- 禅語辞典類**
 - 禅語辞典類(『禅学大辞典』『禅語辞典』『禅語字彙』『織田仏教大辞典』)
- 無著道忠撰述禅学叢書**
 - 禅林叢書 虚空録空解 五家正宗贊助茶 葛藤語彙 大慧普覺禅师書梅陀珠 江湖風月集解 教坊百文清夜庵 風流袋
- 禅林句集・句双紙類**
 - 句双恣意抄 柳枝軒集『禅林集句』 無刊記本『句双紙尋覓』 點讀集
- 臨濟録抄集成**
 - 臨濟録撰要抄 臨濟録撰葉抄 臨濟録抄 臨濟録密叢語錄 臨濟録天山抄 臨濟録高安抄 臨濟録贊解
- 臨濟慈照禅師語録疏流**
 - 臨濟慈照禅師語録疏流
- 曾巖録抄物集成**
 - 曾巖録抄電鈔 曾巖集景題語断
- 漢詩文**
 - 三体詩曲抄 錦繡段抄 中華看木詩抄 『古文真寶』 芙蓉抄 萬水原 黄山谷詩集 狂雲集 大日本佛教全書版『翰林五風集』
 - 今津文庫『翰林五風集』 唐詩選 冷齋夜話 増注聊齋誌異 紙中書 天下白 石門文字禪 漢北集 寒山詩 寒山詩常韻
 - 四河入海 源明集 雪堂詩集 高木文庫本『翰林五風集』
- 白隠禅師語録**
 - とし漢華卷之一 とし漢華卷之二 とし漢華御垣守 遠羅天金卷之一 遠羅天金卷之中 遠羅天金卷之下 夜船閑話
 - 夜船閑話卷之下 假名律
- 禅語古辞書**
 - 祖庭事苑 禅林疏語 禅林疏語考逸 諸録俗語解
- 漢文語録**
 - 欠伸稿 乾 欠伸稿 坤 虎六録 禅林雜聚 禅林技藝聚 感山雲臥紀釋幀略 夢窓圓師語録 林間錄 興禅護國論聖教 雲門廣録 宗鏡録 虛堂錄 般若華集 羅湖野録
- 灯史**
 - 五灯披萃
- 陸軍**
 - 五雜俎
- 日本禅宗史**
 - 富士山志 元亨釈書

最初に書かれている「漢語辞典類Ⅰ」はグループ名で、「諸橋大漢和辞典」と「漢語大詞典」がそのグループに登録されているデータである。以下、同じように「グループ名」、「データ名」が続く。

各データ名の前にはチェック（✓）がついている。

✓ 禪林象器箋

このチェックがついているデータが、検索対象となっているデータである。初期設定では、「漢語辞典類Ⅰ」、「漢語辞典類Ⅱ」、「禅語辞典類」の3グループ6データは検索対象外となっている。これらを検索対象にしたいときは、各データ名の前のチェックボックスをクリックして、チェックを付ける。あるいは、グループ名をクリックすると、そのグループに登録されているすべてのデータに一括でチェックをつけることができる。

もう一つの方法としてはデータ一覧の右上、ちょうど達磨の画像の真下あたりに、「全選択」というボタンがある。

全選択

これをクリックすれば、文字通りすべてのデータにチェックが付く。なお、「全選択」ボタンは、クリック後は「全解除」ボタンになるので、もう一度クリックすると、すべてのデータからチェックを外すことができる。特定のデータ、あるいは特定のグループのみを検索したい場合は、一度すべてのチェックを外してから、目的のデータにチェックをつけるのが効率的である。

最後に、ホーム画面の一番下にあるニュースは、先に見たニュースと同じものが表示されている。

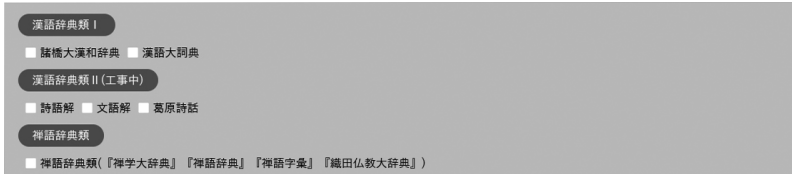
3-3. 登録データベースについて

2023年3月時点で、電子達磨#3には14グループ81データが登録されている。各グループ名や、そこにどのようなデータが登録されているかに関しては、「3-2. ホーム画面に関して」で説明した、データベースで確認い

電子達磨#3 禅語漢語考釈支援システムに関して

ただきたい。

ここでは、今回のリニューアルに際して追加された、3グループ6データに関して触れておく。



「漢語辞典類 I」グループには『諸橋大漢和辞典』と『漢語大詞典』が登録されている。また、「禅語辞典類」グループには「禅語辞典類」が登録されている。これは『禅学大辞典』、『禅語辞典』、『禅語字彙』、『織田仏教大辞典』をまとめたデータである。いずれも、仏教学、禅学研究に欠かすことのできない辞書類である。

電子達磨#3では『諸橋大漢和辞典』と『漢語大詞典』の熟語が検索できる。

【花園】36 9 P 9892	諸橋大漢和辞典
【花園口】37 9 P 9892	諸橋大漢和辞典
【花園市】39 9 P 9892	諸橋大漢和辞典
【花本】 9 P 287	漢語大詞典
【花根本艶】 9 P 294	漢語大詞典

「禅語辞典類」では各辞書の見出し語が検索できる

一花開五葉、結果自然成 [禅語辞典]-23	禅語辞典類
一華開五葉 [禅学大辞典]-40a, [禅学大辞典]-40a, [禅学大辞典]-40a	禅語辞典類
一花開五葉結果自然成 [織田仏教大辞典] 60-3	禅語辞典類

ただし、他のデータのように、検索結果画像は存在しない。各自で検索結果に書かれている巻数・ページ数をもとに、辞書で確認しなければならない。

「漢語辞典類Ⅱ」グループには、『詩語解』、『文語解』、『葛原詩話』が登録されており、こちらはいずれも検索結果画像が存在する。これらはいずれも、江戸期に書かれたもので、漢詩を解釈する際に役立つ書籍である。なお、『詩語解』と『文語解』に関しては、吉川幸次郎・小島憲之・戸川芳郎編『漢語文典叢書』第1巻の解題に、『葛原詩話』に関しては、池田四郎次郎編『日本詩話叢書』第4巻の改題に詳しい。

以上、今回のリニューアルに合わせて追加したデータに関して、ごく簡単に説明した。なお、登録データに関しては、今後も増加予定ある。

3-4. 電子達磨# 3 検索方法

電子達磨# 3で検索する方法は、非常に簡単である。達磨のセリフの下にある検索窓に検索したい単語を入れて、右端の「検索」ボタンをクリックするだけである。



達磨	検索
----	----

例えば「達磨」で検索してみる。検索窓に「達磨」と入力し、検索ボタンをクリックすると、検索結果一覧が表示される。

電子達磨#3 禅語漢語考釈支援システムに関して

検索結果	出典
達磨百丈臨濟	禪林象器箋
達磨忌	禪林象器箋
達磨大師、	虚堂録拏耕
達磨初忌	虚堂録拏耕
達磨第二忌	虚堂録拏耕
二祖對達磨禮三拜、依位而立	虚堂録拏耕
故我達磨鼻祖	虚堂録拏耕
古徳道、達磨大師空手來空手去。已是揚塵簸土、曲爲今時。黄梅七百高僧箇箇希求佛法。惟虚行者一人、眼不識字、專事供春。所以西土衣盂、密而授之	虚堂録拏耕
達磨見梁武帝	虚堂録拏耕

検索結果一覧の上に「779件中の1件目~20件目を表示」と書かれている。これは全登録データ中に「達磨」という単語が出てくる箇所が779箇所あるということを示している。

検索結果一覧を見ると、一番上の左側に「達磨百丈臨濟」とあり右側に「禪林象器箋」とある。

達磨百丈臨濟	禪林象器箋
--------	-------

左側の「達磨百丈臨濟」が検索結果であり、右側の「禪林象器箋」が検索結果部分が含まれているデータ名(書籍)である。また、検索結果一覧の「達磨百丈臨濟」のうち達磨だけが黄色で強調されている。これは検索結果から検索した言葉を素早く見つけるための機能である。

次に、検索結果画像は、検索結果をクリックすると表示される。これはIIIFという方式で作成された画像で、自由に拡大することができる。拡大すれば、原本では小さくて読めないような文字も、判読可能となる。ただし、電子達磨#3で公開している画像はすべて、保存・印刷を禁止している。研究や学術論文に使用する際には、事前に許可を申請する必要がある。

拡大だけでなく、検索結果画像は普通の書籍のように、前後のページに移動することもできる。なお、検索結果一覧のデータ名部分をクリックすると、「3-2. ホーム画面に関して」で説明した「データベース」に飛ぶので、今、自分が読んでいるのがどのような書籍であるのかを知りたくなったときに、役に立つ機能である。

以上が、電子達磨#3の検索方法と検索結果画像の表示方法である。非常に簡単で、初めて電子達磨#3に触れる人でも、またコンピューター全般が苦手な人でも使いやすいのではないだろうか。そう思っていただけなら、幸いである。

さて、検索に関してもう2点、付け加えておく。1点目は、新旧漢字の問題である。電子達磨#3のように古典籍を扱うデータベースで検索を行う際、問題となるのが、新旧漢字である。例えば「仏陀」で検索した場合に、データベース内の「佛陀」は検索対象になるのかということであるが、これは、そのデータベースの設定による。電子達磨#3の場合は、あいまい検索を採用しているので、新字旧字のどちらで検索しても、両方とも検索対象となる。



仏陀 検索

表示件数 20 順序 昇順

データベース

45 件中の 1 件目 ~ 20 件目を表示

△祀祠火爲上、經書頌爲最、人中王爲尊、衆流海爲首、星中月爲先、光明日第一也。上下及四方、諸所有形物、天及世間人、佛者最爲尊、欲未其福者、供養三佛陀。	風流袋
苦哉佛陀耶	柳枝軒版『禪林集句』
苦哉佛陀耶	無刊記本『句双紙尋覓』
變化萬般碧玉相、莊嚴千尺紫金容〔泉六請佛陀〕	點鐘集
驢屎比麝香、苦哉佛陀耶 ○	點鐘集
南無佛陀耶、救苦觀世音 ○	點鐘集

2点目は、句読点に関してである。ある程度の長さの文章を検索する際

電子達磨# 3 禪語漢語考釈支援システムに関して

に、検索ワードに句読点が付けられている場合、その位置が、登録されているデータと一致しなければ検索されないのかどうか。

電子達磨# 3 では、句読点は検索対象になっていない。つまり、検索ワードに句読点が含まれていても含まれていなくても、また登録データに句読点が含まれていてもいなくても、検索窓に入力された文字のみで検索を行う。



The screenshot shows a search interface with a search bar containing the text '諸惡莫作 衆善奉行'. Below the search bar are controls for '表示件数' (20), '順序', and '昇順'. A '検索' button is on the right. A profile picture of a man with glasses is in the top right corner. Below the search bar is a 'データベース' button. The results section shows '3 件中の 1 件目 ~ 3 件目を表示'. The first result is a table with two columns: the main text and a source column. The source column has two entries: '風流袋' and '狂雲集'.

△諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意是諸佛教。	風流袋
白居易問烏窠和尚、如何是佛法大意、窠曰、諸惡莫作、衆善奉行、白曰、三歲孩兒也解恁麼道、窠曰、三歲孩兒雖道得、八十老人行不得、靈山和尚每日、若無烏窠一語、我徒盡泥乎、本來無一物及不思善不思惡善惡不二邪正一如等語、以撥無因果、而世多日用不淨之邪師也、故余作此偈、以示衆云。 學者撥無因果沉、老禪一句價千金、諸惡莫作善奉行、須在先生醉裏吟。	狂雲集

このように、電子達磨# 3 の検索は、簡単にできるだけでなく、検索ワードを入力する際に細かなことを気にしなくてもいいように作られている。

なお、検索結果が存在しない場合は、「該当するデータは見つかりませんでした。」と表示される。

該当するデータは見つかりませんでした。

以上が電子達磨# 3 の検索方法のすべてである。

4. 検索のコツ

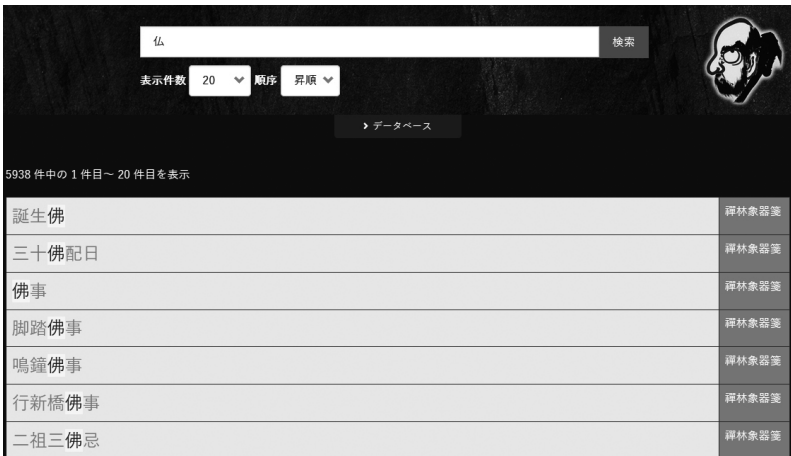
先に見たように、電子達磨# 3 で検索をすること自体は、非常に簡単である。しかし、簡単に検索できるということと、知りたい情報が簡単に見つかるということは、イコールではない。検索方法が簡単な場合、検索

ワードの選び方次第では、検索結果が膨大になりその中から求める情報を探さなければならないということが起こり得る。そこで、以下では電子達磨#3で検索する際に知っていれば、検索がしやすくなるコツをいくつか書く。なお、下記の方法は筆者が電子達磨で検索を行ってきた中で見つけたものである。わずかでも利用者各位の参考になれば、幸いである。

4-1. 検索文字数に関して

電子達磨#3で検索する際に、最も気をつけるべきことは、「漢字1文字での検索はできるだけ避ける」である。理由はごく単純で、漢字1文字で検索すると、検索結果が膨大な数になるからである。

例えば「仏」で検索すると、5938件の検索結果が表示される。



The screenshot shows a search interface with a search bar containing the character '仏' and a search button labeled '検索'. Below the search bar are dropdown menus for '表示件数' (20) and '順序' (昇順). A 'データベース' button is also visible. The search results are displayed in a table with 7 rows, each showing a search result and a source link.

5938 件中の 1 件目 ~ 20 件目を表示	
誕生佛	禪林象器箋
三十佛記日	禪林象器箋
佛事	禪林象器箋
脚踏佛事	禪林象器箋
鳴鐘佛事	禪林象器箋
行新橋佛事	禪林象器箋
二祖三佛忌	禪林象器箋

一方、「仏陀」で検索すると、45件の検索結果が表示される。

電子達磨# 3 禅語漢語考釈支援システムに関して



検索結果	出典
△祀祠火爲上、經書頌爲最、人中王爲尊、衆流海爲首、星中月爲先、光明日第一也。上下及四方、諸所有形物、天及世間人、佛者最爲尊、欲未其福者、供養三佛陀。	風流袋
苦哉佛陀耶	柳枝軒版『禅林集句』
苦哉佛陀耶	無刊記本『句双紙尋覓』
變化萬般碧玉相、莊嚴千尺紫金容〔泉六請佛陀〕	貼磁集
驢屎比麝香、苦哉佛陀耶 ○	貼磁集
南無佛陀耶、救苦觀世音 ○	貼磁集

電子達磨# 3 で検索をする場合、なにか検索したい言葉が事前にあるはずだ。そうであれば、最初はできるだけ長い文章で検索をすることをお勧めする。長い文章で検索をして、「該当するデータは見つかりませんでした」と出た場合、そこから少しずつ、文章を短くして検索していく。検索結果が多くて困っている場合には、この方法を試してみてもいいだろう。

4.2. グループ検索

「4-1. 検索文字数に関して」では、最初は長い文章で検索をし、そこから少しずつ短くしていくという検索方法を書いた。しかしながら、実際に検索をしていると必ずしも、長い文章で検索ができるとは限らない。むしろ漢字2文字の熟語で検索する機会の方が、圧倒的に多い。そんな場合は、グループ検索をお勧めする。

グループ検索とは、初期設定の全検索ではなく、必要なグループに限定して検索するやり方である。方法は、「3-2. ホーム画面に関して」でも触れたが、まず全選択をクリックし、一度、全てのデータを検索対象にする。その後、全解除をクリックして、全てのデータを検索対象から外す。そして、必要なグループ名をクリックすると、グループ検索ができる。

グループ検索の利点は、全検索に対して、対象データ数が少なくなるので、必然的に検索結果が少なくなるということだ。また、グループ内には性格の似たデータが登録してある。そのため、思いもよらない有益な検索結果が得られることがある。使い方次第では、グループ検索が最も有効な検索方法だと言える。

なお、「3-3. 登録データベースについて」で触れた、リニューアルに際して追加された、「漢語辞典類Ⅰ」、「漢語辞典類Ⅱ」、「禅語辞典類」を検索する際には、グループ検索をすることを強くお勧めする。また、その際には、通常と異なり漢字1文字での検索をお勧めする。なぜなら、この3グループに登録されているデータはいずれも、辞書かそれに近い性格を持つので、あまり長い検索ワードでは検索結果が表示されない可能性が高いからである。

4-3. and 検索

電子達磨#3で検索するコツの最後は、and 検索の活用である。and 検索というのは、インターネットの検索でもよく用いられる検索方法で、複数の検索ワードのすべてを満たすものを、検索対象とする検索方法である。やり方は簡単で、検索ワードをスペースで区切るだけである。

例えば、電子達磨#3で「驢馬」と検索すると13件の検索結果が表示される。



驢馬	風流袋
百城烟水蛟螟眼、五十三人驢馬群〔貞血書華嚴〕	點綴集
橋上祗觀驢馬跡、誰人敢向御街行〔聯中趙州石橋頌〕	點綴集
【五七〇】人倒騎驢圖 道閑請 倒騎驢馬、驢馬弄蹄。吟行何處、南北東西。 一思文閣出版p.388	欠伸稿 坤

電子達磨# 3 禅語漢語考釈支援システムに関して

次に、「驢」と「馬」の間に「 」スペースを入れて検索をすると、検索結果は181件に増える。

検索結果	所属
認驢作馬	虚堂録翠耕
驢腮馬頰得人憎	虚堂録翠耕
白雲又道、直饒一毫聖凡情念頓盡、亦未免入驢胎馬腹	虚堂録翠耕
打驢聽馬知	虚堂録翠耕
被他移入驢胎馬腹裏、卒難得出	虚堂録翠耕
驢事未去、馬事到來	虚堂録翠耕
馬頰驢腮	虚堂録翠耕

このように、and 検索を行うと検索結果が増えてしまう。しかし、漢文の場合、同じ意味であっても、語順が入れ替わっているということが多々ある。いくら検索をかけても検索結果が出てこないのに、and 検索をしたら、すぐに求めていた検索結果が見つかったという経験は幾度もある。目的の検索結果が見つからず困ったときにはぜひ、and 検索を試していただきたい。

以上、電子達磨# 3 で検索する際に試してほしい検索方法を3つ書いた。それぞれを単独で試すのもいいだろう。また検索結果が多い場合にはグループ検索を and 検索で行うというのも、効果的である。

他にも検索する上でのコツがあるかと思う。大切なのは何度も何度も、検索して試行錯誤し、自分にあった検索方法を見つけることである。

おわりに

以上、電子達磨# 3 の利用方法に関して説明した。上にも書いたが、今回は初めて電子達磨を利用する人を想定して説明している。そのため、電

電子達磨#3を利用していくうちに、新しい問題に直面することがあるだろう。あるいは、「こんなデータが検索できれば、もっと便利になるのに」ということもあるだろう。また、検索データのミスや、検索結果画像の不具合を見つけることもある。そういった場合には、ご一報いただけると大変ありがたい。連絡先は、最後に記す。

電子達磨#3は非常にシンプルなデータベースである。その分、いろいろな利用方法が考えられる。また、まだまだたくさんのデータを搭載することもできる。そういった意味では、ユーザと共に完成を目指すデータベースであるといえる。今後とも変わらず、ユーザ各位のご助力を切に願う次第である。

電子達磨#3の不具合や疑問点、データのリクエストなどは下記メールアドレスにお送りください。

kokuze@hanazono.ac.jp